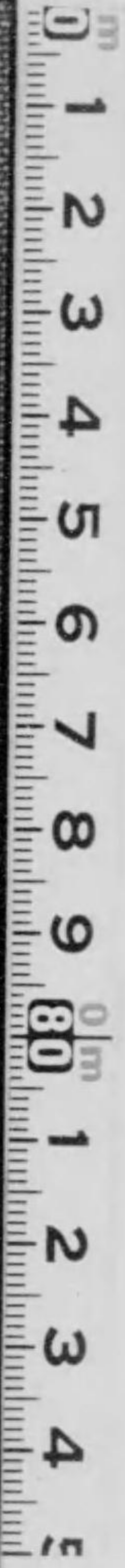


253
326



始



43787

藝術教育思想史

小西重直 序
關 衛 著
文學博士



厚生閣出版

1925

大正
14. 11. 7
内交

序 文

カントは其の第三批判に於て、人の作れる藝術品を鑑賞する場合に、其の中に、自然美の麗はしき姿も斯くやあらんと想像する時に、吾々はほんとうに藝術品を味ふことが出来る。又自然美を鑑賞する場合には、あゝ此の麗はしき自然の姿、さも人の作れる藝術品の様であると嘆賞する時に、ほんとうに自然美を味ふことが出来るといつたが、藝術美と自然美とは客觀的對象としては差別があり互に相異なるものであるけれども、主觀的な鑑賞者の精神的對象の方面に於ては實に密接な關係を有するもので、殆んど相分離し得ざる體驗である。

現代の藝術教育の原理と過去の藝術教育の思想史は客觀的には互に異つて居る文化的產物である。併し彼等兩者夫れ自身に於ては殆んど一つの體驗と見てもよい。體驗の内容に於ては異なるけれども兩者は全體としては切りはなすことの出来ぬ關係に居るものである。一つの思想が自分丈のものとして固定せず、自分に關係して他の思想が創造さるゝ様な生産力を有する時に、夫れは眞の文化的思想である。新しく考へ出だされた思想は大空より飛び來るものではない。夫れは何等かの所縁によつて自分より以前に生れた思想と關係して創造さる

いものである。従つて現代の藝術教育の原理を理解するには過去に於ける藝術教育の思想を
翫味せねばならない。其の文化的意味を有する過去の思想は決して過ぎ去つた時代の記念碑
ではない。夫れは現在と未來に關係して新しきものを創造し得る創造原理としての力を有す
るものである。此の源泉の清水を味はずしては到底現代の思想の味が味はれ得ないのである。
關兄は篤學の士である。曩きには圖畫教育の方面より藝術教育論の著あり、次に藝術教育
大觀の大著を出だし、今又藝術教育思想を大成し、此の方面の思想史を斯界に紹介さる。藝
術教育を美育として益々正しき方向と方法とを以て發展せねばならぬ現代の教育界に對して
まさに大なる貢獻といふべきである。同兄と多年の知己たる私は此の書の公刊に當り一言す
ることを許されたるを非常の光榮として感謝せざるを得ないのである。

大正十四年九月

洛北塔ノ段

小西重直

自序

人間性完成の一方面としての藝術教育には、古來幾多の變遷が繰返されたのであるが、日
本に於ては、藝術教育は教育の新生面として今や黎明の空を仰いで進んで居る。此の新興教
育の學的研究には種々の方法があるが、藝術教育が今日迄に發達した徑路に就き、史的研究
法を適用し、教育の過去現在を明かにし、進んで其の將來を豫測するのも一方法である。彼
の獨逸のリヒターの如きは、一九〇九年に於て、既に藝術教育思想の發達に關する研究を公
刊して居る。けれども斯かる藝術教育の教育史的研究は、日本には未だ一も見當らない。こ
れ余が菲才をも顧みず、藝術教育思想史の纂述を企圖した所以である。

然り乍ら、余は歴史家ではないから、本書の刊行に際しても歴史家としての發言を有しな
い。併し余は教育を愛し藝術を熱愛するものである。古來理想に生ける大教育家の飽なき憧
憬の精神や、大藝術家の崇高なる殉教者的精神に觸れ、純真なる感激を感じ、神我と相通じ
て顫動し、絶えず自己の生を大きくしたい。純真なる没我的態度に於て彫み上げたミケラン
ゼロの藝術は、石に残つて永遠に人間を感化して居る。藝術の背後には人間性完成の一大秘

訣が潜んで居る。愛と眞理の精神に燃えたベスタロッチの藝術家的犠牲の生涯は、永遠に後世の教育家を鼓舞するに足るものである。偉大なる藝術家の精神と、偉大なる教育家の精神との間には、永遠に人間を啓蒙せしめ解脱せしむべき共通な藝術的靈活力が流動して居る。

○ 人間性が教育に依つて進善すべく、又藝術に依つて完成せらるゝ事を考へると、吾々の眼前に將來幸福なる人間の世界が展開して居るのを覺え、如何にも頼母しい感がする。

教育と藝術とは相愛一體とならなければならない。教育家は藝術家となり、藝術家は教育家とならねばならない。現代の教育家が、眞に藝術的(藝術家)精神を體得する迄は、つまり教育と藝術とを一人にして合體するに非ざれば、全ての人間は救はれないのである。余は固より獨立自由の邦土を有する藝術の世界と、教育の世界とを同一視するものではない。また教育の世界に於ては、藝術は教育の理想の指示する軌道を活躍しなければならぬことも知つて居る。併し純眞な没我的なる藝術家的精神は、教育機關の活用者たる教育家の全我を躍動せしめる動力となり、教育的精神に光と熱とを賦與するものであつて、彼のベスタロッチの藝術家的献身の生涯は、即ち之を證明して居る。吾々は幸にして幾多の藝術的文化財を有つて居るが、此の藝術的文化財を活用して人間性を陶冶し、崇高純雅なる活動的人格を作り、更に新

しく價值ある藝術的文化財を創造せしめることは、藝術教育家の腕に委ねられて居る。

思へば西洋藝術教育思想史の研究は困難なる仕事である。少くとも人類の建設した藝術的文化の跡を尋ね、歴代教育家の思想を吟味し、其の背景としての文化現象を歴史的に考察し、傳説のブシケと同じ様に、反省の作用に依つて混沌無形の記憶内容を整理し、蟻の如き忍耐力を以て之を遂行しなければならぬ。アルベンの連嶺の様に、世界文化の地平線上に聳立する西歐の藝術的文化を見よ。目覺しい莊嚴である。ダンテ、ラファエル、沙翁、ミルトン、ゲーテ、シルレル、ラスキン、ベエトオフェン、イブセン、トルストイ、古今の大藝術家は總て人生の大教育家である。テチスの海の様、深い人間愛の精神を以て、教育の爲に犠牲の生涯を送つた西歐の教育家を見よ。目覺しい深刻である。ソクラテス、コメニウス、ルッソー、ベスタロッチ、ヘルバルト、フレエベル、古今の大教育家は總て人生の大藝術家である。藝術は教育を生み、教育は藝術を生む。藝術家は人間の魂を充實せしめ、精神を豊富ならしめ、藝術力に依つて文化の向上を計るを目的とし、教育家は人間性を完成し、價値ある人間を作り、人間性に依つて文化の向上を計るを目的とする。藝術家は生命なき質料を形成して之を靈活し、教育家は生命ある人間に質料を形成し活用する道を傳へる。併し兩

者共に人間の精神を充實せしめて、文化の向上を計る藝術家的教育家であり、また教育家的藝術家である。

思ふに藝術教育思想史の研究は、古來人類の最大遺産たる藝術的文化と全人間との教育的交渉を開いて、人間性完成の本領を儘かにすることに在らねばならぬ。蓋し學校教育の圏内に藝術を導き入るゝに至つたのは極々最近のことである。併し乍ら、余は本書が人類の最大遺産たる藝術的文化財と歴代人との教育的交渉を開明し、人間性完成の本領を儘かめたものと自認するものではない。本書は初等教育に携はれる教育家達や、中等教育に携はれる教育家達や、一層高等な専門教育に従事せる藝術教師や、或は深く藝術教育を研究せんとする人達の参考階梯として、西洋に於ける藝術教育思想の發達隆替を略述したものには過ぎない。脱稿した後で読み返して見て、不満足な點が甚だ多いのである。叙述の體裁に關しても、一章々々に結論を加へ、最後に藝術教育發達の歴史的條件を抽出しようと思つたのであるが、併し僅少な研究材料を基として、其の中から或事柄を抽象しようとするれば、往々にして甚しい獨斷に陥り易く、殊に藝術神乃至教育神に對して罪を買ふの危險を招致する。故に本書に於ては不本意ながら此の種の結論をも避くることにした。何れ東西の藝術教育思想史を完成し

た曉に是等の不備を江湖に謝するの機會があらうと信ずる。

最後に一言する。本書を纂述するに當つては、東西幾多の先輩諸學者の文献に負ふ所が多大である。殊に余の今日迄の教育學的纂述に於て小西先生の御指導を仰がないものはない。茲に其の學恩に報ゆる次第である。のみならず、挿圖寫真版などの蒐集に助力を與へられた人達に對しても感謝の意を表はして置く。神は正しく努力するものに文化の粹を創造せしめる。

一九二五年十月十日

長崎活水丘上

關 衛 識

次 目 版 真 寫 入 挿

第一圖	ホメル	五
第二圖	圓板を投ぐる者	一四
第三圖	シセロ	一九
第四圖	ダンテ	三五
第五圖	コメニウス	四六
第六圖	ルツソー	六一
第七圖	ゲエテ	七一
第八圖	シルレル	八二
第九圖	シルレル自筆の書翰	九七
第十圖	ベスタロッチーの藝術家的献身	一〇七
第十一圖	ヘルバルト	一二〇
第十二圖	ラスキン	一四八
第十三圖	フォルゲルト	二四八
第十四圖	ミュンステルベルヒ	二八二
第十五圖	現代の學校劇	三三七
第十六圖	著者近撮	三八七

目次

第一章 上古の藝術教育

藝術教育の源流(一)——善而美の理想(三)——古代希臘の教育(四)——體操と文藝(五)——
スパルタの教育(七)——アテネの教育(七)——プラトウの思想(九)——アリストテレスの思
想(一一)——アテネ市民と藝術教育(一一)——希臘人の舞蹈に就て(一三)——舞蹈による教
育(一四)——羅馬人の精神(一七)——羅馬の藝術教育(一八)——シセロの思想(一九)——セ
ネカの思想(二〇)——クインチリアヌスの思想(二〇)

第二章 中古の藝術教育

中古に於ける基督教の思想(二一)——藝術と宗教との關係(二三)——藝術に依る宗教的教化
(二四)——僧院學校及び寺院學校の藝術教科(二六)——アルクイン及びラバヌスの思想
(二七)——武士道教育と藝術教育(二八)——中古の學校劇に就て(三〇)

第三章 文藝復興期の藝術教育

文藝復興とは何ぞや(三一)——人文主義と藝術教育(三三)——伊太利の人文主義(三五)——

ベルゲリオの思想(三七)——ビヤトリノの思想(三七)——ベギウスの思想(三八)——佛蘭西の人文主義(二九)——英吉利の人文主義(三九)——獨逸の人文主義(四〇)——アグリコラ及びエラスムスの思想(四一)——宗教改革期の藝術教育(四一)

第四章 十七世紀の藝術教育

教育思想の新傾向(四五)——コメニウスの思想(四六)——ロックの思想(四九)——ミルトンの思想(五〇)——ボオルロワイヤールの教育(五一)——フェネロンの思想(五二)——敬虔派の心情陶冶(五三)——シャフツベリーの思想(五四)——十七世紀の學校劇に就て(五六)

第五章 十八世紀の藝術教育

教育の世紀(五八)——啓蒙思想と藝術教育(五九)——自然に歸れ(六一)——汎愛派のパゼドゥ(六四)——汎愛派と藝術教育(六四)——新人文主義とは何ぞや(六五)——新人文主義と藝術教育(六七)——レッシングの思想(六九)——ヘルデルの思想(七〇)——ゲーテの思想(七一)——ファウスト及び教育州の藝術教育(七四)——藝術的文化とシルレル(七八)——シルレルの藝術教育論其の一(八二)——シルレルの藝術教育論其の二(八五)——シルレルの藝術教育論其の三(九〇)——シルレルの藝術教育論其の四(九七)——ウォルフの希臘的教化(一〇三)——ジャンパウルの思想(一〇五)——ベスタロッターの思想(一〇七)

第六章 十九世紀の藝術教育

科學の世紀(一一)——獨逸の藝術的文化(一二)——獨逸の浪漫主義と美的道德(二一八)——第一類型(二一八)——第二類型(二一九)——第三類型(二二〇)——ヘルバルトの思想(二二〇)——グラゼルの思想(二二三)——フレベルの思想(二二七)——佛蘭西の浪漫主義に就て(二三〇)——藝術的文化に關する簡單なる比較(二三三)——藝術的文化と國民生活との隔絶(二三四)——物質萬能と藝術との關係(二三五)——自然派藝術の勃興と其の推移(二三七)——ソオヴァジョーの自然派觀と教育問題(二四一)——藝術教育への國民的覺醒(二四五)——英佛兩國民の覺醒(二四六)——ラスキンの思想(二四八)——モリスの藝術社會主義(二五一)——クレインの汎藝術主義(二五二)——フワイエーの思想(二五四)——ギョーの思想(二五七)——十九世紀の學校劇に就て(二六三)

第七章 二十世紀への過渡思想

世紀末の情調(二六五)——獨逸の世相と藝術教育への覺醒(二六八)——藝術的文化の復活(二六九)——理知主義に對する挑戦(二七二)——教育者としてのレムブラントの思想(二七四)——コンアトランゲの藝術教育論(二七九)——リヒトワルクの藝術教育論(二八三)——藝術教育運動の勃興及び理由(二八七)——ドレスデンに於ける藝術教育大會(二九一)——ワイマーに於ける藝術教育大會(二九四)——ハンブルグに於ける藝術教育大會(二九五)——藝術教育大會通評(二九八)

第八章 現代藝術教育の諸相

二十世紀(二〇三)——新理想派の藝術觀(二〇七)——新理想派と藝術教育との關係(二二三)
——藝術教育の本質論(二二五)——第一類型(二二八)——第二類型(二二八)——第三類型
(二二八)——第四類型(二二九)——第五類型(二二九)——藝術的享樂論(二二九)——ランゲ
の藝術的享樂論(二二〇)——リヒトワルクの藝術的享樂論(二二三)——ライシングの藝術的
享樂論(二二四)——藝術的創作論(二二五)——ドレスドナーの藝術的創作論(二二六)——リ
ヒターの藝術的創作論(二二二)——藝術的享樂及び藝術的創作の調和論(二二三)——シユマ
ールゾーの內的模作論(二三四)——イッチナーの藝術的人格陶冶論(二三六)——リレンデの藝
術的人格陶冶論(二三七)——ザルウィルクの完人教育論(二三九)——教育に於ける藝術と道
徳との關係(二四一)——藝術的享樂說と道徳(二四五)——藝術的創作論と道徳(二四六)——
フォルケルトの思想(二四八)——ウーバーの藝術教育論其の一(二五六)——ウーバーの藝
術教育論其の二(二六二)——ウーバーの藝術教育論其の三(二六九)——ウーバーの藝術教
育論其の四(二七八)——ミンステルベルヒの藝術教育論(二八二)——ナトルプの藝術及び
藝術教育觀(二八五)

第九章 現代藝術教授の諸問題

陶冶せられたる感官(二九三)——フォルクマンの見方の教育(二九四)——リヒトワルクの藝

術品觀察の修練(二九五)——藝術的作物の説明に就いて(二九八)——藝術品の觀察及び説明
に關するラインの意見(二九九)——藝術品の説明に關するフォルケルトの意見(三〇一)——
國語教授の新傾向(三〇五)——ヒルデブラントの藝術的國語教授論(三〇七)——ウォルガス
ト及びハッケンベルクの國語教授論(三〇九)——エルンスト及びウエツオルトの國語教授に
關する見解(三一〇)——文藝教授に關するレーマンの見解(三一一)——圖畫教授の新傾向
(三一一)——英國に於ける圖畫教授の傾向(三二四)——米國に於ける圖畫教授の傾向
(三二五)——獨逸に於ける圖畫教授の傾向(三二七)——ヒルトの圖畫教授論(三二八)——ラ
ンゲの圖畫教授論(三一九)——ケルセンシュタイナーの圖畫教授論(三二〇)——音樂及び唱
歌教授の新傾向(三三二)——グードルの音樂的陶冶(三三四)——ヨハンゼンの唱歌教授論
(三三六)——舞踊及び體操教授の新傾向(三三九)——學校劇の新傾向(三三三)——米國の兒
童劇に就て(三三四)——シカゴ大學の學校劇(三三五)——教授の劇化問題(三三七)

第十章 藝術教育研究の近況

心理學上の問題(三四〇)——アルペンの研究(三四一)——シュミットの研究(三四二)——ミュ
ラーの研究(三四三)——研究要目(三四四)——被験兒童(三四四)——實驗に使用したる繪
畫(三四四)——第一群の繪畫(三四四)——第二群の繪畫(三四五)——第三群の繪畫(三四五)
——繪畫の内容に依る判斷(三四五)——繪畫の形式に依る判斷(三四七)——成人の美的判斷
に就て(三四七)——第一階段(三四八)——第二階段(三四八)——第三階段(三四八)——第四

階段(三四八)——第五階段(三四八)——兒童と成人の美的判断比較(三四八)——性の差異と美的判断との關係(三四九)——ミューラーの研究要括(三四九)——バイントナーの研究(三五〇)——デュニングの研究(三五三)——目的と方法(三五三)——研究の結果(三五四)——美的判断の三階段(三五五)——第一階段(三五五)——第二階段(三五五)——第三階段(三五五)——教育學的結論(三五六)——ハセロットの研究(三五六)——目的と方法(三五七)——第一問題(三五七)——第二問題(三五七)——第三問題(三五八)——研究の結果(三五八)——兒童の美的鑑賞力と教育との關係(三五九)——兒童の繪畫に關する研究(三六一)——ビュルク等の研究(三六三)——シュイテン及びロブション等の研究(三六五)——ロレタの研究(三六八)——ライの研究(三六九)——レヴィンシュタインの研究(三七二)——ケルセンシュタインの研究(三七五)——ホルの研究(三七九)——ケーネンの研究(三八三)——兒童の藝術的能力と教育との關係(三八七)——藝術的活動の發達階段(三八八)——藝術的稟賦の分析と教育との關係(三九〇)——繪畫的稟賦の不完全なる原因(三九一)——モトマンの研究(三九二)——繪畫創作の心理的分析及び價值(三九三)

藝術教育に關する參考書目

藝術教育思想研究

第一章 上古の藝術教育

藝術教育の源流

藝術教育の起源は、これを藝術の起源と同時に考へて宜しい。ヴントの民族心理的考察に依れば、藝術本能に促がされて、偶然に形成された美しいものを、更に繰返して模倣せ、形成せんとする所の藝術的活動の中に、藝術教育の萌芽が含まれて居るのである。併し藝術の起源といふやうなものは、民族心理學や美學及び藝術史の方面に譲り、吾人の攻究せんとする藝術教育思想史上に於ては、敢へて深くを問はないのである。

有史時代に入つてからは、藝術を教育に利用することは、古代東方諸邦に於て、特に僧侶の間に行はれて居たのである。即ち古代の埃及、メソポタミア、フェニキア、ヘブライ等の國々に於ては、一般に僧侶が宗教及び教育を掌り、従つて宗教的教化の機關として藝術を利用したのである。藝術教育は宗教々育から分化したものと見ることが出来る。就中古代埃及に於ては、國王は神の子孫として最も尊ばれ、これを輔佐する僧侶は、單に知識界の代表であつた許りでなく、實に教育者として最高の地位にあつたのである。埃及人は繪畫や音樂などの藝術をトウト神の恩恵に歸して居たが、是等の神々に捧げた二冊の讚美歌書が現存して居る。宗教的音樂は埃及では政府直屬の演奏隊の掌る所であつて、其の中には「歌手長」(Pa' Hestari)といふ者が居つて、音樂を奏して神に仕

へ、音楽を奏して國王の心情を慰撫するのみならず、實に音楽の師匠として技能を授くる外に、子弟の爲に音楽的陶冶を施し、以て宗教的美的感情を養つたのである。換言すれば、埃及の音楽藝術教育は、一般に貴族僧侶の爲に行はれたもので、彼等は宗教的音楽の鑑賞に依つて、神に仕ふるの外に自己の思想、感情、欲念の満足を得らるゝものと信じ、實際これに依つて精神の修養と慰安とを得たのである。チオドラスの如きは、古代埃及には音楽は存在しなかつたであらうと思はしむる程低級であつたと論じて居るが、埃及音楽の藝術的價値は別問題として、兎角、宗教の一方面としての音楽、宗教的陶冶の一方として音楽藝術教育が行はれて居たことは事實であつて、之から眞に人間の美性陶冶を目的とする藝術教育が分離し出づる迄には、實に長歲月を要したのである。斯様に宗教々育と藝術教育との未分化状態は、單に埃及に見らるゝのみならず、太古の東方諸邦に一般に現はれる所である。後世に及んで、彼の希臘のプラトウの思想に現はれた、善と美との朦朧たる融合状態の如きは、太古既にペルシャの「ゼンダベスタ」(Zend-Avesta)といふ經典の中に現はれて居るのである。この經典は紀元前一千年頃バクトリアの聖人ザラツストラの作つたもので、其の内容は、作者と善神との對話よりなり、その問答に依つて人間を善美の境涯に導かんとする様にしたものである。人間は在世中常に悪神の攻撃を受くると同時に、善神の加護を受けるのであるから、ザラツストラは夙に善神を崇拜し、その加護に依つて、邪惡を離れて善行につき、虚偽を去つて眞理に従ひ、醜汚を洗つて審美の境涯に入り、以て悪神をして危害を加ふるの餘地なからしむべきを唱道して居る。依之、ゼンダベスタに記する所の道德觀念の頗る高尚なるを見るべく、ザラツストラの所謂善神——彼は宇宙間に善惡の二元力あることを假定し、此の二元力は永久に相争闘するものと認めて居る——

は眞善美の表徴として認めらるべく、殊に善美の代表といふ點を重視して居る。人間が善神の境涯に進入すれば、悪神の危害と攻撃とを免かれることが出来る。善神の世界は悪神の手の及ばない城廓であるといふ見解の如きは後世獨逸のゲエテの傑作「ファウスト」に現はれた思想、即ち官能の世界、肉慾の世界に於てのみ勢力を逞しうする悪魔メフィストが、既に美的世界に進出したファウストに危害の爪牙を加へることが出来なかつたといふ見解と類似して居る。ザラツストラの思想の如きは、藝術教育思想の見地より考察するも決して閑却せらるべきものではない。

東方諸邦、殊に埃及に源流を發した藝術教育は、フェニキア人等の手に依つて、他の文化と共に、當時蒙昧な四隣民族に傳播せられた。之に接した優等反應性の民族、就中北方の希臘人の如きは最も能く東方諸邦の文明を吸収して發展したものである。「埃及に歸れ」といふやうな聲は、當時未だ幼稚であつた北方希臘思想家の間に高調せられた叫びであつた。従つて埃及のアイシス神社の如きは、當時天下の學者が集つて學究に熱中した所であつた。希臘のピタゴラスの如きも埃及に遊學し、歸國して後、音楽教師は律動と調和とを兒童の精神に親熟せしめるのであるが、之は兒童をして愈々温順に優雅に調和的に、従つて言語動作の兩者にそれを役立たしめんが爲である。何となれば人間の全生命は優雅と調和とを必要とするからである」と唱へた。プラトウやヘロドトスの様な人達も皆埃及に遊學したのである。後に埃及のアレキサンドリアに學府が開かれてからは、希臘をはじめ、北方諸邦の學者は陸續として此の地に遊學するに至つたのである。

善而美の理想

古來宗教の隸屬として僧侶の間に培はれた藝術教育は、東方諸邦文明の北漸に伴れ、希臘

に傳播するに及び、有意的具案的に實現せられ、所謂「善而美」の理想を形成するに至つたのである。即ち埃及やバビロニアの文明が老熟に傾いた頃、小亞細亞の西岸ミレトス市の文化は、春情鮮やかな希臘人の憧憬する所となつて居たが、間もなく希臘の土に移植せられ、其の優美なる民族性に育まるゝに至つたのである。希臘の清淨なる蒼穹、温暖なる大氣、豊饒なる地味、凡て是等の風土は、人間の肉體と心靈の調和的發育に適して居た。されば健かに發育した活力に富む希臘人の身體は、明瞭なる思想、善良なる意志、優美なる感情と調和して、所謂希臘人の特質を定立せしめ、斯くて其の言語、詩文、音樂、彫刻、建築などに關する技術及び科學をして、概して優秀なる形に發展せしめたのである。

かゝる希臘人の身上の特質が、自ら其の教育の目的決定に關與すべきは見易き理である。希臘思想によれば、完全なる人間とは、即ち身心共に健全にして、善美の觀念に従つて育成せられ、品位があり、端正、優雅、快活の態度を有し、以て能く内的調和の發達を表示し、其の全貌をしてたゞよく發現したる機械的人格たらしめず、十分進歩したる自由の發現として見るに足る勇氣、溫和及び靜思の風を表現せしむるものを謂つたのである。従つて希臘の教育が斯かる人間を育成せんとし、個人のあらゆる天性及び能力を圓滿に、調和的に發達せしめ、人間性を其の凡ゆる方向に就て高尚にし、完美ならしむることを最高の理想としたのは自然の理である。これ即ち「善而美」の謂であつて、實に希臘思想の骨子となるものである。

〔古代希臘の教育〕 古代の希臘人は、教育を以て人間の實益の爲にしたのではなかつた。即ち教化を人間の粧飾としたのである。恰も彼の藝術家が實利的打算を離れ、美の爲に藝術的創作に従ふが如く、實利的目的に對



HOMER

する無關心の遊戯となしたのである。併しそれは敢て教育のみではなかつた。一切の精神的事業を、何か外の目的を達する爲の手段となすのではない。他の民族のやうに、宗教上の禮拜又は實用生活の用に供するのではない。其の事業そのものを一の目的と心得て居た希臘人のこの特質は、希臘人をして凡ての文明世界の指導者たらしめた所以である。希臘人の教育は、身心の調和的に發達した圓滿美妙なる人格を作るといふ點に於て藝術的であつた許りでなく、教育事業其の物をば、實益を離れた無關心の遊戯として實現した點に於ても藝術的である。故に希臘人は、教化も強迫的態度を以て傳授せられ得るものではないといふことを熟知して居た。乃ち自由意志に基づいて學術を修むるものは、また能く創造的たることが出来る。學習者が精神内容を支配すること益々自由に且つ益々創造的たるに伴れ、教授は益々有効になるものと思惟したのである。けれども希臘人の自由の觀念は決して無規律放恣の謂ではなくて、一定の規範、即ち善美の法則に従ふことに依つて、眞に自由なる活動をなし得るといふ點に存したのである。かく希臘の教育は、個人性の完全圓滿なる發育を理想としたけれども、歸する所は、之を彼等の所謂理想的國家の繁榮進歩に供したのである。それは恰も風景畫の創作に従へる藝術家が、繪畫構成要素たる個々の花、個々の樹木の特性を完全に描現し、以て是等の個物の渾然調和した圓滿美妙なる藝術國を作らんとする藝術的活動と、其の理想に於て、其の方法に於て、全然同じものであつた。希臘人の教育は、實に廣義の藝術的活動に類するものと解することが出来るのである。

體操と文藝 「優美なる精神は優美なる身體に宿る、故に圓滿美妙なる人格を陶冶せんが爲にも、先づ身體を練らなければならない」かゝる考へから、身體と精神との調和的發達を尊重した希臘に於ては、自ら其の教育の

方便にも二様の區別を生じた。體操と文藝とは即ち是であつて、體操は身體を練り、文藝は精神を陶冶し、兩者相俟つて完全なる教育の理想に到達せらるゝものと考へられた。希臘人は體操の眞價値を知つて居た。彼等は體操を以て精神陶冶の基礎的要件たる身體の健康、強固、優美及び熟練を進め、身體をして公私生活上の活動に適せしむるものとし、人間をして忍耐、勇氣、克己の風を生ぜしむる上の重要手段とした。又愉快なる遊戯が、人間の想像及び思考の發達に貢獻あるを覺り、烈しい體操的運動の間に之を行ひ、運動の緩急の正しい更代に由つて身心の調和を生ぜしめようとした。けれども兒童の遊戯としては、之を體操の豫備たらしむるため、活潑なる運動を練習するに足るものを採用したのである。文藝の中では、音楽が最も重んぜられ、音楽的陶冶は、精神教育に必要と見做さるゝ總てのものを包含し、個人をして公共的精神的財産に對して多様繊細の受納力を得しむるを目的とした。音楽的陶冶は、最初には讀方、書方の教授及び音楽、唱歌の練習から成立し、知識の進歩に伴れて、漸次に其の教科を増加したのである。元來この文藝の源泉は、古來宗教の附屬として僧侶の間に傳はつて來た諸種の學術にある。詩人ホメールは是に統一と定形とを與へ、其の詩は當代の人々の理想を指示した許りでなく、精神教育の機關として、久しく希臘教育家の尊重する所となつたのである。ホメールは少年をして美的印象を感受し易からしむるを以て最高の事業と觀じ、知慮と共に圓滿心を尊んだ最初の藝術教育家であつた。斯様に體操と文藝とに依つて、個人性及び自治の能力を調和的に發育せしむる教育は、古代に於ては希臘特有のものであつたが、併し教育の方法は、其の異なる種族間に於て、又其の發達の異なる時期に於て、多少の變化は免かれなかつた。即ち理想は常に同一であつても、之を實現せんとする方法に至つては必ずしも一様であるとは謂は

れない。故にドリア種族の代表者たるスパルタ人と、イオニア種族の代表者たるアテネ人に就て論述しやうと思ふ。

スパルタの教育

スパルタに於ては、大立法家であり大教育家であつたリコリゴスが、時勢の必要上から教育を政府の掌中に握り、國家の生存の爲には、好んで自己の生命を捧げ、勇敢なる犠牲的精神を以て國法に殉ずるを善美の極致と觀する人間を作るのを教育の目的とした。而して教育の方法には色々の種類があつたけれども、就中體操的習練は最も主なるものとせられ、舞踊の如きも軍事的のものが尊重せられた。スパルタに於ては文藝は餘り重んぜられなかつたが、併し音楽のみは大に尊ばれたのである。蓋し音楽は能く人間の感情を鼓舞し意志を勵まし、勇氣を保持せしむるに足るからである。故に音楽は體操及び軍事的舞踊と結合して用ひられ、兒童期の者にも器樂を修練せしめたのである。男子と同じく女子にも、嚴格なる體操及び音樂的陶冶が課せられたから、スパルタ女は體質の強健、容貌の優美なる點に於て、希臘女の冠たりしのみならず、貞節を生命とし、家事を整理し、愛國的熱情を發揮し、其の子の能く國の爲に身を犠牲に供するに至善至美と觀するの精神に至つては、後人をして壯烈の感を抱かしむるに足るものがある。彼の數の理論に名高いピタゴラスの如き、此の種族中から出た最初の教育理論家であるが、彼及び其の學派の者と雖も、やはり體育と音樂的陶冶とを高調重視して居たのである。

アテネの教育

希臘の眼といはれた雅典に於ては、政治上に於けると同じく、教育上に於ても自由なる個人性の權利を尊重し、身心の活力及び性質を自由に、且つ平衡に發育せしめ、以て内外の十全なる調和を生ぜし

めようと努め、彼の嚴格なる法則に由つて人間性を其の幼時より規定するスバルタ風の教育陶冶に反對したのである。乃ち國家は唯各人に其の子女を教育するの義務あることを忠告し、文藝と體操との教授を受けしむべき事を命ずるに止まり、教育に關する個々の點は全然父母の注意に任せただのである。雅典初期の教育に於ては、内なる精神を陶冶するにも、禮儀ある舉動及び謹嚴なる訓練に慣れしむることに依つて、それを善美の方向に誘導し得るものと考へたが、此の點から觀れば、當時の教育が人間の舉止動作に迄も美的態度を要望したことが明瞭である。雅典の教育も段々と後期に移るに伴れて、兒童教育は家庭を離れて學校の事業となり、體操は次第に國家的事業たるの性質を減少し、音樂はたゞ交際及び娯樂上の手段として行はるゝに至つた。雅典の市民は、實利の爲にする教育は、平民の學をなす者には必要であつても、決して高尚なる市民の學ぶ精神ではないと考へたのである。即ち學術を學ぶのは其の學術の達人たらんが爲ではない。音樂を學ぶも專門の音樂家となるを要しない。文學を學ぶも文學者となるが爲ではない。要はたゞ其の人品に徹底するにありとした。人品に徹底するといふのは、教育を受けた者の内心が堅固であり、思想が活潑であり、思慮が常に周密であつて、容易に外物に動かされず始終欣然として樂しむ所あるの謂である。併し雅典市民の教育が、全然實利的動機を含まなかつたといふ點に關しては、更に一步進んで考察する必要がある。固より彼等の教育が實利を離れた無關心の遊戯であつたことは確かであるが、併し彼等市民と雖も、一朝事ある際には攻城野戰の士とならねばならず、平生には國法を理解し、立法にも參與せねばならず、また各種の會合に出で、文章や辯舌の力を使用せねばならなかつた。斯かる場合に於て、彼等の平生學習した事柄が役に立たなかつたとは言へない。否々彼等は社會に立つて、其の品位ある

修養の結果を示したのである。實際に於ては人格の裝飾として、修養の爲に、無關心の遊戯として學ばれたものが、實に功利的に利用せられたのである。雅典に於ては、藝術に關する知識なくしては、閑暇ある階級間に處して、品位ある人格者として交際することが出来なかつた。それにも拘らず、彼等は常に一藝一能の人たるを賤し、専門の技術家たるは平民又は奴隸の仕事とし、市民として一藝一能に達せんとするも、それは決して其の技能に熟達し、之に依つて生活を計らんとするのではなく、全く之に依つて市民としての圓滿なる發達をなし、美的情操を養ひ、品性を高尚ならしめんことを目指すべしとし、技術を學ぶも職工とならざる限りに於て學ぶべしといふ主旨であつた。故に雅典市民の間に生じた修養といふ考へは、人文主義の淵源となり、其の後教育上の一流派を形造るに至つたが、斯様な考への一起因は、雅典の社會組織に於て、市民の階級が貴族的地位を占め、治者階級として、被治者たる平民と奴隸との上に臨んだ點から生じたもので、従つて雅典の人文主義乃至藝術美を教育に適用する教育は、即ち貴族的傾向を帯びて居たのである。

プラトウの思想

雅典に於ては幾多の名高い理論的教育家を輩出したが、就中藝術教育思想に關係ある者はプラトウである。彼は紀元前四世紀頃に活動した人であるが、其の教育思想に依れば、人間陶冶の理想は、人をして道徳に導き、善美の理念を實現するにある。人は美の道を通るに非ざれば、善の域に達するを得ずと言つて居る。プラトウは其の理想的國家論に基づいて、大いに教育を重んじたけれども、彼れの所謂教育は上なる二階級に止まり、農工商の最下級には及んで居らない。彼れの説く所に依れば、上なる二階級に屬する者は、幼少より國家の學校に入つて精神及び身體の修練に従事しなければならぬ。體育の爲には體操を勵み、精神を

修むるには、先づ徳を樹つるに益ある神話、詩歌、音樂、數學を學ばしめ、漸次に哲學に進ましむべきである。然るに若し善美の理念實現に障害となるものがあるならば、それは一部の精神的性質と、一部の身體的性質とに求むべきである。然るに斯かる障害を防止する自然的方便は身體と精神との運動である。身體と精神とは一樣なる運動に於て保たるべく、其の相互活動に由つて一樣に、強く且つ健全に發達すべきものである。故に體操と文藝に音樂の調和的活用は、教育上無條件に要求せらるゝ所である。體操的習練をなましむるに當つては、身體を強壯、健康、優美ならしむるを最終の目的とせず、常に之を心的調和定立への手段と觀じなければならぬ。音樂的陶冶の眞の目的は、快樂に非ずして善美の正しい模倣にある。而して最も善き人間を悦ばしむるが如き音樂即ち嚴肅にして勇將の泰然たる心情を模するものか、又は平靜溫和なるものを最も良しとする。音樂ほど人心を動かすものなく、又其の能く禮節、純粹なる嗜好、美及び徳に對する感覺を惹起し、罪惡醜邪に對する永續的敵意を注入し進歩せしむるを以て、之を教育の眞の根柢となすも差支へがない。音樂は理性上の教が未だ其の効を奏しない時に於て高尚なる衝動を發生せしめ、其の靈妙なる力を以て美及び善に慣れしむるものである。而して音樂の斯かる効果は、唱歌と舞踊との結合せしめらるゝ時に益々其の價值を發揮する。教育の目的、即ち人を徳に導き、善美の理念を實現する人格陶冶の爲には、音樂と體操とを正しく結合するを最も必要とする。體育への偏重は精神を粗野にし、高尚なる知識に關する興味を不可能ならしめる。身體の強健熟練は、そのみにては傲慢心を生じ、他を壓服せんとする傾を生ぜしめる。反之、音樂のみに偏する時は、柔弱無力なる心的動作に慣れしむるに至るから、體操に依つて補充されなければ、これまた教育の目的に適はない。プラトウは斯様に論

じ來たつて、藝術教育、殊に音樂教育は我が理想的國家に於ける教育の二つの主要手段の一であるといつたのである。

アリストテレスの思想

プラトウの弟子にアリストテレスといふ偉人が出現したが、彼れの教育論に依れば、兒童には、生活上必要にして有益なるものの中、身心を道徳に導くものを學習せしめねばならない。學問の動機は實益にあつてはならない。自由なる人間の爲には、事物に關する興味に基づき、或は交際のため、或は閑暇を有意義に消費せんが爲に研究せらるゝものゝみ價值がある。而して其の修むべきものとしては自由術を最も適當とする。文法、體操、音樂、圖畫は即ちこれである。少年の爲には特に音樂教授を必要とする。音樂は美的感情の陶冶に資すると同時に、徳育の教科目である。即ち心情及び品性に大なる影響を及ぼすのみならず、愉快なる休養の手段となり、閑暇の時を消費する價值ある方便となるものである。けれども吾人は是等の練習を専門の技師を養成するに必要な程度にまで進むるを不可とする。圖畫も亦物質上の利益の爲に學ばるゝを常とするけれども、教育上に適用する時は、物體の美に對する感覺を鋭敏ならしむるのみならず、藝術的作物に對する鑑賞力陶冶に有益である。併し卑穢なる言語と均しく、卑穢なる繪畫は兒童の還境から遠ざく可しと論じて居る。

アテネ市民と藝術教育

雅典市民の教育理想は、個人的には其の人間性全體を修養し、社會的には其の特權を有する社會的地位を確保し、學問、藝術の高く發達したる一の古典的な文化國を形成せんとしたものと云へる。併し乍ら雅典の藝術教育は、決してプラトウやアリストテレスの如き二三の哲人の所産にかゝるものでは

なくして、實に雅典市民全體の産物であると謂はなければならない。雅典の社會組織は、藝術教育の普及に甚だ好都合であつた。事實上雅典市民の餘裕ある人士は、日常の仕事は奴隷に任せて、日々公會所に集合し、時事問題を論評し、深遠なる學術や高雅なる藝術上の題目に就て討論した。乃ち學校に於ける文藝及び體操の修練は、學校を卒へたる後に於ても永く繼續し、所謂大人の自修娛樂となり、公會所は精神の修養所であり、新思想の源泉となり、體操場は彼等の消閑所であり、舞踊場であり、彼等は日々是等の公會所や體操場に會合して談話に依つて知識を擴め、舞踊をなし、音樂を奏し、斯くて藝術趣味を養成したのである。希臘人の公會所は實に現代に於ける「大人學校」たるの觀があつた。紀元前四百年代に造形的藝術教育の普及の著しかつたのも、實にこの公會所の媒介に依るのである。斯様に學校教育と社會組織及び生活の一致と相俟つて、更に文學美術の普及に力あつたものは、希臘全土の大祭典及び各國の祭典であつた。即ちオリンピアを始め、四個の國祭日には、盛大なる運動競技が行はれたのであるが、後には學者も亦其の研究の結果を公衆の面前に報告し、音樂戯曲も爰に演奏せられ、藝術家は其の作品を陳列し、宛然現今の博覽會乃至美術展覽會の如く、知識交換、美感養成の機關となり文化の發達を促がし、民族の間に一種の藝術的教化を強調せしめたのであるが、而もそれは祭典なるが爲に宗教上より神聖なる威嚴が與へられ、より強く精神的感化が偉大であつたと思はる。鋭敏なる美的感情に富んだ國民性と餘暇ある社會生活態とは、相俟つて雅典をば藝術的都市たらしめ、善而美の理想を實現せしめたのである。要言すれば、雅典に於ては自由市民たるの面目を保たんが爲に體操を行ひ、以て優美なる體格を作り、文藝を修めて卓越したる識見と情操とを得ることに努め、身心の調和的發達を望み、更に斯かる人格の集合よりなる一

超越した文化國を建設しやうとしたのである。即ち雅典の教育家は、優美にして知識ある人間を作らうとした。換言すれば、優美なる精神は優美なる身體に宿るといふ考へから、精神を優美ならしめんが爲にも、先づ身體を優美ならしめなければならぬ。それ故に體育を獎勵して身體の均齊調和せる發達を計り、精神を優美ならしめんが爲に音樂、彫刻を學んで秩序、規律、調和を愛し、心情を慰撫し、詩趣を解し、高雅なる思想を發起せしめ哲學を學んで眞理を究め、心性を多方面に發達せしめ、以て圓滿美妙なる人格を作り、斯くて一の藝術國を建設せんとするのは、彼等の究境の理想であつたので、この善而美なる希臘思想は、後世の基督教思想と共に、歐洲の教育思潮に影響を及ぼした二大潮流である。

希臘人の舞踊に就て

上古に於ける希臘の教育は、前述の如く體育と文藝教育とであつて、體育に依つて身體を鍛鍊し、文藝教育に依つて精神を陶冶したのである。併し乍ら希臘教育の根本思想は身心の調和的發展にあつたのであるから、身體と精神、體育と文藝教育とは不可分離の關係におかれた。文藝の中では音樂が最も重んぜられ、プラトウの如きは、體操と音樂とを正しく結合するのが教育上最も必要であると論じた。體操と音樂との渾然融和するものは舞踊に外ならない。従つて舞踊は希臘教育の精髓であつたのである。リアアシュンは希臘人が特に舞踊を熱愛せることを記し、希臘の各市に於ける最も高貴な、且つ最も偉大な人間は舞踊者であつた。彼等は之を恥とすることなく、寧ろ其の身分の高貴や名譽ある地位や、祖先の威名等よりも、この特殊の技能の熟練を有することを自ら誇りとしたと述べて居る。希臘の劇場は神殿のやうなものであつた。三萬の觀客は舞踊を觀覽することができ、公衆は終日其の席に坐したのである。希臘後期の優美な模倣舞踊の二に、アンテマと

満美妙なる人格を作らうとした希臘人の藝術教育に關しては、爰に尙ほ附説したい事柄がある。一體藝術が戀愛的色情的挑發の目的に屈從して居る間は、如何なる方法を以てするも、到底其の民族に有利な影響を與ふことは出来ない。即ち性慾的快樂のみを語つたり、歌つたりする舞踊や、戯曲や歌唱などは、知識や業務に對する熱愛の念を、甚だしく微弱ならしめる。故に色情挑發的暗示に充てる藝術及び社會状態に親熟せる種族は、さうでない種族に比すでは、生存競争上必ず劣者たるに相違ない。されば古代マオリ族が、切りに色情藝術の發達を抑壓したのも故ありといはねばならない。併しこれは一種の偏見に過ぎない。吾人は藝術が生存競争上最も重要な條件を擧げて是等の偏見を否定しやうと思ふ。乃ち如何なる活動でも、それを默劇的に模倣することは、運動や刺戟などと同じく次に起る其の活動の實際の遂行を容易ならしめる。斯くて人生の業務上の重大事を弄び、之に馴れて居る個人なり、國民なりが、生存競争上常に便利な優秀な地位を保つべきは争ふ可らざる事實である。彼のグロースは、人生の遊戯的再現 (Spontive Representation) といふ詞を使つて居るが、種族は各々其の生活態を異にするに拘らず、其の遊戯乃至藝術的活動は、例へば戦争好きの種族が軍事的舞踊をなすといふ様に、大抵其等種族の社會生活態の再現活動に相應して居る。假令其の再現に練習的價值が伴はないとしても、而も其の再現に依つて、業務と慰樂との間に一の聯絡を生じ、以て勞働の苦痛を一層忍び易からしめる。斯くて實際生活や生存競争から來る種々の勞苦は、文化階級の如何を問はず、生活を藝術化することに依つて或程度迄軽減せられる。實利的業務より來る勞苦を平民や奴隸に委ね、自分達の生活を安樂に定立し、沒實利的生活に熱中した希臘人程、生活を遊戯化し藝術化した民族は外にあるまい。シルレルは、「遊ぶ時のみ人は正しい人である」と言つたが、この詞

は實に希臘人の無關心な藝術的生活の評語として妥當である。假令希臘人の生活を指して、實利に無關心な遊戯であるといふことが出来ないとしても、而も彼等の生活は、業務の實際的遂行を伴ふ藝術的活動に相違はなかつた。吾人は茲に今や功利に没交渉であつた希臘人の藝術的生活なるものが、或場合、彼等の生存競争に役立つといふことを明瞭にすれば足りるのである。希臘人は半島國的生活をしたものであるが、此の生活は各個人間に最も密接な共同作業をなすことの必要を認めしめる。こゝに獨木舟舞踊及び短艇歌が發達し、而して漕手の運動は其の一定の律動に従つて調整される。斯様な行動は、總て共同的活動をなす社會生活に必要である。是等の藝術的活動が、アッチカから船に乗じて海外に遊び、以て諸外國の文物を輸入した希臘人の發展に貢獻がなかつたとは決して謂へまい。スバルタ人の軍事的舞踊に於ては、其の舞踊に携はつて居る人達は、其の運動の如何に劇烈であるにもかゝらず、常に相一致して規律的であり、眼球の運動さへも同一であり、槍投げの調子の如きは、其の精確なること實に神業かと思はれたといふ。此の戦争舞踊は、他の愛の舞踊や、模擬的舞踊と同様に、激烈にし又律動的な運動に對しての快感を與へ、又模擬的衝動を満足せしめると同時に、是等の舞踊は、それに依つて放出せしめる所の、激烈な情緒から心意を淨化し解放するといふ良い結果——アリストテレスが悲劇の最高最良の効果だと斷言した淨我——を齎らす。のみならず、幾多の舞踊者は恰も一の感情に依つて感激せしめられ、動作せしめらるゝ一個體の觀をなし、一の完全なる社會的統一の状態をなす。即ち舞踊は彼等をして一の目的に對して一の感情を以て一衝動の下に活動するやうに誘導し馴致する。併し吾人が今追求せんとする所のものは、戰爭的舞踊が恰も業務の遊戯的模倣と同様に、舞踊者たると觀者たるとを問はず、實戰に必要な基礎的動作を體

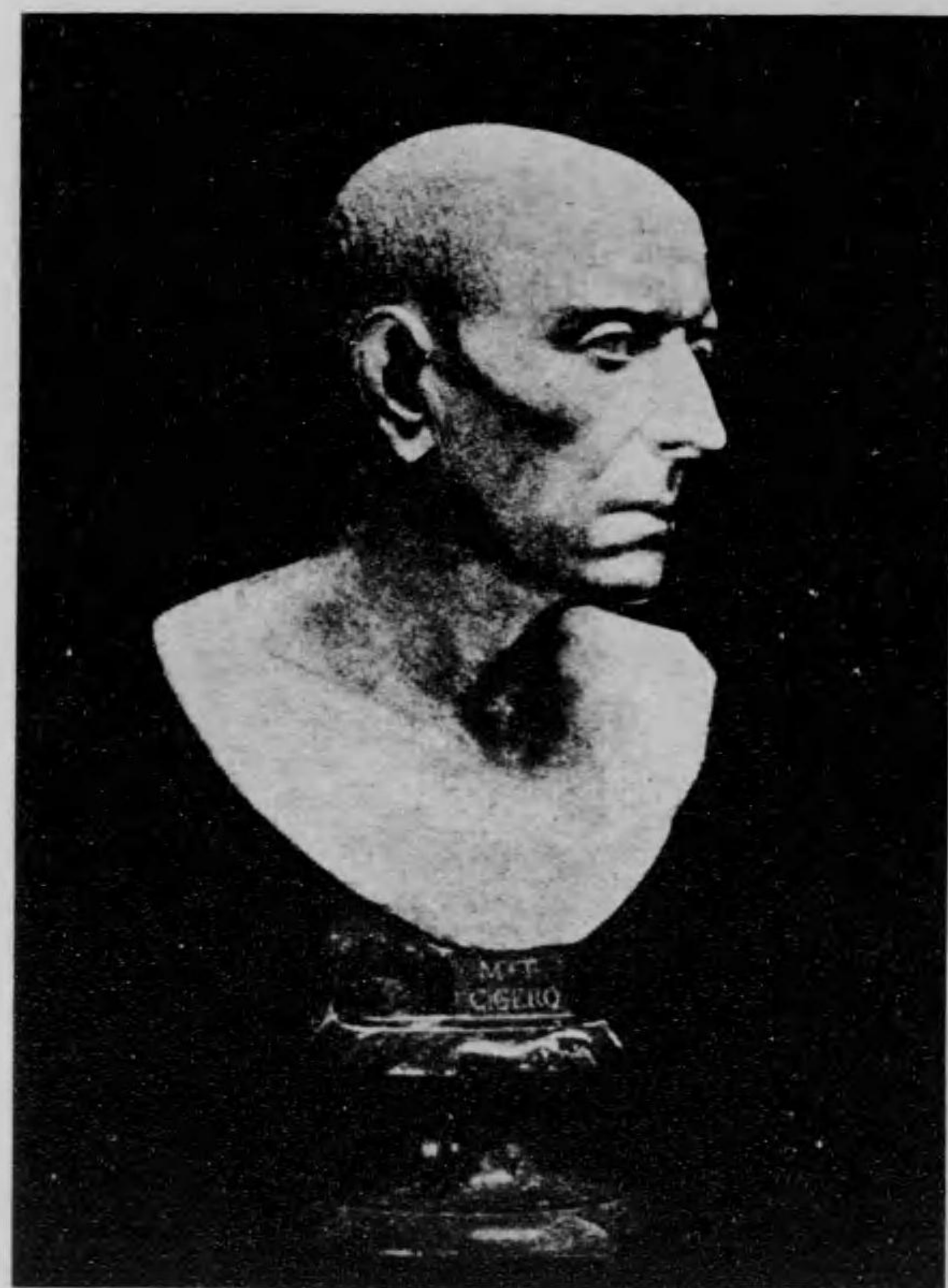
得せしめるといふ點である。希臘人の舞踊は、後年に至つては結婚配偶の選抜の爲に用ひられ、プラトウの如きも斯かる目的の爲には望ましいことであると論じ、ラセデモニア人の如きは男女混合の舞踊をさへ許したが、斯種の舞踊の善悪は別として、眞個の藝術活動は、決して人間の知識や業務に對する熱愛を微弱ならしめるものではない。藝術活動は寧ろ之を鼓舞するものである。即ち希臘人の音樂舞踊の如きは、人生の生存競争場裡に於ける最も辛辣な形式たる軍事的訓練に役立つたからである。是は一例であるが、兎に角、希臘に於ては音樂舞踊は身心教育の精髓として用ひられ、その功利を離れた藝術的訓練が實際生活にも活用せられたのである。

羅馬人の精神

希臘哲學の絶頂と稱せらるべきアリストテレス時代は、政治的には既に希臘の衰頽に傾いた頃であつて、彼の歴山大王が遠征の結果として、東西の交通を増し、諸邦民族の混入を來たしてから、希臘の文化は益々四散したのである。羅馬帝國が天下を一統するに及んでは、希臘の文物は悉く羅馬に取入れられ、遂に後世人の文化財となるに至つたのであるが、一體此の希臘文明を繼承した羅馬人は、實際生活と、外敵の防禦とに熱中すべき境遇にあつた。随つて羅馬人の神は獨り政治思想の權化として顯現し、その科學も、その道徳もその藝術も、その宗教も悉く政治的行動に統一せられたのである。故に羅馬に於ては、團體の爲に、個人の服従を規定する政治的組織や、嚴格なる軍事的訓練は夙に發達した。けれども公共團體に直接利益を生ぜざる業務は人間の従事するに價値なきものとせられ、實用的價値を離れて、學藝を樂しむといふが如きは、着實嚴格なる人士の採るべき道ではないと考へられた。雅典人の生活に較ぶれば宵壤の差ありといふべきである。随つて羅馬人の長所とする所は、藝術的想像、美的受納力、多方的生産力、身心の自由活動などにあるのではなくして、強固

なる意志、堅實なる實地心、公共的活動などにあつた。雅典人は政治以外に精神上の閑暇を有したけれども、羅馬人は其の政治的業務より殘留したる時間を、公共及び家庭生活の爲に費した。故に全人格の調和的發育の如きは羅馬人の思想には存しなかつた所であつて、其の嗜好は歴史又は嚴格なる政治上の辯論に止つたのである。尤も修辭上の研究は羅馬に於ては夙に發達し、能辯の美を發揮する傾向は、デモクラシー的傾向と共に一層旺盛を極め、是等の理論も亦發達したけれども、其の研究及び練習の目的は實用を主としたのである。羅馬人は國家に對する無比の本能と、支配者又は法の作者として優秀な力を供へて居たけれども、創造的思想は殆んど之を缺いて居たと言つてよい。彼等の藝術、科學、或は醫藥に至るまで希臘人から借りたものである。羅馬人が當時の世界の覇者となつた時に、希臘の哲學者や科學者は、チベル河畔に隱棲して、本來の學派を創建する事もなく、又雅典人を繼ぐに足る何物をも最早創出しなかつたのである。併し乍ら、羅馬興亡の歴史を續く者は、羅馬が希臘文明を繼承し、其の文化を歐洲各地に傳播せしめた功績を見逃してはならない。

羅馬の藝術教育　羅馬の教育は、前述の如く其の國民性が實踐的であり、社會組織が現實的で富國強兵に傾いた爲に、其の教育理想は著しく實科主義を帯びたのである。最初羅馬人は希臘文化の模倣に努めたのであるが、希臘文化が漸次普及するに伴れ、希臘の詩人や文學者の作物は、模範的文章として學校教育に適用せられ遂に暗誦せしめらるゝ迄練習された。これ一種の文藝鑑賞教育であつて、文學の形式を通じて希臘の藝術美を賞玩するのである。希臘文藝の思想の豊かさ、其の形式の優秀さなどが模倣され、斯くて藝術的觀界の擴張に伴れ修辭學校などが建設され、一定の論題に就て演說討論を行はしめ、明晰に思想を發表すると共に、優美に表現す



CICERO

る能を養つた。従つて文法と修辭學とは主要なる教科となり、調和の感情を養ふが爲に音楽も採用せられ、思想整理の爲には哲學も採用せらるゝに至つたけれども、是等の教科は、假令そが藝術的價値を發揮すべき性質のものであつても、皆均しく實科的色彩を帯びたのである。羅典文學の代表者シセロの如きは、希臘文藝の移植に貢獻した人であるが、此の人の意見にして、既に實用的見地から文學や教育を解して居るを見ても、如何に希臘人の考へと異なるかゞ知れる。希臘人は藝術をば品位や道德の方面から見たけれども、羅馬人は實用とか生活とかの方面から見たのである。羅馬人は天性藝術的國民ではなかつた。従つて藝術教育も羅馬時代には振はなかつたのである。別項に羅馬の教育思想家の意見を考察しよう。

シセロの思想 シセロは紀元前一世紀代の有名な雄辯家、大政治家であつたが、晩年アントニウスと不和を生じ、暗殺の厄にあつた人である。彼れの人類陶冶の思想、科學、藝術に關する思想は、總て希臘思想に醸成せられたのである。シセロの少年教育論に依れば、少年をして希臘や羅馬の藝術家や、或は偉人の手に成れる高尚な作物や、或は童話等に親熟せしめねばならない。畢竟少年の教育には藝術を應用しなければならぬのである。併し少年は其の長ずるに及んで、自己の好みに應じ、哲學、法律、雄辯術などに向はねばならない。就中雄辯術を能くするには、論理や哲學思想を有し、詩人の表現法を知り、悲劇家の語調を辨へ、名優の身振を備へねばならないから、宜しく其の品性を觀て學ばしめねばならないと論じて居る。シセロの教育説では、教育は人間性を完成せんとするものである。人は知及び情の稟性を有して現世に生れる。この性は最初潜在状態にあるけれども、後には十分なる光を發し、叡智の導きの下に善美に進むものである。故に教育期に於ては藝術に依る教育

が必要であると見て居るのである。

セネカの思想 セネカは羅馬帝政期に於て、ネローの教育主任となつた人であるが、彼は教育を以て感情を抑制し、理性の支配力を顯著ならしめ、以て道徳的生活を生ぜしむるものと見たのである。併し彼は道徳的陶冶に史譚、詩文、音楽の如き藝術的教科を活用して居る。教育は人間の外面を修飾し、學者風を粧はしめてはならない。又生活の爲に教育せずして學校の爲に教育するが如きも誤つて居る。教育は生活の爲の教育でなければならぬ。セネカの所謂生活と呼ぶものは、實地生活と精神生活を指すものである。彼は眞の内部的發達を計らんが爲に、換言すれば心情陶冶の爲に歴史の談話、詩文、音楽などを適用したのである。それは彼が「實科教育も必要であるけれども、人間は皆嚴格なる實科の學習に適するものではない。また實科教育に依つてのみ道徳的生活に達し得られるものではない」と言つた事に依つても明瞭である。

クインチリアヌスの思想 クインチリアヌスは紀元一世紀頃の羅馬思想の代表者であるが、其の教育に關する意見は、前述のシセロの意見と相似て居る。凡そ人間は自然から一定の性能を受けて此の世に生れ出たものであつて、活動と發明的能力とは人間固有のものである。故に教育の主なる職能は、この天賦の性を發展せしむるにある。言語教授に於ては、詩人を理會する方面に導くを第一とする。讀方教授は主として内容的價值、特に倫理的内容を重んじ、之に依つて節操、勇氣、美的趣味、獨立的才能などを養はねばならない。文法と修辭とは密接して教へ、文法に於ては藝術的教材を主とし、修辭に於ては歴史的教材を取扱ふべきである。表明の方法に就ては、氣力を第一とし、多くを試み、多くを發見するを優れりとなし、氣力衰弱し、想像的活力が缺損する

に至れば、如何に勤勞するも其の得る所は少ないのである。言語教授と相並んで音楽教授がまた大切である。音楽は將來の雄辯家に對して、常に詞の位置に就ての感情、音聲の正しい抑揚を得しめる許りでなく、人間の動作に優美なる律動を得しむるの價値があると説いた。クインチリアヌスは人間の自然性を開發し、雄辯家を作るといふ考へから、文法や修辭や音楽といふ様な藝術的教科を尊重した。彼の希臘人が人性の圓滿美妙なる調和的發展の爲に、是等の教科を貴んだ精神とは大に異つて居たのである。

第二章 中古の藝術教育

中古に於ける基督教の思想

古羅馬の衰凋しつゝある文明から基督教が起り、羅馬の衰世から暗黒時代の間徐々に傳播せられ、其の勢力を得るに及んでは、教育は國家に依つて行はるゝことなく、全く基督教寺院の監督の下に立つたのである。元來この宗教は天國を目的とするが故に、現世を以て一時的のものとなし、單に天國に達する準備に過ぎずとし、従つて人間を現世に執着せしむるものを排斥し、且つ人間を自然の儘にては罪障深きものとし、罪あるが爲に下界に沈降せるものと見做したのである。其の結果として靈と肉とを嚴格に區別し、靈を以て天國に起源し、従つて神聖なるものとし、肉を以て靈を現世に關聯せしむるものとして之を卑下し身體の欲望及び必要を制し、寧ろ之を苦しむることに由つて精神を清淨にし、始めて未來の生活に適せしむるを得るものとしたのである。斯かる傾向は後に大に緩和せられたけれども、而も中古時代の教育思想に著しく現はれて居る。斯様な有様であつたから、基督教の出世間的思想の爲に、希臘思想による現世的客觀的美的要素は段々と其の勢力を失ひ、上古の優美なる藝術の眞價は認められず、隨つて希臘思想による藝術教育の如きも自ら振はなかつたのである。基督教は神と人間とを同一のものとし、神は人間に於て理道、美及び徳として表現し、人間は是等の理想的勢力の下に自己を服従せしむることに依つて、益々其の神の模寫たることを顯著ならしめ得るものと考へた。斯かる思想が、人生の價値を、上古に於けるものと全然異なる標準に基づいて決定せしむべきは當然である。基督教の思想では、教育の美的傾向に對しては寧ろ拒避的態度を高調し、人間生活の内外を美的に

創作し、或は人格を多方的に修飾するよりも、寧ろ其の改造を主としたのである。思ふに基督教思想勃興以前の時代は、恰も子女の青年期に相當し、現世に希望の多い時代であつたから、優美な人格の粧飾を好んだのは自然の勢であつた。併し基督教の思想は、人間の身心の優美なる發育を説くには餘りに老熟に過ぎ、其の希望は外部より内部へ、現世よりも來世へ向ひ、自然的現世的に人情を修養するといふよりは、超自然的來世的に神に對する信仰を助くる方向に疏注されたのである。

藝術と宗教との關係

然り乍ら、基督教思想の旺盛になつたが爲に、決して美的要素が消滅に歸したのではなかつた。中古時代に於て吾人の注目に値するものは實に宗教と藝術との交渉である。造形藝術が宗教と融和し、藝術が信徒の教誨者であり慰藉者であり、基督教會は藝術の力を借つて改悔を進め、寺堂を裝飾し、全く「宗教の爲の藝術」となつたことである。思ふに初期基督教時代に於ては、古代と同じく、造形藝術には二大動機があつた。それは宗教と裝飾とであつて、殊に宗教が其の主なる動機であつたのである。併し基督教は希臘羅馬の宗教とは大に趣を異にした宗教である。希臘の宗教は自然の崇拜、人間の讚美、肉體及び道義的完全の崇拜から成立した信仰である。其の關する處は實在的又可覺的のものであつて、希臘藝術は直接に人間の感情と現世的性情とに訴へたものである。猶太人の宗教は其の反對であつて、情慾と肉體と凡ゆる浮世の事物とを非責した。勿論自然美のやうなものには頓着しない。人間の希望は來世に集注して居る。基督教の教旨は情慾を壓服して靈的、神的になることである。希臘教は感情に訴へ、猶太教は心靈に訴へる。藝術上では美しい裸體像のやうなもの、否人體は一般に嫌忌せられ、古教會の役僧等は之に反對した。肉體を描寫することは十戒に抵觸し、偶像禮

拜に類似した罪惡として禁ぜられたのである。然らば「宗教の爲の藝術」、基督教的藝術は人體の代用に何を採用したか、新宗教は形に依らず、何に依つて其の思想を表現したか、最初はシンボルに依つて此の問題を解釋せんと試みたが満足でない。仍て一層直接の表識を主唱する一派が教會に現はれ、彼等は繪畫を利用して、文盲の信徒に經典を教ふる教會の一機關とすべしと論じた。此の論は勢力を得て、偶像破壊者一派の反對があつたにも拘らず漸々厚遇せられ、繪畫藝術は僧侶に委ねられ、宗教の用に充てられ、かくて藝術的價値は段々と減じて來たけれ共、反對に宗教的熱情は益々活氣を現はして來た。乃ち繪畫藝術が眞先に宗教々育の機關となつたのである。斯様に寺院が神事に關して大に藝術を活用したことは、間接に基督教々化中に美的要素を存立せしめ、且つ藝術的形式を滿たすに、基督教の精神に應じた一種の内容を以てした。而して之が爲に藝術の純粹なる美的形式は損害せられたけれども、而も藝術の包含する思想、内容は豊富になつたと言はねばなぬ。即ち基督教は藝術的創作の凡ゆる方向に對して、深遠徹底の傾向を醸成した。實際希臘藝術の如きは、基督教的藝術に比較して、其の形式が雄渾完美ではあるけれども、一面其の心情が冷淡であつて、殆んど心魂を缺くの觀がある。而して基督教は單に繪畫に影響を及ぼした許りでなく、後世に及んでは、彫刻、音楽、詩歌、文學などの諸藝術にも影響を與へたのである。即ち基督教は造形藝術のみといはず、音楽、詩文なども交渉し、是等の藝術を活用して信徒を教誨し、その教義を擴めたのである。

藝術に依る宗教的教化 中古時代を通じて、基督教が傳播するに伴れ、藝術は段々と寺院の間に活用せらるゝに至つた。一體基督教文明に取つては、藝術は單に裝飾であつた許りでなく、眞に一種の必要があつたの

である。即ち往古一般文書に乏しく、また民衆の大部分が文字を解し得ぬ時代の必要上、教會は箴石、朱繪、鮮畫、彫刻、建築などの助力に依つて民衆を教誨した。即ち宗教思想を傳へ、宗教的感情を養ふには、是等の造形藝術に依る外、他に宗教的陶冶の良方便はなかつたのである。これは文學の様に抽象的思想を以て教育するのではなく、所謂實物教育であつて、形状と色彩とに依つて視覚に訴へ、直觀的に宗教思想を授け、宗教的感情を練養したのである。思ふに宗教的陶冶の一手段は直觀にある。信徒の心眼に生々と神の世界、信仰の對象を描現するにある。宗教的繪畫の直觀は、感覺の世界から進んで心靈の世界に入るのであるから、單に信徒の思想のみならず、感情も亦これに依つて聖化せられるのである。生命ある人格を動かす所の直觀は、直接外界の人物の行爲に對する外的直觀と、内界の記憶想像の作用に依つて鮮かに心眼に描き出さるゝ内的直觀との二通りあるが、其の何れにもせよ、其の直觀をして躍如として人格の精神生活に觸れしむる導火線となるものは感情である。然るに藝術は内外の直觀に訴へ感情を動かす。當世の宗教家が宗教々育の方便に藝術の力を借りたのも斯様な根柢があるからである。これ即ち藝術に依る宗教的陶冶に外ならない。然り乍ら之を一方から見れば、民衆の日々參詣する寺院は、宗教的藝術の鑑賞場に過ぎず、現時の美術學校又は美術館同様の教育所であつたのである。これ即ち藝術鑑賞教育に外ならない。斯様に基督教が藝術を活用した點から考察すれば——其の結果には種々なる方面があるけれども、教育上から見れば——(一)固より宗教的感情を養ふ外に、(二)美的感情を練養し、藝術批評力をも養成したのである。廣義に解するならば、希臘時代の如く藝術の力に依つて人格の調和的發育を計るのも、中世の如く藝術の力に依つて人格の宗教的發展を計るのも、或は後世の如く藝術の力に依つて道德的人格を作るのも、

或は藝術の力に依つて本來の美の教育をなすのも、總じて藝術教育たるに外ならない。たゞ其の力點の差に依つて德育ともなり、宗教々育ともなり、純美教育ともなり、或は人格教育や工藝教育ともなるのである。併し藝術に依る教育たる點に於ては皆其の軌道を一にして居る。

前述の如く基督教會が藝術を布教の手段としたことは、第一義的には民衆の信仰心を高調し、第二義的には民衆の美的眼識を高め、民衆も亦宗教的藝術を奨励して、愈々當代人の藝術心を練養したが、この習慣は數世紀間打續いて、其の結果、伊太利人は特に造形藝術の頭腦を練磨し、文藝復興期に入つて、藝術がルネッサンスの精神思想を表はす有力なる機關となつた頃には、繪畫藝術は、伊太利に於ては既に彼等の用語と言はるゝ迄に、一般に普及活用されて居たのである。斯様に繪畫が言語文章の代用をする所から、繪畫は當時社會の必要物となつた許りでなく、一般人民も亦繪畫の批評眼を養ひ、彼の北歐人に比すれば、殆んど藝術批評家ともいふべき美的判斷力を具ふるに至つた。十六世紀に於ける文藝復興の大藝術なるものも、實は斯かる遠因に醸成せられて現はれたのである。後代に及んでも、基督教會は依然として宗教的藝術の熱心なる奨励者であり、間接的に藝術的教化の維持、保護、普及者たるの立場にあつたのである。

僧庵學校及び寺院學校の藝術教科

羅馬帝國の分裂に伴ひ、其の燦爛たる文化も日々に寂光に包まれて、紀元後六世紀の精神界は、殆んど暗黒の觀があつた。この暗黒の世に於て、教化の中心として光明と救濟的勢力とを發揮したものは、僧徒制附屬の僧庵學校や寺院學校であつた。此種の學校は四世紀の初葉から段々整備され、西歐諸邦に渡つて、特に八世紀から十世紀迄の間に於て最も隆盛を極め、主として、神に捧げられたる兒

童の爲に、嚴格なる基督教的訓練を施したのである。藝術的教科、特に音樂は宗教的感情の高揚に價值ありと認められ、讀書、文法、修辭、羅典語など、共に、神學の補助として教授された。一身を神に捧げたものは、現世の快樂から離れて眞率なる歸依の情にかへり、俗界の醜を避けて宗教美に就き、僧庵の墻壁内に遁世的生活をなし、心情慰安の爲にはたゞ讚美歌、祈念、沈思、手技を事とせしめたが、特別の場合、例へば寺院の祭日などには、遊戯と共に一般に學校劇を行ふことを許されたのである。四世紀の教育家アウソニスの作たる「七人劇」などは、此の時代に於て學校劇に活用せられ、後に至つて教科書に推賞された。カロー大帝の如きは、僧庵學校乃至寺院學校の保護改良者であつて、英國の僧侶アルクインを聘して宗教、藝術、科學などの高等教化に努力せしめた。アルクインは紀元八世紀頃に最も活動した人であつて、三藝——文法、修辭、論法——に關する著述がある。カロー大帝は斯様な學才ある僧侶を聘して、獨逸語及獨逸詩歌を重んずると共に、上古文化の價值あるものや、羅馬の名家の書などを涉獵せしめ、是等を自己の領地に移植せしめたのである。

アルクイン及びラバヌスの思想

アルクインは、其の有益なる著述たる「三藝」の中に於て、教育に關す意見を述べて居る。教化の最高目的は叡智を體得するにある。人間は神意に基づき叡智を受し、物を認知し眞理を發見し道德を純粹にしななければならない。若し叡智を求めず、現世の名譽富貴などの虚偽的快樂の追求に耽る時は、眞知を得ることが困難である。内觀の眸を開き、内部を修飾し、不滅の精神を光彩あらしめ、優美ならしむることは、外部の虚飾に優ることが萬々である。ソロモンは、「愚にして富むも何の益かある、叡智は金錢を以て購ひ得られざるべし」といつた。吾人は神意に従ひ、無量の慈愛を以て、神聖なる叡智の寶庫に入らなけ

ればならない。其の爲には文法、修辭、論法、數學、音樂、天文などの諸科を、階段を追ふて學習しなければならぬ。哲學もまた高尚なる知識を與へ、精神を鍛練し、道徳を指導する爲に大切であると言つて居る。アルクインの意見では、藝術教科殊に音樂は敬虔的態度の教養に資せられたのである。彼れの門弟であつたらバヌ・マウルスも、僧侶教育に關する著述をなして居るが、彼は聖書を以て至高萬能のものとし、教習の本源も、其の内容も、其の完成も總べて之にあるものと見做した。教科に就てはアルクインと其の見解を等しうするものであるが、併し聖書の理會を補助するものならば、異宗教の書及び科學書を涉獵するも差支へがない。また文法は自由藝術の本源であり根柢であるから、是非學習しなければならぬ。特に音樂は音響に由つて知覺せらるべき時の區分に關する學科であり、高尚有益なものであるから、之を學ばなければ其の職務に忠實なることが出来ない。正しく讀み、又讚美歌を唱ふることも、音樂的知識に基づいて規定せられるから、吾人は之に依つて始めて神事に最善を致すことができる。吾人の談する所、吾人の心情を進動せしむるもの、天地萬象、盡く音樂に依らないものはない。希臘のピタゴラスは、此の世界は音樂に依つて作られ、音樂に依つて支配せられるといつた。されば基督教も亦音樂と關係の深いことは明瞭である。音樂の知識に乏しいものは、知り難い種々なる困難に會ふことがありと論じて音樂的陶冶を高揚して居る。

武士道教育と藝術教育

數世紀の間、僅かに教會と宗教々育家に依つて、變則的にも其の命脈を保持せられた藝術教育は、十二世紀頃から歐洲社會に起つて來た新衝動の爲に、稍々其の範圍を擴張したのである。新衝動とは何であるか、長い間野蓄せられた西歐民族の活力が、希臘、猶太、亞刺比亞文物などの輸入刺戟の爲に

新方向に働き出したことである。殊に十字軍に干與した諸國人の、強く動かされた想像及び心情は、先づ詩歌及び藝術の領域に於て其の結果を示し、更に新しき知識、新しき生活上の要求もまた生じ、従つて武士道教育、市民學校、大學教育、煩瑣哲學、新宗教團體などが段々と起つて來て、從來の僧院學校や寺院學校などは次第に廢棄して往つたのである。

武士道教育といふのは、基督教的信仰と古日耳曼道徳との渾然融和された思想に涵養されたもので、其の教化上の理想は、能く練磨されたる高尚勇敢なる人格を有し、神の爲め、君主の爲め、且つ貴婦人の爲め、武士としての務めを盡すといふ點にあつたのである。かの宗教々育は、七自由術科——文法、修辭、論法、算術、幾何、音樂、天文——を不可缺のものとし、知的成熟を期したのであるが、武士道教育は其の重點を實地的技能におき人格の美的完成に努めたのである。武士としての必修教科としては所謂七能——騎馬、水泳、弓術、擊劍、狩獵、將碁、作詩——があり、王侯の宮殿に於て是等を練磨し、また舉動を美的ならしめんが爲には禮儀作法を練習したのである。精神陶冶は、主に作詩及び唱歌に依つて行はれ、主人に由り、又は諸侯の居城を巡回し、暫時が間滯在して教授する詩客及び音樂家が其の教師であつた。其の教育法は概して系統的ではなかつたけれども、而も一種の藝術教育たるに相違なかつた。一面文藝——範圍は狭いが——に依つて精神を陶冶し、舉止動作を美的にし、人格を美的に完成せんとするのは、確かに或種の藝術教育であつたのである。而して武士道教育の時代に於ては、女子の精神教育は男子に優り、紡績裁縫や普通の讀み書きの外、舞踊、音樂、管絃などもまた女子必修の教科であり、また優美なる舉動を重要としたので、作法教授なども大に行はれた。斯くて武士道教育の藝術的傾

向は、十四世紀頃に至り、武士道の高尚なる理想の頽廢と共に衰へたのである。

中古の學校劇に就て

學校劇は敢て中古時代に始まつたのではない。寧ろ此の時代には一般教育と共に衰頽して居たのである。希臘のプラトウの如きは、既に其の「共和國」の中に於て、學校劇に就て可なり多くの頁を費して居る。羅馬に於ても同様に教育上の目的の爲に用ひられ、希臘の翻譯劇「ウイキンス」は大切な教科書となつて居た。然るに中世暗黒時代に入つては教育振はず、従つて學校劇なども餘り顧みられなかつたけれども宗教學校では教育の發表的方面の練習に當てられ、又は祭日などに出演せられたのである。彼のアウソニスの作たる「七賢人劇」などは、四世紀頃學校の教科書として作られたものらしい。眞に學校劇として盛に動作に現はすに至つのは十世紀頃からで、ホラッピザなどは自作の劇を、自分の宗教學校で實演したのである。十二世紀の頃、英國の宗教學校では宗教劇が試みられた。彼の聖カサリン劇に關聯したものは、學校教師に依つて眞面目な學校劇になされ、それが十四世紀の未葉に至つては、多くの學校兒童に依つて試みられたのである。降つて十五世紀の初葉から、學校劇が羅典語で書かれるようになったが、之は當代の教育方針と關係し、學校劇が羅典語教授の一方法として用ひられたのであるから、従つて下級生には對話の様な形で、上級生には纏つた劇の形で行はれた。蓋し羅典語は當時の國家や教會の用語であり、凡ての職業や文藝上の用語であつたのである。當時學校劇の實演は、兒童の爲には決して困難ではなかつた。何となれば、教育上暗誦を重んじた時代であつた爲に、それが會話に發達し、聽て役割を作ることの興味と必要を感じ、遂に一の演劇として實現する迄になつて居たからである。十五世紀の未葉からは、學校に新羅典劇が採用せらるゝに至つたが、就中有名なものはナフューイスの創作に

かゝる「アコラスタス」である。ナフューイスはケエニヒスブルグ大學の教授であつたが、宗教上の見解からルウテル派に迫害され、流轉の生活をしたのである。併し其の名作「アコラスタス」は各國語に譯述され、今日それを讀むも尚ほ其の劇の力に打たれる様である。青年アコラスタスが父の戒めを聞かず、父の與ふる聖書を投げ捨て、家出するあたり、彼れの才筆の躍如たるものがあり、旅路の數々の描寫には、生々たる人間の世界が展開されて居る。のみならず、彼が愛人レイスと祝宴をする場面などは美しい描き振である。單に教育的見地から興味ある許りでなく、青年の心理的過程や、隠れたる道德的背景などの暗示も多く、作者の宗教的信念と教育的理想とが渾然融和して不朽の名作たらしめて居る。十六世紀の劈頭に斯様な偉大な教育劇を見出すことは、實に藝術教育史上の一光彩である。

第三章 文藝復興期の藝術教育

文藝復興とは何ぞや 中世暗黒時代を通じて徐々に發展して行つた歐洲の文明は、遂に文化の一轉機に到達して、勃然と其の表面に表はれ、所謂ルネッサンス、即ち文藝復興時代を形成したのである。文藝復興とは數百年來基督教主義に依つて鍛錬せられた人間の思想が、希臘哲學及び自然と現世との種々様な物質的研究に依つて得られた知識に化せられて、其の活動が最高潮に達し、有ゆる悲喜、有ゆる思想感情の齊しく發現せられた幸福豊富な世であつて、希臘のペリクレス時代の文化と共に、殊に藝術は各種の思想を収集して最高の地位に昇進し、其の精華を發した時代である。

時代思潮の大變動は、藝術思想の變化に依つて告示せらるゝものであるが、この文藝復興の大變動も、また藝術思想上の動搖に由つて表示せられたのである。元來中世時代の人達は、人間に靈魂あるを知つて、肉體及び知能あるを知らなかつた。尤も文藝復興以前と雖も、不斷の戦争と騎士の隆盛との結果、肉體も相當に重んぜられては居たが、併し騎士の思想は、肉體を肉體として重視したのではなかつたのである。また煩瑣哲學に於ても、人間の知識的活動を取扱はないことはなかつたが、其の知識的攻究の中には、肉體的のものを批難する一種の力強い禁慾主義の基調があつた。即ち肉體は靈魂を藏して居る殿堂といふよりは、汚ない醜い情慾の棲家と思はれて居たのである。

然るに當代に及んでは、人々は一般に人間の知能と肉體とを發見し、この新しく發見された知能と肉體とを調

和せしめようと試みた。即ち人間は知識、感情、意志を有する靈物として尊いもので、且つ現世を利用し、現世を享樂する權利を有して現世に生れたものであるといふ人間の覺醒を起し、自然の眞、自然の美に禮讃したことは、古代藝術及び自然研究と相俟つて、先づ藝術思想に反響し、藝術は宗教の奴隷ではない、藝術は美の爲に存する、今迄のやうに經典教育に致々として居るのは藝術の權威失墜に外ならない、而も藝術の眞價を發揮するには、古代文化の精神、殊に希臘の健全なる現世的美的思想を復活するに如くはない。吾々は希臘思想を復活し、肉體と精神との完全なる調和を計らう——斯様な思想傾向の下に、一個の新しい人間本位の問題が起り、人文主義の人達が中心となつて、文藝復興の自由精神が發動して來たのである。この新精神は十五世紀頃から芽生し、十六世紀に於て極頂に達し、社會生活上に多様な新現象を生じ、十七世紀に至つて更に實業を勃興せしめ、色々の新知識を發展せしめたのであるが、吾人は此の間の時期を總稱して文藝復興の時期といふのである。

人文主義と藝術教育

文藝復興は人文主義の運動に始まり、人文主義の運動は伊太利から發し、古代の教化及び理想を收得せんとするものである。即ち希臘精神を復活し、其の精神を一の新しい見地から觀察し、其の精神の裡に雄大な人間性が存在し、其の人間性が高尙な、優美な、自由な形式を以て顯現せるを洞觀し、言語を通じてそれと理想的に交際し、それを活現するのを今代の務であると觀じた。斯様に人文主義の人達は、一般に上古を尊重し、希臘及び羅典の言語を共に教化財としたけれども、而も其の教化の目的や教材は、之を希臘に仰がずして羅馬に採つたのである。即ち文藝と體操とを基礎とし、數學的學科を用ひ、哲學を最高教科とする希臘思想は用ひられず、反之、言語的藝術を以て凡ゆる教科の基礎とする羅馬思想が用ひられ、それが殆んど極

端にまで進められたのである。

人文主義の教育は、吾人の見地からすれば、一種の藝術教育、即ち美しき言語の力に依つて希臘羅馬風の一の完全なる人品を作らんとする藝術教育である。されば羅典の文學、美辭を學び、自ら羅典語を以て流暢に話し、優美に文を綴ることの修練は、人文派の人達の最も重視した所である。パウルゼンに依れば、(一)人文派の藝術的特色は、其の自己表現の傾向にある。昂進せる自己感情が、人をして自己を表明し、自己の經驗及び感情を以て、公衆の注意を惹くに十分の價値あるものと思惟せしめ、従つて様式を重要視するに至るは當然である。畢竟自己を表現せんとするものは、内容よりも形式を重んじ、悟性よりも想像を動かさんとし、事物に關する承認よりも自己一身の賞讃を博せんとする。これ中世文藝がたゞ論理の正確を尊び、全然様式に無頓着であつたのに對して著しい反對を示すものである。(二)人文派の藝術的特色は、其の國民性を避けんとする傾向である。自己感情が昂進し、自己を特種の者と見るに至れば、一般公衆の思想及び形式に従ふを野鄙と觀じ、其の結果、珍らしき文化世界の思想及び其の發表を戀慕し收得し、自ら一世に超越して古代の藝術家、哲學者、辯論家を以て任じ、斯くて現在の社會を古代化し、古代のそれに假裝化せしめようと力める、従つて現在の世界を戯曲視するやうになる。

人文主義の淵源は遠く希臘にあつたけれ共、明白に、人文主義と名づくる藝術的な教育理想を産み出すに至つたのは、教育史上此の時を始めとする。而して此の派の如く言語的藝術の力に眩惑したものは未だ曾てなかつた所であつて、彼の中世の如く羅典語を學術專用語と見做し、美及び藝術の理會なく、意識的藝術衝動を缺いだ傾向



DANTE

と著しい反対を示すものである。是れ蓋し藝術的精神が久しい潜伏状態から俄然覺醒したのに由るのである。人文派の人達は藝術教育——羅典語及び羅典文學を主要教材とし、之に依つて人間を陶冶しやうとした——を以て人類的事業と見做し、總て此の高尙な陶冶を受けた者を一團とし、性の差異や國民性や、或は階級の區別などを眼中に置かず、全く藝術に依る普遍的な教育の鼓吹者であつたのである。斯様に精巧優美の言語に關する美的理解、享樂、表現の力を養ひ、之に由つて精神を高尙にせんとするのは、固より至當の考へであるけれども、其の事に熱中するの餘り、言語的、文學的、審美的傾向を過度に昂進して、自ら他の科學や哲學を輕視し、形式を重んずるの餘り、實質を輕視し、希臘羅馬の古文書を學ぶにも、其の内容よりも寧ろ言語の用法に注意し、表現の美を主として論理に注意せず、隨つて空想と故意の虚偽とに陥り、又昂進せる自己感情は、言行の自由を希望して、寺院の權威に反抗するに至らしめた。然り乍ら、自己に醒め自己に振返つて古典を研究し、古代の思想乃至生活を欣求し、死せる古語や形式的宗教に飽いた不滿を自己表現に依つて慰め、この「生けるもの」を以て古代を蘇生し、價值ある文藝遺産をしようとして近代精神を發生した貢獻は、見逃さうとしても見逃すことが出来ない。

伊太利の人文主義

伊太利のフレンツェを中心として起つた文藝復興運動は、中世紀の形式に囚はれた精神の無い宗教主義を打破し、自由なる批評的精神に依り、自覺の新天地に榮えようとして、漸く古羅馬の遺跡の上に芽生した。ダンテ、ペトラルカ、ボッカシオなどは其の先驅者である。就中ペトラルカは上古の世界の發見者であり、又人文學者の模範と稱せられ、夙に上古言語の優美なる音調、シセロ及びウエルギリウスの辯論詩文

に心情を奪はれた人である。ダンテとボッカチオとは詩聖として、殊にダンテは其の傑作「神曲」(The Divine Comedy)に依つて永遠に生きて居る。吾人は其の深遠なる信仰の表白に、崇高なる審美的價値を興へずには居られない。のみならず、吾々はダンテの神曲を以て、彼のミルトンの失樂園物語と共に、藝術教育の教材として、生命ある人格者たらんとする者の前に提供するを憚らない。世の中の多くの人達の中には、折角人間に生れながらも、世界の隅に斯様な偉大な藝術的傑作の在ることも知らないで死ぬやうな不幸な人間も少くはない。吾々は教育者として、將來の國民に對しては、少くとも是等の藝術的傑作の梗概だけでも教へたいと思ふのである。

然るに是等の先驅者、人文學者に依つて開始せられた伊太利のルネッサンスは、貴族や富豪の保護を受けて發達し、伊太利は一時歐洲文化の中心となり、十五世紀頃には盛大の極に達し、佛蘭西や獨逸や英吉利などからも留學生が集まり、此の地に於ける影響は獨り文藝のみに止まらず、引いて宗教の批評にも及んだのである。即ち文藝の還元に依り、眞の修養は基督の降誕以前にも存在し、而してそれは完全圓滿なる人格陶冶に不可欠のもつ認められ、又ヘブリュー語研究勃興の結果は、基督教の眞意義を理解し、當世の法王や教會の教ふる所は、必ずしも基督の眞精神に合して居るものではないといふ事實が発見せられ、従つて舊約全書や新約全書を批判的に解釋せんとする風が盛になり、其の結果當世の宗教を破壊するに至り、宗教に對する信仰心の漸く薄くなると共に、希臘や羅馬の放逸なる弊風さへも再現するに至つたのである。なほ伊太利人文派教育家の思想を述べようと思ふ。

ベルゲリオの思想　ベルゲリオ(一三四九—一四二八)は論理學者であつたに拘はらず、教育に關しても有益なる意見を有して居た。即ち教育は人間の幸福なる生活の基礎を築く爲のものである。故に精神の撓め易く、且つ刺戟に適應し易い兒童期から開始しなければならない。教育の方法は、兒童の個性を尊重し、身心の兩方面の發達を計らなければならない。而して精神教育上には、善を目的とする道徳教育と、美を目的とする藝術教育とを重んじて居る。ベルゲリオは希臘のプラトウの如く、美の中に於ける善の活躍を認めたのである。教授の材料としては、哲學、歴史、自然科学の外に修辭、音樂などの藝術的教科を必要とした。蓋し哲學は人間を自由ならしめる爲に學習せしめ、修辭は人間が哲學に依つて獲得したる思想及び感情を明瞭に、且つ美的に表現せしめ、音樂は人間の激情を去り、精神を鎮靜するものと思惟した。即ち音樂は其の旋律に依つて、吾々の感情の興奮を盛んに助成すると同時に、極度の感情に對しては、抑制的影響を及ぼすものである。ベルゲリオは音樂の教育的價値をば、後者の意味に於てのみ認めたものと思はれる。又彼は古來鋭敏高尚な精神の所有者が、多く強力な記憶能力を有しなかつた事を察知し、精神を鋭敏ならしむると同時に、記憶力の修鍊を重んじた。併し單に記憶の整理のみに止まり、想像能力の陶冶に注意しなかつたことは、藝術自由教育の爲には決して有利とは言へない。

ピットリノの思想　ピットリノ(一三七八—一四四六)は、教育事業を最上の慰樂と感じ、プラトウの所謂「自由なる人間は、自由に、即ち強迫的態度に依ることなくして教育せらるゝを要し、精神は誘起せしめらるべく、決して壓伏せしめらる可らず」といふ原則を教育の準據として、教育の目的に關しては、上古の希臘思想

に従ひ、身體と精神とを調和的に發育せしめ、また精神的方面にも偏重なからしめ、斯くて圓滿美妙なる人格を作るのを理想とした。教授の方面に於ては、言語的教材を中心とし、希臘語及び羅典語に由つての談話演説を巧妙優美ならしむる練習をなし、古文學者及び古辯論家の著書に親しむことを主とし、數學の外に音楽をも修めしめ、後更にプラトウやアリストテレス等の書を攻究せしめた。要するにピットリノの教育的見解は、希臘の「善而美」の思想に依つて人間を作らうとし、それに宗教的訓練を加味したのである。

ベギウスの思想

マフニス・ベキウス(一四〇七—一四四六)は、羅馬法皇保護の下に立てる人文派

の一人である。教育に關しては別に創見があつたのではないけれども、而も鋭敏なる觀察の結果を發表して居る。彼は藝術の教育的價値を信じて居たやうに思はれる。彼は體育に關する注意を述べ、母は精神を沈靜にし、爽快の心情を保持し、美的感情を把握する必要の爲に、常に其の居室には、優美なる繪畫や彫刻などの藝術品を安置し、それを鑑賞すべきことを論じて居る。これは少くとも藝術が母の精神を高雅にし、延ひて胎兒に何等かの價値ある影響を與ふることを察知したからである。兒童教育上に於ては、善美の感念を與ふべき童話を課し、特に不道德又は無價値なる童話及び怪談を排して居る。ベギウスが最初に推奨したのはエソップ物語である。この物語は、兒童に快感を與へ、更に學習せんとする意氣を喚發するに足るからと言つて居る。次に希臘羅馬の價値ある作物、例へばホメール、ウエルギリウス、シセロなどの書を用ひ、詩人其の他の作物の最も優秀なる部分は、之を誦誦し、模倣し、引用するに至らなければならない。けれども單なる模倣に陥つて自己の創見を缺いたり、或は自己の思想を正しく發表し、明瞭に表明し得ないやうでは駄目である。また音楽は閑暇をよく消費し、心情

の運動を適度にし、激情を和らぐるものである。圖畫も亦思想表現と美的感情の陶冶に有益である。故に兩者とも教材として價値があると論じた。

佛蘭西の人文主義

一體佛蘭西は中世時代の教育に大なる關係を有して居た。即ち武士道、大學、煩瑣

哲學に關する教育は此の地に發達し、佛蘭西は學術を以て誇るといふ有様であつた。従つて十六世紀の初め、人文主義の思潮が西歐諸邦を風靡した時でも、巴里は尙ほ煩瑣哲學の根據地たるの狀態にあつた。然り乍ら、心的活動の旺なる國民にして永く時潮に無感覺なる事は出来ない。徐々として人文主義が勢力を張るに至り、而も他國よりも一層其の教育的影響が確實であつたのである。最初人文主義の新精神は、上流社會を中心とせる小範圍に享受せられたが、而も國民一般をして高尚優美に傾かしむる重要な勢力、即ち藝術教育の源泉は、この上流社會から流出したのである。佛蘭西の文學、國民の美的趣味、快調なる生活法、其の移動し易き精神などは、少くとも文藝復興に由つて育成せられ、佛蘭西人に特有なる論理的な、且つ美辭的な筆法は、人文主義の藝術的教化に歸すべきものである。人文學者として、新氣運の昂進に功あつた者には、ギヨーム・ビュウデ(一四六七—一五四〇)、アンリ・ステファヌス(一五二八—一五九八)などがある。前者は古文學研究が基督教に危險なきを説き、希臘羅典語に關して有益なる研究資料を給し、後者は上古希臘及び羅馬の詩人、其の他の藝術家に關する有益なる著作をなし、以て斯道の研究及び教育上に準據を與へたのである。

英吉利の人文主義

英國國民性は古來保守的であつて、輕々しく新奇を求めず、容易に他を模倣しなかつ

たから、人文主義が伊太利に於て既に精華を發した頃、なほ中古思想に執着して居た。然るに十五世紀末に至り

英伊間の交通頻繁なるに伴ひ、伊太利の古書を購入し、或は留學生を派し、人文主義に迄の傾向は漸く其の勢力を増加して來た。従つて優美なる文藝の爲に設立せらるゝ學校も増し、それ等の學校にては藝術的陶冶が實現されたのである。斯くてグロオシン(一四四六—一五一九)、コレット(一四六六—一五一九)、トーマス・モオル(一四七八—一五三五)といふ様な、有名な人文學者の活動に依つて、人文的理想は終に英國に確乎たる基礎を定むるに至つたのである。一體英國人は或點に於て上古の人間に相通じた所がある。(一)英國人は政治的才能の保持者として、眞摯活潑なる辯術の修練を必要とし、従つて其の目的に順應すべき被教育者階級がある。

(二)上流の少年の教育は、上古の自由公民の教育と均しく、一定の職業的陶冶と無關係に、完全圓滿なる人格育成を主としたのである。隨つて上古思想の活現を求むる人文主義が採用せられ、それは英國人の品性陶冶、紳士的教育の要素として缺く可らざるものとなり、現代に及んでも尙ほ英國の教育に一道の生命を有して居る。されば英國の人文主義は、他國の夫れよりも餘程上古の本質に近接せるものと謂ふべきである。

獨逸の人文主義

伊太利に於ける人文主義の餘波は、十五世紀に於ける伊獨の深い關係から、アルプ山脈を超えて、獨逸方面にも波及した。併し其は十五世紀末であつたのである。即ち當時獨逸の大學に於ては、既に上古の雄辯術や藝術の講座が開設され、之を重視する傾向から人文主義の根柢を固め、其の結果、學校に於ては七自由術中の言語に關する三科が重んぜられ、就中羅典語を主とし、希臘語も亦殆んど同じ地位に置かるゝに至つた。斯くて十六世紀に至つては、遂に神學及び煩瑣哲學を全然驅逐するに至つたのである。そして寺院と學校との關係、宗教と教育との關係も昔程密接でなくなり、循世的生活も廢頽し、教師の獨身生活の制も破られ、

時勢は稍々放逸に流るゝの傾きさへもあつた。けれども人文的教化は段々と一般的に普及され、其處に發動せる新衝動は、能く近代的精神の進動を刺戟し助成したのである。

アグリコラ及びエラスムスの思想

ルドルフ・アグリコラ(一四四三—一四八五)は、獨逸に於ける文藝復興の輸入者、新人文主義の傳道者として有名である。古典を教授し、盛んに古文藝を奨励し、繪畫、彫刻などの造形藝術の教育的價值を認め、凡て學習の効果を獲得せんが爲には、第一に明瞭なる理解を得、第二に理解したるものを把住し、常に之を使用し、第三には既得のものを根柢として更に新しきものを創造するに至らしむるを要すると説いた。エラスムス(一四六七—一五三六)は、獨逸に於ける純粹なる人文的教化の最初の代表者であるが、彼は希臘や羅馬の古典を重視し、藝術及び宗教的陶冶の方面にも幾多の貢獻をなした。兒童をして自然に接せしめ、蒼天の無限なる、地上の豐饒なる、泉水の滾々たる、河川の蜿々たる、海洋の廣大なる、生物の多種多様なを考察せしむることは、自然界に對する美的觀照力を養ふのみならず、造物主、即ち神と人類との關係を知らしめ、神の慈愛と恩恵に對する感謝の生活を體得せしむるに價値がある。上流社會の兒童の爲には、特に自然科学の外に繪畫、彫刻、建築などの藝術科を修練せしむるの要があると言つて居る。

宗教改革期の藝術教育

中世紀の宗教的束縛を免かれた文藝復興の大精神は、次第に人間の知識的、批評的精神を練養し來たり、この精神は隔々宗教の腐敗墮落に觸れて、茲に宗教改革なるものが起つて來た。併し當時に於ける宗教熱の再興は、藝術教育思想發展の爲には餘り有利とは見えなかつた。マルチン・ルウテル(一四八三—一五四六)は、最初人文學派と直接の目的を一にしたのである。けれども兩者間には深い内部的反對

がある。ルウテルの世界観及び人生観は、人文主義よりも寧ろ當時の寺院の教に近く、其の中には中古時代の怪談妄想の世界があつた。然るに人文學派最深の性質は、出世間的觀想を離れて自然的世界觀に傾むき、近世の自然科學に迄發達すべき道を指示した。のみならず、人文學派の世界的精神、其の快樂的生活及びストア流の道德説は、ルウテルの非基督教的として排斥した點であり、基督教に於ける罪障慈愛の觀念は、人文學派の顧みなかつた點である。従つてルウテルは人文學派から離れて、獨力自己主義の徹底に力めたのであるが、併し彼は更に音樂教育——宗教々育の一方便として——を奨励したのである。音樂は神より與へられたものの中、最良最美の藝術であつて、精神の憂鬱を散じ、醜劣なる感覺的快樂を防止し、高等なる心情に満足を與へ、之を快潤新鮮ならしむるに足り、且つ人間をして溫和、篤實ならしめ、また合理的ならしむるものとし、隨つて教育者は能く音樂に通じ、自ら歌ひ、兒童をして常に音樂に習熟せしめるやうに導かなければならないと論じた。これ宗教的熱誠と音樂好奇のルウテルの當然企圖すべき事である。けれども其の根本精神は宗教にあるのであつて、音樂を教科の中心に編入したのも、彼のカルヴィンが基督教學校に讚美歌を採用したのと同じである。ツヴィングリーの如きは、藝術教育に關しては、全然それを拒絶したのではなかつたけれども、彼は十分に美の眞價を認めず、宗教的精神の發揚上藝術の効果を悟らず、感情の興奮は、眞理の認知力に少からざる混亂的影響を及ぼすものと思惟した。隨つて音樂と圖畫とは、たゞ家庭に於ける歡樂の手段として、また愛國的熱情を喚起する方便として、其の價値を與へたのに過ぎなかつた。スツルムの如きは、教育上學校劇を重視して居たが、併しそれも羅典語練習が主であつて、其の爲には劇の内容も犠牲に供せられたのである。ミケール・ネアデルの如きも、教育上に於け

る一切の藝術は、たゞ兒童の敬虔心の養成に盡すべきものと見做したのである。十六世紀後に於けるエスイット團體の憲法に徴するも、古文學の如き、唯だ神を知り、且つ之に奉任する目的を一層容易に達せんが爲に用ふるの趣旨である。文學教授に於て、言辭の流暢、詩文の巧妙なる構成を重んずるも、それは宗教上の目的達成上の一方便としてであつた。尙ほ同團體の教育に於ては時々生徒に學校劇を演ぜしめたのであるが、其の目的は單調なる寄宿舎生活の慰藉と、作法を學び、其の態度を端正優美ならしむにあつたのである。

宗教改革以後に於ても、人文的傾向は久しく其の勢力を維持し、新教の學校に於ても、舊教の學校に於ても、古學の研究、文法、修辭、辯論の如きを貴重し、人文學派の理想は十六世紀の教育に於て最も有力であつたのである。然るに一方中古の煩鎖哲學に反する自由な現世的傾向は、實學の急速なる進歩を促し、實學的教育家をも輩出した。併し實利を重んじ經驗を貴びはするものも、未だ人文主義の思想を脱して居らない、所謂人文主義的經驗主義であり、人文主義を加味したる實學的傾向が旺盛になつて來たのである。佛蘭西のラブレ、モンテ、ス、シャルロン、英吉利のベーコンの如きは、この新傾向の發達に盡力した人達である。ラブレは假設的人物ガルガントワの口を借りて、教育上の意見を吐露して居るが、此の假想人物は藝術上の知識を吸収して居るか、併し音樂、繪畫、彫刻などを一の娛樂と見做して居る。モンテヌの如きは、人文主義より實利主義への過渡的思想家の觀がある。彼は教育の目的を人間性の修養にありとし、人文的な美的要素を含んでは居るが、或場合には、言辭を學び、美辭を習ひ、優美なる論文や詩作の爲に兒童期を過さしめるのは時間の空費であると言つ

て居る。ペーコンの如きは、演劇を職業として行ふのは賤しむべきであるが、併し教育に適用すれば最良の價値を發揮すると言つた。宗教改革と均しく、實學的傾向の勃興もまた藝術教育思想發展の爲には餘り有利ではなかつたのである。」

第四章 十七世紀の藝術教育

教育思想の新傾向

佛蘭西のラブレ、モンテーヌ、英吉利のペーコンなどは教育家ではなかつたが、併し是等の人々の實利的經驗的學風を繼承し、忍耐不撓の精神を把持し、以て教育の改善進歩に貢獻し、遠く後代に影響を及ぼしたラトケ、コメニウス、ロックなどの教育家が出て來たのである。然らば斯様な人達は何故に實利的經驗的學風を繼承したのであらうか、夫れに關しては時代の背景を考察しなければならぬ。

一體時代は其の教育思想を生む舞臺である。廣くいへば倫理も、科學も、藝術も、哲學もまた時代の反映を受ける。況んや教育といふ社會事業、而も其の上に樹つ教育思想を考察するには、其の時代の背景を觀なければならぬ。然るに十七世紀の獨逸は、三十年戰爭の結果、物質的に精神的に陰慘の極に達して居た。コメニウスは其の戰禍を蒙り、ラトケは戰亂半ばに死した。併し獨逸の教育家、藝術家、科學者は研究を怠らず、第一シンゼン文學會はオピッツ等に依つて創立せられ、天體運動の法則はケプラーに依つて發見せられた。藝術や科學は戰亂の間にもかゝらず新光を放ち初めた。併し一般民衆の智識は甚だ低級であつたのである。十七世紀の英國もまた、内亂と革命とに苦しめられて居たが、併し其の間から憲政と國運發展の曙光が現はれて來た。斯かる動搖の間にも、科學者や藝術家は其の本分を忘れず、ニュートンは宇宙引力の法則を發表し、ミルトンは藝術的傑作の幾つかを出した。併し教育は一般に振はず、上流のものは佛蘭西の影響を受けて、音樂や繪畫や舞踏を學んだけれども、下流のものは祈禱の知識を得る位に過ぎなかつたのである。十七世紀の佛蘭西は、全然英獨に反し、

平和隆盛の時代を続け、殊にルイ十四世の榮華などは人の能く知る所である。故に佛蘭西藝術の發達は其の極に達し、哲學や科學も進み、ラシーヌ、モリエール、ラフォンテーヌ、デカルト、バスカル等の徒を輩出したのである。

西歐十七世紀の教育思想は斯様な背景の上に築かれて居る。就中哲學の經驗的合理的風潮と、科學の發明進歩とは特に注意すべきである。即ち凡てを知識作用に依つて説明せんとするデカルト一派の合理主義や、經驗に依つて凡てを解釋せんとするベーコン、ケプラー一派の經驗的學風は、兩者の傾向に多少の差異あるに拘はらず、共に近世思想界に一大光明を放つたのである。教育思想は時代思潮の影響を受くることが大である。故にラトケとコメニウスの教育思想は、自然科學及びベーコンの經驗的思潮に影響せられ、ロックの教育思想は、經驗的思潮やデカルトの合理的哲學に影響せられて居る。教育思想家や革新家は時代に一步を先んじて居ると主張しながらも、而も時代精神の影響の上に立つて居る。然らば十七世紀の藝術教育は如何なる有様であつたか、新進の教育思想家は之を如何に見、如何に取扱つたのであらうか、これ吾人の研究題目である。

コメニウスの思想 ユメニウス（一五九二—一六七一）は其の思想上より見るも、其の心情及び性行上より見るも、確かに十七世紀教育界の一大偉人であつた。その教育の目的は近代的ではなくして、寧ろ中世的宗教的であつた。彼れの見解に依れば、人間は神の創造物中の最完 最高、最終のものである。即ち神の小像に外ならないのであるから、人間としての最完性を發揮するには神と結合するにある。人間の生活には植物的生活、動物的生活、精神的生活の三つがあるが、人間は最後の精神的生活に依つて、天國に於ける永遠幸福の生活に進



COMENIVS

むものである。現世的生活は永遠な天國生活の準備に過ぎない。而して人間は永遠生活への準備として認識、自制及び神へ向ふ三階段を経過することが肝要で、科學、道德、宗教が之に相當する。コメニウスは此の三性質を以て現世に於ける人間の全本質と見做し、教育は此の本性發揮に盡すべきものと言つて居る。現代人のやうに眞善、美、聖の調和的發達を文化の理想と考へるならば、コメニウスは確かに目的論に於て美の理想を輕視して居るのである。實際彼は美及び藝術を以て、人間の健康、強壯、富貴、友誼、長壽など、共に、たゞ人間的生活の外部的裝飾に過ぎないものと見做したのである。

然り乍ら、吾人はコメニウスの思想の中から、藝術教育に関する幾多の實際的な示唆を受けるのである。殊に教育の劇化といふ事に着眼したのは先見である。彼は個性に應ずる教育を唱道し、客觀的に自然を尊び、教育は自然に従はなければならぬ。幼兒期に於ては、外的感覺の練習を主とし、少年期に於ては、内的感覺、想像、記憶の練習及び手と言語とを讀方、書方、圖畫、唱歌、算術、測量に依つて養ひ、青年期に於ては、悟性と判斷の練習を辨證法、文法、修辭、科學、藝術に依つてなし、成年前期には全精神の調和を計り、神學、哲學、醫學、法學を修むるのである。コメニウスは斯様に人間發達の自然的階級に應ずる教育を教へ、更に、自然は全我活動を内部より外部へ及ぼすものであるから、吾人は内部精神の作造を先とし、次で外的表現に及ばねばならぬ。藝術的活動性の教科に就ては、直觀と作業及び其の練習を主とし、教授上に於ては、(一)既知の材料から出發し、(二)最初は模倣により、後には自由にやらせる、(三)最初の模倣はなるべく十分ならしめる、(四)觀察を完全にし、(五)分解と綜合の兩方面をやらせる、(六)一定の形式及び規範による、(七)形式は成る可く完全なら

しめる、(八)動作を尊重し、動作に依つて學ばしめる、(九)練習は各要素から始め、それを習慣になるまで続けしめる。コメニウスは其の心理的考察が的確でなく、教授論にも獨斷の點があるとしても、而も教育の要素を重視し、心情陶冶に關しても後人の參考となるべき暗示多き識見を披露して居る。

コメニウスの教育方法論中、藝術教育上の見地から特に吾人の注意すべきものは、彼が直觀教授の立場から教育の劇化を企圖し、之に依つて人間教育を完成しようとした事である。彼は其の著、「遊戯の學校」(Schola Ludus)の全部を八つの劇で成立せしめて居る。第一劇は地上に於ける自然物の研究で、今日でいへば廣義の自然科教授を劇化したものである。第二劇は神の業を劇化したもので、即ち神が自分の肖像にかたどつて地上に人間を造り、感覺や心情や理性やを賦與せることを物語る。第三劇は藝術上の事柄を劇化したもので、第四劇は下級學校の教育を遊戯化し劇化したものである。第五劇は高級學校の教育を劇化したもので、數學、物理、地理、歴史、論理、哲學、道徳、其の他の教授を劇に仕組み、知識や思想が相互に交換され得るものであることを説いて居る。即ち此の劇の趣旨は、知識は凡ゆる可動的のものよりも一層可動的のものである。蓋し知識は凡てのものに觸れ、そして之を捉へるからであるといふ事である。第六劇は人生の道徳的方面を劇化し、劇的方法で道徳教育を企圖したもので、第七劇は家族生活、國家生活の劇化であつて、現代の語でいへば公民教育の劇化である。第八劇は宗教々育の劇化で、神が天地の主宰者であることを明瞭にし、イスラエルの王をして、「吾こそは最初のものであり最後のものであり、始めてあり終りである」といはしめて居る。

コメニウスの教育の目的は雄渾嚴肅なものであつた。且つ其の教育法が實學的歸納的であつて、一切を自然の

法則の上におき、教育の劇化などを説いて居る所などは一大創見といふべきである。けれども惜い哉、彼れの大教育は十九世紀になるまで世に現はれなかつた爲め、其の思想は一般に感化を與へず、單に彼れの生活圈内に擴張されたに過ぎなかつた。併し彼と共進の精神を有するものは陸續として現はれた。フランケ、ルッソー、パゼドウベスタロッチ、ヘルバルト、フレエベルなどは凡てこれである。

ロツクの思想

ジョン・ロツク(一六三二—一七〇四)に依れば、教育は心身の健全を助成すること

である。即ち個人の身體及び精神の健全なる發達をはかり、精神的方面に於ては道徳を主とし、そして國家社會に有用な人間に仕上げるのが、彼れの教育の理想であつたのである。故に彼は教育の凡ゆる方面に就て論じ、體育、知育、徳育などに關して、主として纏つた功利説を發表して居るが、併し美育の方面を閑却して居るのは彼れの一大缺陷である。即ち思考判斷の力の發達に重心を置き、心情の陶冶を輕視し、殊に生活を高尚優美ならしむる技能に對抗して功利的原則を過重し、教育事業を餘りに實用的にして乾燥無味ならしめたのである。

けれどもロツクは、彼のコメニウスと同じく個性を尊重し、直觀に依る教育を貴んだのである。故に教授に際しては、例へば讀本の様なものは、一面に於て兒童の喜ぶ内容を有することが肝要であるから、人間や動物などの繪畫を挿入するがよい、何となれば、物體の觀念は言語よりも實物又は其の寫象に依つて得られるからである。故に伊蘇普物語の様なのがいい。又兒童の學習能力の効を得んが爲には、圖畫の練習を始めなければならぬ。圖畫の技能は色々の點に於て、又色々の機會に於て大に効益がある。乃ち數百語を並べるよりも、一圖で觀念を表示するのが數倍明瞭な場合がある。建築物、工藝品、器械などの觀念も亦圖畫的表現の方が明瞭である。技能

に關する教科では、先づ舞踏が大切である。舞踏は作法上の正しい態度と、男性的姿勢とを養ふものであるから早くから練習せしめねばならないが、併し餘り幼時に學ばせるのは不適當である。舞踏の教師は、作法及び禮儀の何たるかを知り、身體の運動を自由にすることに注意しなければならぬ。形式は抑も末であつて、態度の高尙が中心である。音樂は舞踏と關係して大に貴重せられ、舞踏に類する價値を有して居るが、併し音樂練習の爲に多大の時間を費すのは惜しい。音樂家の如き者は社會的地位が低級であるべきである。また詩歌は能く放蕩と相伴ふ。故に兒童を詩人的人格に仕上げようとしてはならない。想像を進め、知力を發達せしむるには、兒童に惡詩や童謡を作らしむるよりも、寧ろ希臘羅馬の詩作を讀ましむるに如くはなしと言つた。ロックは美及び藝術の眞價を知らず、大教育家と謂はれたのかゝはらず、藝術教育に關しては一知半解の徒であつたので、實に彼れ自身が眞正なる藝術的教化を享受して居らない證據として、「知識ある野蠻人」たるの譏を免かれることが出来なかつたのである。

ミルトンの思想

失樂園物語を以て世界的詩人となつたジョン・ミルトン（一六〇八—一六七四）も亦十七世紀の教育思想家として顧みねばならない。彼が教育の目的は神を知り、神を愛し神を模倣し、神に近くにあるといつて居るのは、コメニウスと同じく現世的ではない。併し言語と形式とに反して、知識と内容を重んじて居るのは明かに近代的で、又人生活の實際的準備としての教育を施し、其の方法體中世的の壓制法に依らず、愛と愉快とに基づいて爲さるべきものと見做したのは全然世間的見解である。

ミルトンの書いた「教育論」は小冊子ではあるが、併し教育革新家としての彼れの意見は大に注目すべきである。蓋しミルトンは、當時の社會の腐敗を慨歎し、青年教育には、基督教主義の外に、人文的古典的要素を加ふるの必要を説き、一面に於ては秩序ある具案的な藝術教育を國民に施すべき事に就て熱心に研究し、大に斯道獎勵に努力したのは、ロックなどとは違ひ、吾人の特筆に價すべき點である。彼が盲目となり、世を退いて後に書いた「失樂園」は、藝術的傑作として、彼のダンテの神曲、ゲーテのファウストなどと共に、藝術教育の最高教材として生命あるものである。

ボオル・ロワイールの教育

ボオル・ロワイールは、十三世紀頃から巴里に存在した僧徒の名である。十七世紀頃になつて、信仰心の厚い學識の高い人達が集合し、ジャンセン主義——基督教界の革新を目的とするもので、和蘭人ジャンセンの創唱にかゝる——に従つて、獻身的に學問、教育、宗教的訓練の爲に全力を盡したのである。此の派の人達は人間の罪障深き事、人間性の腐敗したることに着眼し、憐憫慈悲の情を以て之に對し、溫和親切の態度を以て兒童の教育訓練に従つたのである。教授はたゞ理性の力の完成にある。従つて科學及び言語、歴史、數學などは理性を完成し、判斷力を陶冶する上に價値ありと信ぜられて居た。教授の方法は自由な遊戯的形式により、一教授が濟めば、兒童は必ず丘に登り、平野を駆け廻り、而して後又教授を受けるのである。郊外教授は特に同派の獎勵した所であり、綠の蔭、河の邊は教授の場所であつた。斯くて兒童の常に接する教師の模範、意味深き談話、憤み深い信仰、藝術的精神に生ける人格などは、能く敏感な兒童の心に「眞及び美の觀念」を吸入せしめたのである。

ボオル・ロワイールの教育は、種々なる點に於て缺點ありしに拘らず、其の教育者の信仰的熱誠、藝術家的獻

身は能く兒童を感化し、教授訓練の實際に於て遙に當代の教育界に卓越し、後世の模範たる點が尠少でなかつた。蓋し吾人の着眼する所は、同派の教育家の没我的、藝術家的な獻身的態度と、教育作用を有機的、藝術的に取扱つた點にある。實際同派の教育家中にはニコール、ランスロー、ギュー、アルノルドの如き知名の人文學者があり、近世初期の人文學者の如く、單に形式に偏せず、正しき判断及び時勢に應じたる思想を、古學者の例に倣ひ、優美に發表することを主とした。新人文主義の根柢は即ち彼等に由つて殘されたものといふべきである。

フェネロンの思想

フェネロンはジャンセン派の佛國女子教育家として名高い。彼は教育思想家たると同時に文藝の方面にも筆を取つた人である。兒童の脳髓は柔かであるから、種々の印象を與ふるに有利である。自然的稟賦は悪くとも、精神の機關を強めることに依つて、正直に快活に靜肅にすることが出来る。これを兒童期に怠れば、其の全生涯が害はれて了ふ。精神が定まらない中に偽、惡、醜に向はせるものは、これ第二の原罪ともいふべき人間の罪である。然るに現代の風潮は之を閑却し、放任して居るから、無知の女子は其の徒然に苦しみ、隨つて遊樂に耽ける様になる。かくて勤勉を厭ふやうになるのである。家庭の母は女兒の性質を究め、悟性慾望、心情の傾向と取扱ひ方を知り、家庭の種々なる業務に従事せしめ、學校に於ては讀方、書方、算術、法制、經濟の外に音楽、詩、圖畫、歴史をも授けなければならぬ。斯くて悟性を鋭敏にし心情を高尙ならしめなければならぬ。詩歌及び修辭に關する書は、之に就て愉快を感じ、又之を誤用しない程度に達した者に讀ましめねばならない。音楽と圖畫との修練に依つて、女子は美の法則に適するに至るであらう。兒童は滑稽的の物語を好むものであるから、寓話に依つて之を歴史に導くことが必要である。つまり兒童の充實した生々たる想像力を眞

面目な研究的方面に誘導するのである。フェネロンは斯様な具案的方面にも論及し、直觀教授を説き、また遊戯と教授とを交へ、愉快の中に教授することを主張して居る。教授を愉快にし氣持よくし、自由と愉快との間に研究をかくすのであると言つて居る。之は夙にモンテーヌが唱へ、ロックも説き、後代に及んではバゼドゥ等も試み、ヘルバルトも興味を中心にして居る。近時の藝術派の人達の主張する自由と愉快といふことも之に外ならない。フェネロンは當代に於て女兒の美的陶冶の必要を承認したもの、一人である。

敬虔派の心情陶冶

フランケ (一六六三—一七二七) は宗教的人文主義の足場から、感情陶冶を力説して出た教育家である。教育の主要目的は神の名譽に存する。之を達成する方便は感情陶冶にある。自分は直接に神を兒童の心情に導くのである。其の爲には祈禱といふことが教育の最良方法となるものである。祈禱と共に聖書を読むことは出来るだけ早くから始むべきである。併し其の中心は何處迄も心情の陶冶にある。心情の陶冶は意志及び悟性に影響する。同時にまた直接に意志を服従に持ち來たすことが必要である。斯様にフランケが、心情の陶冶から神への信仰に導かうとしたのは流石に敬虔派として然るべき點である。

フランケは教育の二要素として、(一)信仰にまでの指導、(二)基督教的知育、此の二つを擧げて居る。信仰心の養成法としては、兒童期から教へねばならぬ三つの徳がある。即ち眞理を愛せしむる事、從順ならしむる事、勤勉ならしむることが夫れである。眞理に對する愛の養成には、先づ虚偽を避けしめ、神は眞理の神であるから虚言をいへば神の子ではないことになると言つて聞かせる。從順は兒童が聖書に歸依するの徳であり、労働を愛すること即ち勤勉でなければ怠惰に陥り繼續忍耐の氣力を失ふやうになる。かくて眞理に對する虚偽、從順に對

する剛愎、勤勉に對する怠惰を戒しめ、善惡兩面に作用する模倣の價値を認め、基督教的知育に關しては、一體知識は科學、認識及び經驗に依るものであるから、知育には先づ注意を惹起し、次に宗教的經驗を豊富にし、また先入主の偏見を去る事が必要であると言つて居る。けれども、眞理の愛を體驗せしめんが爲に虚偽を惡魔視するは當然とするも、而も滑稽談、假作物語、小説などが人生の假構を表現するからといつて、文藝は虚偽を教へるものであると見做し、眞の偉大なる文藝までも排斥し、たゞ祈禱や説教や宗教的訓示のみを重視したことは、寧ろ眞理を愛し神の道へ近接せんとする信仰的感情陶冶上、害はあつても益はない。のみならず、喜劇を観るが如きは心情を休養せしめずして腐敗せしめる、音楽は世俗的快樂に傾かしめるから、兒童には課す可らずといふが如きは、宗教的陶冶に於ける藝術の眞價を曲解せるものといふべきである。

シャフツペリーの思想

藝術教育思想上の見地から、當代に於て特に注目すべきものは、シャフツペリー(一七七一—一七九三)の思想である。英國の倫理學は彼れの研究に依つて一轉歩をなしたものと謂ふべきである。彼れの倫理學は希臘風の藝術的世界觀に依つて養はれた哲學思想に根ざして居る所がある。彼れの世界觀は、部分と全體との調和に關する觀念を根柢とし、吾人の身體の個々の部分が、全體的に纏められて一團體をなし、而して其の全團體を活動せしむるものが即ち吾人の精神である様に、宇宙は多様の統一調和された一團體であつて、其を活動せしむる精神はこれ即ち神である。故に世界の一局部のみを見れば不調和もあるが、其の全體に眼を放せば善美でないものはない。彼は殆んど恍惚として此の宇宙の美に對し、そして之を迎ふるに宗教的感情を以てしたのである。斯様にシャフツペリーは希臘思想に流れて居た美的世界觀の見地から考へたから、道

徳上善を論ずるに際しても、之を美的調和と相離さず、吾人に具はる自然的諸性能の調和を以て、吾人の徳行の主眼となしたのである。そして一個人に於ける性情の調和と、社會に於ける個々人の調和とは、相互に其の歸向を一にするものと主張して居るのである。

シャフツペリーに依れば、各個人の具有する利己的性情及び社會的性情が、社會一般を益する様に調和して居る事は、取も直さず、各個人自らの利益を來たすに最も適せる所以である。而して斯様に云爲する人を稱して「善人」といふ。更に其等の善良なる行爲及び、斯種の行爲をなす所以の性情を反省すれば、其處に自ら其の行爲及び性情其の者を嘉する心を起す様になる。一言すれば道徳上の善美を善美それ自身の爲に愛し、其の反對を惡む心を生ずる。此の心情が即ちシャフツペリーの所謂「道徳官」(Moral Sense)である。併し此の道徳官はなくても、利他の性情があるから、其の性情を満足せしむる事其の者に自らの悅樂を感じ、又他人の幸福にも同感して、同じく其を樂しみ、又左様な善業を爲すに依つて他人に敬愛せらるゝ事を思ふて自ら我心に悅樂を感じる。且又利己的性情は之を制御しなければ、却つて自ら種々の苦痛を感じる原因となる。因是觀之、利他的な社會一般を益する行爲が之と共に自己の幸福なることが明瞭である。加之、道徳官即ち正義善業を自ら喜ぶ所の心を加ふれば、更に明瞭に社會全體を益する徳行と、各個人の眞實の幸福とが密關不離なることが知られる。而して彼は此の道徳官を以て生得的のものと觀じて居たのである。

シャフツペリーの思想では、徳行と各個人の利益とは、特に神意を以て附加せらるゝ賞罰に待つ所なくして相合するものである。故に福徳兩者を合一せしめる爲のものとしては宗教を必要とする理由がない。宗教は寧ろ道

徳的性情の冠となつて其を完ふするものであつて、道徳が宗教を基礎として其の上に立つものではない。換言すれば、道徳的感情が高大になつて、宇宙の善美に仰ぎ向ふ所、即ち其の頂上に達したる所に宗教的感情が現はれる。彼れの藝術的世界觀に流るゝ美と善との融和の思想は、後世に於けるラスキンやウヰリアムモリス等の思想に及んで居る。

十七世紀の學校劇に就て

十六世紀の劈頭に於て、ナフェーリスの新羅典劇「アコラスタス」の出たこと

は既に論じたが、其の後ポードクス大學教授をして居たバックカンの創作にかゝる四つの新羅典劇が現はれた。之は羅典語教授の目的で、それを自分の子弟にやらせたのである。元來バックカンは蘇格蘭の有名な史家であつたが、宗教上の見解を異にしたため佛蘭西に追はれたのであつた。モンテーヌは其の門下生であるが、バックカンを當時第一流の詩人であると推獎して居る。一般に當時の學校劇が羅典語教授を主目的として演ぜられたことは明瞭であるが、然るに羅典語が其の地位を失ひ、其の國々の國語が夫れに代り、殊に佛蘭西語が國際語となるに伴れ、學校劇なるものも衰微した。畢竟羅典語の教育的價値の失墜が纏て新羅典劇の衰微を促したのである。従つて十七世紀には殆んど學校劇が其の生命を失つて居たと言つてもよい。併し新羅典劇の衰微は他型の學校劇の勃興を促した。即ち英語で書かれた學校劇が英國の教育界に發達し、獨逸語で書かれた學校劇が獨逸の教育界に重要視せらるゝが如きである。併し英獨の學校劇は各々其の趣向を異にして居た。英國では學校劇は記憶・音聲、發音、ジュスチエアーなどの練習に活用せられたが、獨逸では宗教的・道徳的訓練の爲に活用せられたのである。斯様に國々に依つて多少の異趣があつたのは當然であるが、併し學校劇は、一般に語學修練の爲に、或は兒

童の發表練習の爲に、或は道徳的訓練及び宗教的訓練の生きた感激を與ふる爲に、或は何物か深き心靈の世界を提供せんが爲に、或は兒童及び父兄の心情慰安の爲に、或は學校劇公開より生ずる若干の収益を以て校費及び教員俸給の幾分に資する爲に、或は演劇に對する愛好心の發達に貢獻せんが爲に教育關係者間に廣く認められて居たのである。

第五章 十八世紀の藝術教育

教育の世紀 教育の世紀と呼ばれた十八世紀の思想界は、其の主潮に依つて、前後兩期に分つて考察することが出来る。即ち唯理的經驗的學風に培はれて發達して來た啓蒙思想隆盛時代と、新人文主義が勢力を振ふた時代とが夫れである。啓蒙時代に於ては、理性萬能の爲に藝術教育は十分唱道されなかつたけれども、人文的要素を力説し、感情と美とを重視した新人文主義の勃興に伴れて、藝術教育は再び擡頭して來たのである。

思ふに歐洲文化の中心は、本世紀に入るに及んで、或意味に於て、佛蘭西から普魯西へ移動した様に思はる。ルイ十四世が驕奢を極めた後の佛蘭西には、全國に淫靡の風が流れ、其の間に革命思想が醸成せられた。モンテスキューの萬法精理や、ルッソーの民約論などは、自由革命思想の一遠源をなしたものと謂はれて居る。外交上の權利は他國へ移動したけれども、佛蘭西の文藝は尙ほ光をとどめ、ヴォルテールの如き文豪を出し、哲學界はロックの思想を汲んで、其の經驗的分子が極端に運ばれ、科學界に於てはラプアゼーの發見や、ラブラースの天文學的貢獻などは著名なものである。英國に於ては立憲國是が既に定立し、本世紀は比較的平穩であつた爲に、文藝の發達も著しく、バインズの詩の如きは當世隨一の絶調と歌はれ、パークレーやヒュームなどは、彼のロックの認識論の缺陷を補つて現はれ、前述のシャフツベリーの感情主調の倫理説も行はれ、アダム・スミスは經濟上の貢獻家として後世に生きて居るのである。

英佛二國の文化基調に比し、獨逸の夫れは實に旺盛なものであつた。侵略主義のフリードリヒ大王は、勤儉尚

武の國是を開展すると同時に、啓蒙思想家を以て自ら任じ、ヘッケル等の助成に依つて教育の振興を圖つたのである。大王治世の後年、即ち七年戦争後は獨逸文藝の黄金時代である。是より先、ライブニッツは既に調和の哲學を把持し、ヴォルフは哲學の組織に力め、バウムガルデンは美學に貢獻したが、大哲カントが純理批判を出すに及んで、哲學は新時代に入つたのである。然るに新人文主義が合理的傾向に反對して樹つに及び、嶄新なる思想感情は翕然として起り、人心は遼遠の世界に憧憬し、牧歌的樂園を夢みつゝ、新しき社會的根柢の上に翼を張つたのである。キンケルマン、レッシング、ゲエテ、シルレル、ウイランド、ヘルデル、リヒテル等は、相前後して現はれ、實に獨逸文藝の黄金時代を形成し、更にバハとモッアールトとは、音樂的天才として當代を飾つた。就中ゲエテ、シルレル、ヘルデル、リヒテルなどは、新人文派教育思想家として特筆すべき人達である。

十八世紀の世界、特に獨逸に於ては、斯様に多くの哲學者、思想家、藝術家などが萬丈の氣焔を吐いて、文藝史上光榮ある時代を形成したが、教育界もまた非常に賑やかであつたのである。即ちバゼドゥ、カンペ、ザルツマン、ロヒョウ、ペスタロチーといふやうな、教育史を飾る偉大な人達が活動した許りでなく、ゲエテ、シルレル、ヘルデル等の藝術家達迄教育を論じ、萬人が人類の教化に着眼したから當代を教育の世紀と呼ぶのである。

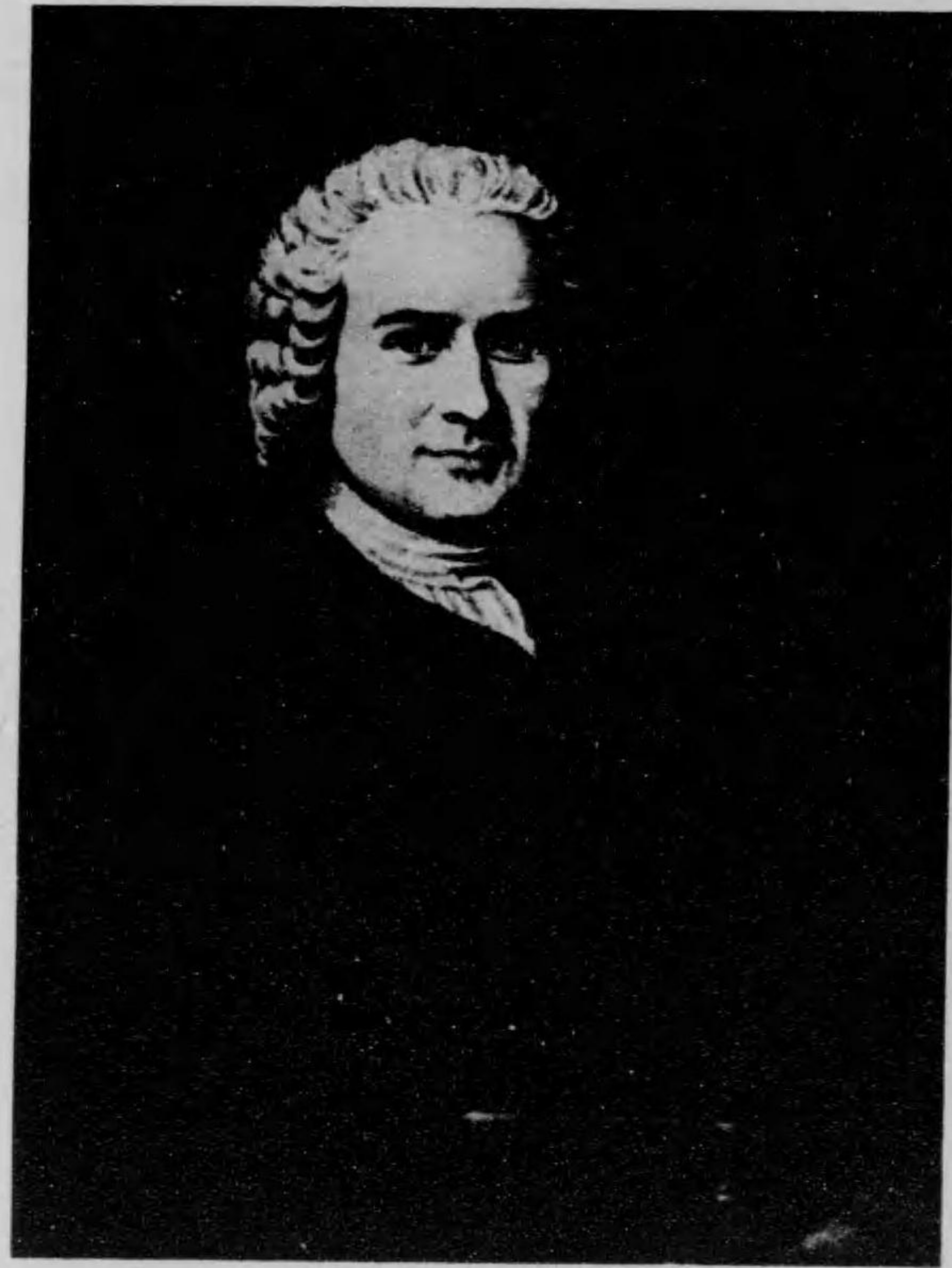
啓蒙思想と藝術教育

啓蒙思想乃至啓蒙時代——これは前世紀からの發展である——とは何であるか、明かに理を正すを主とする思想、飽迄も解明 (Aufklärung) を主とする時代である。哲學でいへば理性中心主義、神學でいへば理神論、倫理學でいへば主知主義である。理性主義といつても、デーカルトの唯理論ではなく、既

に是等より轉じた感覺中心、従つて自然を中心とするものである。この傾向は佛蘭西の思想に最も明瞭に現はれて居るが、英吉利の理論もまた總て自然宗教と稱せらるべきである。シャフツベリーの感情中心も、自己に於ける自然的感情を主張したものであつた。この自然中心の考へは、彼のルッソーに於て最も著しく現はれ、自然の權利と、自然の倫理と、自然の宗教と、而して自然の教育とを主張し、就中この教育的見解は汎愛派に依つて一層擴大せられたのである。

乃ちこの啓蒙時代の合理的傾向は、凡ゆる範圍に於て一般に通ずる理論を求むるに至り、一面に於ては個人の生活、其の獨立的考察及び良心の自由を最も有力に主張せる個人的傾向を生じ、この傾向は宗教若くは國家が個人の良心及び權利を抑制するものとなし、従つて自然の勢として自己保存及び幸福に對する希望を生じ、即ち此の世界は唯吾人をして生存せしめ、幸福を享受せしめんが爲に存するものとせられ、人間は其の考察し又行ふ所を唯自己の利益の爲にするものであつて、自己の利益増進を助くるものは、即ち道義的たり得るものとせられたのである。而して幸福を得る手段としては、經驗と悟性とに依頼し、之に基づいて有益なる技能を修得し、自然を支配し、衣食住の上に於て實益を收め、便利安全の増進上得る所あるを要するとせられた。かくて此の時代は、知識主義及び感覺主義に傾き、感情の基礎を缺く概念、經驗を超越する高等なる世界に關する理想、藝術の本體たるべき美的理想境の如きは、其の顧みられなかつた所である。

従つて人生の開化と野蠻とは、知識の有無が其の限界線となり、人は皆發展し得る天性を有すれども、其の實際的發展は教育に依るが故に、學術を以て人智を擴張し、記憶を豊富にし、判斷力を鋭敏ならしめねばならない。



ROUSSEAU

反之、想像を刺戟することは危険である。特に空想に流れ易く、且つ神經過敏なる時代に於ては、人間の想像を刺戟する方便は最も有害であるとせられ、随つて詩歌、文學及び其の他の藝術的構成乃至藝術教育に關しては、甚だ冷淡なる傾向を生ずるに至つた。即ち啓蒙時代の合理を尊び實利を先とする傾向は、遂に藝術を無用視するに至り、甚だしく藝術教育の發達を害し、深く人間の藝術心を沈降せしめ、生活は藝術と没交渉となり、審美心は麻痺し、嗜好は凡ての階級に於て下劣に傾き、工藝、建築、室内裝飾を通じて無味、淡泊、劣等なる状態を演出したのである。

自然に歸れ

「自然に歸れ」の運動は、獨逸の敬虔主義や、英國の清教主義や、英佛の合理主義に代つて、當世歐洲の思想界を風靡するに至つたのである。従つてルッソー（一七二一—一七七八）が先づ人間の憧憬の中心となる。ルッソーの根本思想は、自然は絶対的の價值を有し、文化は相對的の價值しか有しないと観する所にある。エミールの首句たる、「神の手から出て來た時は、凡ては善であるのに、人間の手でそれを害つて了ふ」といふことや、民約論の首句たる、「人間は自由に生れて、而も鎖で繋がれて居る」といふ詞などは、之を明瞭に物語つて居る。自然中心、自由中心が彼れの哲學的根柢である。

近世の教育上に於て、自由觀念が驚く程に高唱されて居るのは、實にルッソーの教育論である。彼は自然的自由觀の代表者である。のみならず、近代の所謂自由教育流の一部にも尙ほ其の生命を流して居る。ルッソーの教育論の骨子は自然といふことで、彼れの自由觀念も亦此の自然觀念を離れては理解が出来ない。然らば其の自然とは何であるか、教育史家モンローに依れば、（一）彼れの自然といふことは社會的意味を持つて居る。即ち自然人といふ

ことは原野に於ける野蠻未開人の意味ではなくして、社會に於ける蠻人である。自己自身の自然の法則に依つて自己を指導し支配するといふ意味である。之はルッソーの自然を社會的に觀た意味である。(二)又彼れの自然は心理的に見ることが出来る。即ち吾々の行に對しては、本能的の判斷とか、極く低級的情緒とか、最初の印象といふ様なものは、反省や聯想の働などから出て來る經驗よりも、一層確實な基礎で、吾人の一層信用し能ふものである。(三)又ルッソーの自然は、動植物などの自然物といふ意味に使はれて居る場合もあるといふ風に論じて居る。小西博士はルッソーの所謂自然觀念をば、教育の目的としての自然と、方法上の自然とに別けて觀じて居られる。即ち教育の目的としての自然は、人間の自然的の法則に従つて自己發展を爲すの意味である。ルッソーは市民を作る前に先づ人間を作れと叫んだが、此の人間といふものは、結局當代の感覺論や唯物論とは違ひ、情意生活の力に權威を發見し、自己自身の自然の力で、彼の所謂善の生活を遂ぐる人間の謂である。ルッソーは此の意味に於ける自由人を教育理想の内容として居たのである。此の場合に於ける彼れの自然は即ち自由である。ルッソーは未だカントやフ・ヒテ等の様に、自己の眞義を深索確定せず、従つて自然性を秩序ある理性、即ち善と考へて居たのであるから、本能の如きも善となる譯である。而も他方に於ては神秘的哲學的背景を有し、自然は神であり、又不可抗的の運命であると觀じて居たのである。此の自然此の自由は積極的方面であるが、消極的方面としては、其の時代に於ける腐敗せる社會の傳統的な無價値な拘束を超越し、是より自由にされ解放された人間を理想としたのである。而もカント流に理性的生活を正面に標榜せず、寧ろ原人生活の無垢な生活を憧憬したのである。尙ほルッソーが教育の方法觀からみた自由の觀念は、教育は兒童の自然性の發達に基づく可しといふのである。要す

るに彼は民約論に於ては、出来るだけ個人々々の自由平等の社會を造らうとしたが、エミールに於ては、此の社會の成員として、自由の教育に依つて、自由の素質からして自由人を養成せんと試みたのである。藝術教育に關する彼れの見解は、エミールの教育過程中に求める事が出来る。元來ルッソーは當時の唯物論に反對したもので、唯理主義から感情主義に移る源は、實にルッソーに發して居るのである。相應に藝術家であり見様に依つては偉大な藝術家であつたルッソーは、兒童には自然の感情の流露といふものがあるが、大人には技巧ばかりがある。故に大人の作つたものは凡てわざとらしいので、純な藝術などはない。わざとらしい藝術は贅澤を教へる。故に人間は自然美に憧憬すべきである。壯美の如きは宗教心を惹起するから、宗教に入るには自然美からしなければならぬ。彼は技巧の加はつた藝術美を罵倒し、純朴な自然美を重んじたのである。故に美を排斥したのではなく、優美な嗜好を養ふことを必要として居る。教科としての音楽は餘り力説して居らず、特に演劇的音楽は兒童に適しないから、自然の發達階段に應じた歌謡で十分だとして居る。言語を學び、辯論及び思想表現上の美を會得しなければならぬ。特に古代の書に就て學ぶ所がなければならぬ。美的陶冶の手段として演劇の觀照も肝要である。是等は啓蒙時代の思想としては進歩した見解で、藝術教育を説いて居るのは甚だ近代である。特に趣味に依つて種々の形式に於ける美の概念を養成し、夫れと結合して道德的概念をすゝめると言つて居るのは、彼のシルレルの美的教育の源泉と見ることも出来る。また女子の教育上、音楽も舞踏も藝術も教へないと言ふが如き教育は邪道であると言つて居る。自然復歸の思想乃至エミールの教育思想が、近代の教育界全般に及ぼした影響は偉大なものであつて、實にルッソーは現代にも生きて居るのである。

汎愛派のバゼドウ ルッソーの思想を實際的に涉進せしめたバゼドウ（一七二四—一七九〇）は、何處迄も博愛主義で行かうとした汎愛派の代表者で、教育の作用をば、兒童の幸福なる生活、愛國的な生活、公共に益ある生活の爲に盡すべきものとし、學問と技藝、良き地位と豊富なる収入、高尚なる風采などは、教育の主目的を害しない範圍に於て收得せしむべきものであると論じた。併しバゼドウは藝術から兒童を引離したらよからうと言つて居る。何故ならば普通の兒童文藝は語諛や虚偽を教へる機會が少なくないからといふのである。従つて汎愛派では優良な兒童文藝なるものを拵らへて發表したが、それは人生の一斷面を材料とし、兒童の理解力に結合する讀物となし、それに依つて教育的効果を擧げやうとしたのである。即ち汎愛派は、従来の傳説や童話や寓話に教育的價値の尠ないのみならず、特に有害なことを發見し、其の代用物を拵らへようとしたのである。バゼドウは大きな道徳的物語論者であつて、道徳は物語の形か或は繪畫に描現して兒童に授けなければ、彼等の想像力に關聯しないから、精神の奥底に滲入らず又永續的影響がないと言つて居る。彼は文藝の力を借りて道徳的訓練をしようとしたのである。併し彼は談話の詩化及び美化をも説き、又女子教育上慰安としての音楽、舞踏、圖書などの價値を認めて居る。けれども是等の技能に熟達せしむるを目的とす可らず、何となれば其の爲に一層貴重すべき性能の發達を害することがあるからである。バゼドウは藝術教育に對しては餘り正しい考へを有して居なかつたのである。

汎愛派の藝術教育 バゼドウの死後も、多くの汎愛派の教育家は、藝術教育に關して好意を有しなかつた。尤も其の中には兒童の藝術衝動は遊戯衝動と均しく重視しなければならぬと言つて、藝術教育の必要を説

いたものもないではなかつた。汎愛派中、後期に屬するザルツマン（一七四四—一八一二）の如きは、新人文主義の影響を受けて藝術教育に手をつけて居る。併しカンベの如きは、藝術的練習の如きは感情を柔弱にし、神經を過敏ならしめ、若しくは之を弱むるの恐がある。けれども一層重要な事柄の學習を怠らないといふ條件の下に、音楽及び圖書を練習せしめるのはよい。美文學の如きも排斥するのはよくない。併し過度に之に耽らしめるのは有害である。また純粹な道徳上の見解からすれば、少年に全く無害な書は甚だ僅少であるからである。トランプの如きは、一般の汎愛派の教育家が、童話を以て想像を刺戟するが故に危険なりと唱へたのに反し、童話を教育上に活用すべきを論じ、また大に圖書の價値を認め、讀方や書方と同時に授くべきものと見做した。前述のザルツマンの如きは、藝術的教科に就ても大に之を採用して居る。藝術教育は早くから始めなければならぬといひ、而も自然の模倣から眞と美の感情を養ふといつて居るのは、流石に自然派の教育家である。美的判斷力の修練に就ては、藝術と自然とを比較して之をなすべきものと見做して居る。

新人文主義とは何ぞや 一時旺盛であつた啓蒙思潮に對しては、こゝに反動的現象を生じ、十八世紀の後期から十九世紀の初期にかけて、實利的傾向に對してはカントの嚴格なる道徳主義を生じ、主理主義に對しては新人文主義を生じた。即ち唯理論的分子がルッソーに依つて感情的浪漫的分子を加へ、更に夫れが感情中心の新人文主義の運動に變つて往つたのであつて、彼の人文主義が古典語中心であつたのに反し、此は古代文藝に中心を置き、希臘文化の精神を學び、模倣を排して創造創作を旨としたのである。勿論新人文主義も古典語の研究を必要としたけれども、夫れは非常に異なる見地からなされたのである。

獨逸に於て此の運動の最も強く起つたのは、一七七四年パゼドウが汎愛學校を設立して教育の革新を企て、一時大に世間の注目を受けてから、之が對抗策として人文的旗幟を新にしたのに依る。先づゲスネル、エルネスチー、ヴォルフ、ハイネ等は、卒先の主張者として何れも古典を重んじ、古典は凡ゆる思考、凡ゆる感情、凡ゆる創造の核心であつて、眞善美を理想とし、人間の精神を陶冶する上に缺く可らざる貴重材料であるとし、希臘精神と國民的精神とを結合し、以て國民的感情陶冶の資料としたのである。のみならず、古典は單に人間を眞善美の理想にまで造り成す價値の外に、實際的利益をも有して居ると見做した。ニートハンメルは、教育上の見解から汎愛派と新人文派とを對照して、(一)新人文派は眞善美を理想として、人間の精神力を練り、精神全體を教化せんとする。然るに汎愛派では、物質的のものを理想とし、多くの知識を以て精神を満たし、實利的人間を作らんとする。(二)新人文派は古人の高尙なる思想に依り、過去の寶を以て、僅かの學科で人間を教化しようとする。然るに汎愛派では近代の卑近なる事物に依り、無暗に多くの學科で人間を教育しようとする。(三)新人文派は學問を眞面目の事業とし、僅かの事柄を完全に理解せしめ、創造力を練る。然るに汎愛派では學問を一の遊戯と見做し、多くの事柄を淺薄に知らしめ、創造力の陶冶を怠らると。概して面白い對照と思はれる。

新人文主義は、第一美的に希臘に憧憬した所から生れたもので、獨逸の教育に大變化を與へた許りでなく、レッシング、ヘルデル、ゲエテ、シルレルの如き大詩人、シュレエゲル兄弟、フ・ボルト兄弟の如き人文主義者を起たしめ、齊しく人間性を完成せしむる人道的教育を獨逸に高調せしめた許りでなく、英佛にも反響を及ぼしたのである。また新人文主義が人道主義乃至國民文學と結合した結果、古典研究は愛國的熱情の啓發に不可欠のも

ものとせられ、従つて之は治者及び識者階級に愛せられ、益々其の根柢を固くし、愈々貴族的傾向を強むるに至つたのである。

新人文主義と藝術教育

然り乍ら、吾々の考察せんとするものは、新人文主義の運動に伴ふ藝術教育の高調状態である。近代に及んで、藝術と教育との關係を、正しく理解し始めたものは恐らく此の新人文派の人達であらうと思ふ。

元來彼の基督教の理想は、人間性の完成といふ大理想を達し得るものではない。のみならず、其の教化は唯理主義及び自然主義に調和し難い。然るに古代に在つては、宗教の獨斷的勢力を借らないで天稟の才能を啓發し、之に依つて美的人格を育成し得たから、吾人は再び古代を理想としなければならぬ。(一)古代の全的存在は、キンケルマンもいつたやうに、質朴で自然的で靜謐な偉大さを示して居た。のみならず、古代の作家は、確かな感覺と純眞な心とで當時の自然や生活を捕捉し得たから、近代の雜駁、虚飾、動搖常なき生活に處する學生を誘導して、以て一個の眞人間たらしむるには、古代研究は甚だ有効である。(二)古典語の學習は人間の精神教育上有價値である。即ち記憶、理解、判斷の能を強め、獨創力を養ひ、自己の思想感情を母國語で表現するを助成する。(三)古代人は道德的偉大の示範である。基督教勃興以前に於て、既に道德に對して優秀な直觀を有し、其の理想は善美兩面を融和した美的徳性に存したのである。彼等は崇高な人間性を要求し、神の敬虔と人間の愛とを要求し、正しく賢く勇しく根氣強いことを熱望した。故に古代人は善美的理想主義の權化として學生の眼に映すべきである。(四)古代人は眞に調和の世界、美の世界を吾人に示して居る。彼等の全環境と全生活とは藝術その

ものである。學生が之に接觸することに依つて、凡ゆる美を愛し、凡ゆる藝術趣味を豊富ならしめんとする熱望を抱くに至るは當然である。

故に青年は、眞に生命ある人格者たらんとする人間は、古代の文藝を復活し、古代を師として精神を鍛錬し、意志を陶冶し、高雅な美的情操を養つて、純眞なる人間性を完成しなければならぬ。人間性の完成、それが新人文主義の理想であつたので、其の手段としては古代の希臘精神に即するにある。古代に於ける人生の理想といふが如き大本の問題に至れば、羅馬よりも寧ろ是を希臘に學ぶべく、希臘の藝術は建設的能力、趣味の纖巧、思想の深遠雄渾なる點に於て、遙かに羅馬を凌駕して居る。ゲスネルは希臘文藝の價值に就て、古代希臘人の著作を読んで、夫れを理解する者は、即ち偉大な高尚な精神に直觸し得る。其の精神こそは常に美しい思想と強い詞との所有者なのである」と述べて居る。ゲスネルは單に古代文藝を繼承しようとしたのではなくて、其の研究に依つて、正しい思考判斷と嗜好とを養ひ、當時の國民性、思想及び感情の上に利益あらしめようとしたのである。

新人文主義が、ゲスネル、エルネスチー、ハイネ、ヴォルフ、ゲデーケ等の卒先の唱道に依つて、獨逸の識者間に認めらるゝや、藝術と道德との關係、藝術と教育との關係、随つて藝術教育問題が旺んに論議せらるゝに至つた。若きシュレエゲルや、ウィルヘルム・フォン・フンボルトなどは、美と道德との關係を論じ、レッシングヘルデル、ゲエテ、シルレル、ヴォルフ、ジャン・パウワルなどの詩人藝術家は新人文主義の教育説を唱道したのである。尤も藝術家の論議が必ずしも藝術教育的價值がある譯ではないが、併し心の悶えや戦ぎの表現には屢々、

光彩ある教育的見解がある。彼等の教育理想は、人間性の完成、シルレルの言を借れば、「汝自身相當に完成する」にあつた。凡ての肉體力、精神力を出来るだけ完全に、出来るだけ眞の調和に高められた時に、始めて人間性の完成が果され得るといふのであつたのである。

レッシングの思想 人生の根柢には先天的の理性と道德とが備はり、この普遍絶對の理性的道德の實現が、即ち人生最高の目的であり、同時に文化發達の理想であるといふ考へは、當代の理想主義者の共通に把持して居た思想であつたが、レッシング（一七二九—一七八一）も亦斯かる思想を有し、世界歴史の意義を道德的宗教の發達にありと觀じ、また廣義の藝術と文化問題とが最も緊密なる關係を有するといふ注意すべき意見をも提示したのであつた。レッシングの考へに依れば、萬物は神の圓滿なる相から分離した獨立的存在で、謂はゞ各々制限せられた神力であるが、それは各々異なる凡ての段階を追ふて歴史的に發達する。其の發達の最後に來るものは合理的宗教で、種々の宗教は此の最後の極致に達せんが爲に行はれるが、是等の宗教は、神が天啓に依つて人間を教育する永遠の方法である。其の最高階段に至つては、吾人は「徳を行ふこと其れ自身の爲に行ふ」に至らなければならぬ。吾人は漸次に、この完全なる段階に近接しつゝある者で、此の發達の目的なる最高階段はこれ即ち合理的宗教の成就する時期である。於是は今迄の如く種々の教育的方便として、譬喩などを用ひて教ふるを要せず、合理的意義その儘と道德とを直に了解し實現するを得るのである。レッシングは斯様な道德的宗教といふ方面から文化觀を描き、藝術の方面に於ては、ケンケルマンと均しく、藝術は法則に従つて作造せられず人間の内部より生育するものである。神才は正しい歩行を以て正しい道を發見するものとなし、從來の狭い思想

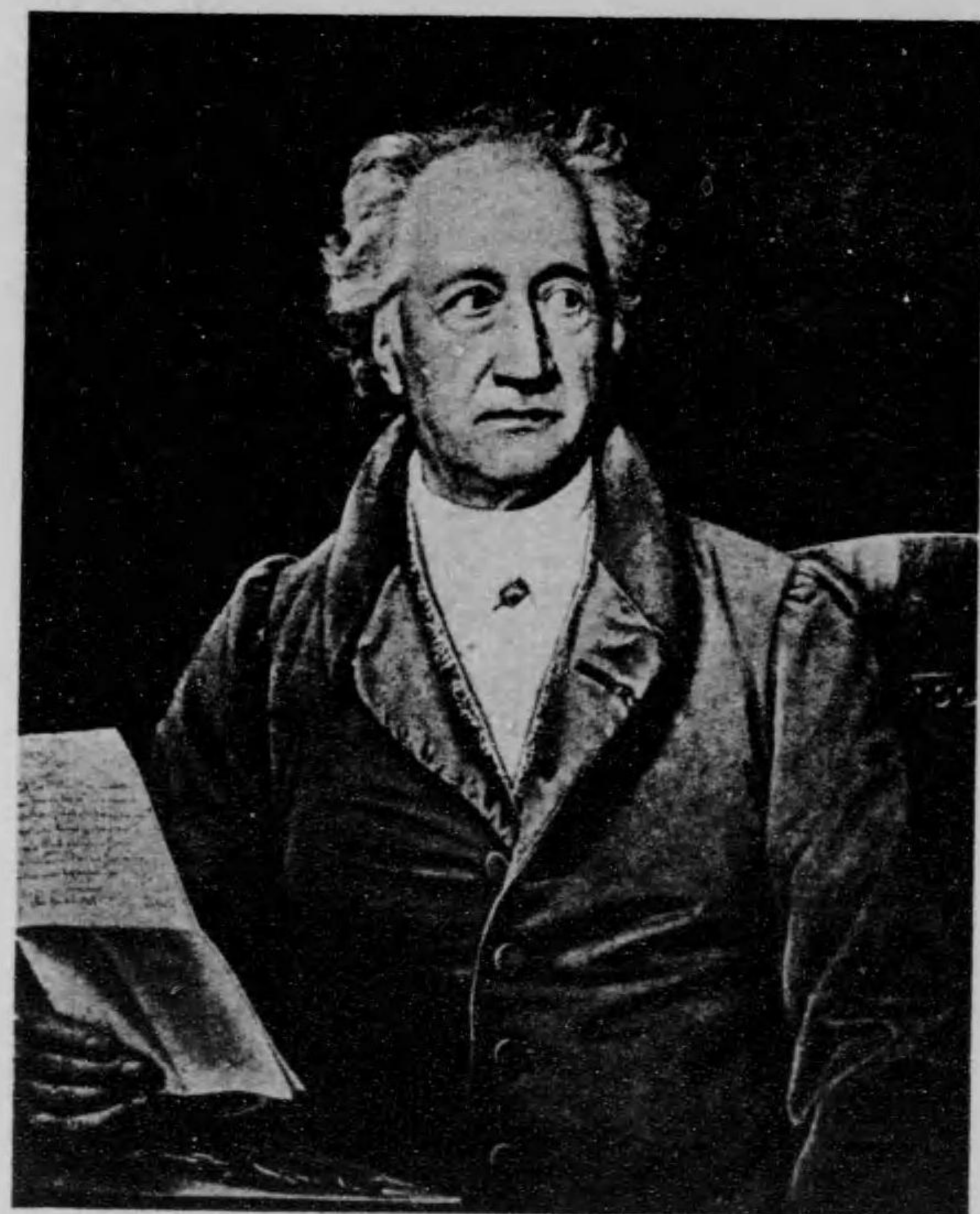
國から脱し、生々とした愛の世界を望みつゝ、「新文學に關する書翰」「ナタレ」、「人類の教育」などに依つて藝術家的見地からの教育意見を發表し、人間性完成の思想を鼓吹した。蓋し彼れの所謂人間性完成とは、前述の如く道徳的、宗教的に段々と完成するの謂であつて、眞理を追求してやまない其の努力と骨折の中に完成がある。其處に人間の價値が存するといふのである。

ヘルデルの思想

ヘルデル（一七四四—一八〇三）は、自らの教育上の新理想を示すのに「人道教育」

なる語を用ひて居る。これ蓋し職業準備の教育に對する名稱であつて、ヘルデルは人間の肉體力、精神力の總てを調和的に發達せしめ、道徳的宗教的性格、眞の人間の理性及び悟性、純粹に人間たるの感情を有するに至らしむるを目的とし、個性の自由發展を尊重したのである。即ち吾々人間は天賦を以て現世に生れ出た。教育はたゞ練習に依つて此の稟賦を發展せしむるに存する。各兒童は求知心を持ち、各器官は活動性を具へて居る。これ自ら修練に向はんとせるものである。故に凡ての精神上の能力と、身體上の能力とを修練するのが教育の眞義である。生活はたゞ知識と思想とのみではない。意志と動向とを必要とするが故に、心情と品性の陶冶が必要である。學校は兒童を營に國家の公民としてのみならず、主に人間として育成する場所である。乃ち人道的陶冶が必要であると叫んで居るのである。

ヘルデルは教育の目的達成の方法として人文教科を重んじ、人文教科は吾人の理解に正當と確實とを與へ、道徳に原則を與ふるのみならず、同時に記憶に知識の貯蓄を與へるといつた。殊に希臘人及び羅馬人を以て、人類の心育の基礎と建設したものとなし、精確好良にして且つ練熟せる嗜好及び言語使用上の最美の技能に於て永遠



GOETHE

の模範である。彼等の文獻は美に關する科學の眞の源泉である。故に吾人の考察及び言語上の方法は、この模範に従つて形成せしめらるゝを要する。就中希臘語——單に模倣することを非とした——を尊重する理由としては、其の能く人間性を理解せしめ、人道の何たるかを體驗せしめるからであるとし、希臘藝術は、人間の理想をば、種々なる表現に於て、純粹な形で顯示するから、觀照者の心を満たす爲に尊いものであると論じた。斯くてヘルデルは希臘教化を人道教育の核心とし、依之、人間の理想を觀せしむるを高等の學校の務めとする傾向を開いた。併しヘルデルは眞の文化、殊に詩文を國民靈智の特産物と見做したから、國語教授に盡力し、國語教授は羅典語教授に先立つものと見做し、他の一般教授に於ても國語を重視し、最良藝術家の文學的作物に接せしめ、夫れに對する理會と感情とを養ひ、十分に夫れを味識せしめたのである。要するにヘルデルの人道的教育は、即ち藝術的人道教育であつたと見ることが可能である。彼は藝術の力に依つて、吾々の不可思議な、生々とした衝動力を、何處迄も伸長して行く中に、吾々の自然と理性とが發達し、現實と理想とが調和して來る。斯くて始めて人間化が行はれる。人間化が行はれることは即ち人間性發達の極致であると言つた。

ゲエテの思想　ゲエテ（一七四九—一八三二）が種々なる藝術的傑作を發表して、新人文主義の運動に参加し、其等の作物に依つて多くの人間を啓蒙せしめ、解脱せしめた事はいふ迄もないが、其の性格がまた當代の人間を非常に動かしたのである。ゲエテ位物事の分つた、精神の確實な、理想的な人間はなかつた。其の感情の方面から言へば、悲みが心に泌み渡つて居る様であり、又「ファウスト」中に描現された様な、人間學の蘊奥を極め盡した人格が、如何程當代人を感動せしめたかは測り知れない。彼は實に人間らしき人間中の最も偉大な者で

ある。ゲエテの心靈は其の周邊に有る凡ての人間を化成した。彼は如何なる方面より見るも完全な人間である。彼は藝術家としてよりも、人間として敬愛せらるゝことが更に深い」とは、彼れの親友シルレルの評語であつたのである。

ゲエテの教育思想は、彼れの教育小説「ウィルヘルム・マイスター」などに就て、其の要點を把握することができる。自然は人間の爲に永遠に必要な凡てのものを與へて居る。人間の生命の奥底には眞理を求めて歇まない強い衝動力が潜在して居る。これが人間性を伸長せしめるのである。故に教育は此の本源の動力の基底に樹つて、兒童の混沌たる精神状態を整調陶冶し、以て圓滿なる發達をなさしめなければならぬ。即ち理性、構想、悟性、感情の圓滿なる調和を要求して居る。殊に兒童期に感得した印象は最も具體的であつて、其の人の生涯に多大なる影響を及ぼすから、可成兒童の爲に善美な環境を擇ぶことが肝要である。爲之には古典の研究に依つて、心を優秀な古代人の環境に接せしめ、古代の大家の醇朴清淨な感情に依つて、直接に世界を洞觀せしめ、宇宙の大生命に觸れしめようとしたのみならず、「神の支配は愛の支配である」といふ彼れの宗教觀は、人格陶冶を主とする彼の倫理觀と融合し、神には無限の尊敬を拂ふべしと説かしむるに至つた。ゲエテの藝術教育論もこの思想に基づいて居る。彼は美的根本感情の養成を重視して居るが、美的根本感情とは即ち敬虔の心持を體得して居ることに外ならない。「ウィルヘルム・マイスター」の「教育州」は、彼れの藝術教育論の眞の現はれであるといつてよい。即ち天地の間に介在せる現世は、意慾煩惱にからめられた善いもの醜いものゝ混在である。故に生死、貧富、貴賤、毀譽、嘲笑、汚穢、悲慘、煩悶、罪障などに満ちて居る。併し其等に対して寛大な心持になり、罪人も許し

てやるといふ様な心持にならねばならない。一切のものを神々しきものと認め、一切のものを愛する迄にならねばならない。これが敬虔の心持といふものである。天に對する敬虔は神に對する敬虔であり、地に對する敬虔は人類に對する敬虔である。この神と人とに對する敬虔を綜合して、眞に自己に對する敬虔になさなければならぬ。其の時に、自己は單なる自己に非ずして、小我と大我との相互に滲透した境地に達し、外的生活と内的生活とが調和された自己になるのである。藝術美と自然美とを備へた夢の國、即ち「教育州」で斯かる敬虔的教育を實現し、以て美的根本感情を養ふといふのがゲエテの理想で、それが即ち人間性の完成であると見る。

希臘主義、新人文主義のゲエテにして、藝術教育を説くは固より其の所である。彼が冷かな理知を脱し、暖かな豊かな人格の教養を目指したのは最も注意すべきである。感覺は認識界では一種の素材であらう。併し美及び藝術界では素材として終るものではない。夫れは一の目的の世界である。即ち形状や色彩等の感覺的のものと、意味とが融合一體となり、藝術品として創造具現さるゝ時は、其の形状や色彩等は最早素材でなく、美としての目的の世界である。そこに感覺と理性、自然と理性とが抱合融和するのである。自然と理性とは何時も對抗するものではない。併し又自然即ち理性でもない。自然はまた單に出發點としての價值のみを有するのみでもない。純粹なる自然、醇化されたる自然を抱擁する理性こそ、眞に理性の全體的統一的態度を發揮せる理性であり、其の理性と融和し得る純なる自然こそ發展的の自然である。枯瘠冷淡な人格を退け、豊富な想像や、暖かな感情の活躍せる内容を有する人格の教育、人間性の完成を暗示した大詩人ゲエテの理想は、永遠に敬虔と愛とを以て後人に歡迎せらるゝであらうと思ふ。

ファウスト及び教育州の藝術教育

吾人はゲエテが不朽の傑作「ファウスト」を以て、藝術教育の最高教材として、人間の前に提供することを憚らないのであるが、本書の中にも藝術教育の根本思想が現はれて居る。即ち主人公ファウストは、最初熾烈な知識慾に驅られて煩悶し、人間の腑甲斐なさを嘆息し、絶望の極、遂に毒を仰いで死なうとまで思ひ詰めたが、其處を悪魔のメフィストから色情を以て誘はれ、グレーチ・エンといふ清淨無垢な處女を手に入れることになつたのである。ファウストは此の處女を相手にして、一時餘念なく戀の歡樂に耽つて居たが、痴蝶の花に酔ふた陽春驕蕩の趣は、狂風一陣、忽ち滿目蕭條たる悲劇と化し去つたのである。即ち彼れの戀人たる可憐なグレーチ・エンは、哀れや悪魔メフィストの瓜牙にかゝつて親殺、兄殺、子殺の大罪を犯し、遂に發狂して獄舎の内で無残の最後を遂げることになつた。其處でファウストが肉慾の満足から購ひ得たものは、結局斷腸後悔の思ひに過ぎなかつたのである。次にファウストは悪魔から政治的方面に誘惑された。併し權謀術數が行はれ、辯佞利口の徒輩が跋扈し、名利虛榮を追求する政治家的境涯は、到底ファウストの久遠の地ではない。其處で彼は意を決して愈々現世を脱した希臘美人ヘレナを求めて止まぬのである。所が現世に居ない此の希臘美人を手に入れしむることは、最早惡魔メフィストの力に及ばぬ所である。即ち惡魔は官能の世界肉慾の世界に於てのみ其の敏腕を逞しうることが出来る。けれども美の世界に立入ることは出来ないのである。故に希臘美人ヘレナを迎ふることはファウストの獨力に俟たねばならない。然るに彼は皇帝の御蔭で一旦此の希臘美人を迎へたが、其の美貌に心を奪はれて之を抱擁しようとした爲に、美しいヘレナの姿は煙の様に消失した。之はファウストの心に未だ利己心や自我の慾が失せなかつたからである。作者ゲエテは美的觀照の心理を

「ファウスト」に能く描寫して居る。美は此の利己の觀念や自我の慾念を去り、所謂没我の態度、無關心の境地に達しなければ味識することが出来ない。藝術品を觀て之は自分の氣に入つたから手に入れて床飾りにしたいとか、裸體美人を觀て肉慾感を起す様な程度では、未だ純然たる藝術的享樂や自然美觀照の境涯を去ること遠しである。ファウストは官能の快樂や肉慾の満足で大變苦しい經驗を嘗めて來たけれども、未だ藝術的陶冶を受けないから、美の理想に達する資格がない。併しファウストが美の理想を要求する念は高調する許りである。其處で彼は再び美の理想たるヘレナを追求する道中にさし懸かる。作者ゲエテは、其の道中に、希臘藝術の發展を最も簡潔に最も鮮明に、詩的象徴的に描現して居る。ファウストは其の道中に於て藝術的陶冶を受け、道德的洗練や美的醇化を受けるのである。藝術的陶冶を受けて美の理想を把持し、以て利己心や自我の慾念を一掃し、美的根本感情を養つて品性を高め、遂に完全圓滿なる人間性に達したファウストは、自分獨り同衯具足の人間になり、其の儘退いて己れ一身を深くする丈では、決して人間の本分を完うしたものとは思はれぬ。更に進んで人類の福利を増す進る事業を起し、藝術に依つて人間を救済しなければならぬ。即ちファウストは是から利他博愛の事業に着手するのである。ゲエテは實に「ファウスト」の中で、藝術教育の最高理想、最高價值及び實際を暗示して居るものと思はれる。

ゲエテは其の「ファウスト」の主人公に於て、最初世間の種々様々な苦驗を嘗めさせ、遂に深い自覺に達せしめ、其の迷を脱して眞人間たらしめたやうに「ウィルヘルム・マイスター」の主人公ウィルヘルムをして、青年時代に種々様々の經驗をさせ、遂に自分の子供を眞面目に教育する様に自覺させたのである。今其の一端を述

ぶれば、(一)ウィルヘルムは、當代の演劇に改良を加へたいといふ文藝熱に燃えて、両親の忠告をも聞き入れず、芝居道樂に耽つた揚句、女優との關係が出来て子供まで生れる。彼も是非一度は自分で芝居をやつて、之を改良して見たいと熱望し、愈々夫れを實現したが結局失敗に終つた。併し此の間、ウィルヘルムは當代の新思想の藝術家や色々の新しい空氣の家庭などにも出入して、十分に各方面に新しい氣分を経験する。而して遂には大自覺を起し、自分の子供フェリックスには、自分が通過した様な道を通させまいと思ひ、色々教育上の工夫を凝らすのである。ゲエテは此の教育小説の第一巻教訓の巻に於て、個人の慾望を自由に満足せしめ、個人の激情を趣くが儘に趣かしめ、深い底力のある修養でなしに、浮氣な享樂に傾いて居る新しい青年の生活を描いて居る。

(二)自分の子供の教育に關し、色々工夫を凝したウィルヘルムは、遂に子供を伴れて遍歴するのである。アルプス山谷の古寺を訪れては、世俗の塵を離れた世界に、眞面目に手細工をなし、勤勞を尊んで居る人達の生活を子供に見せ、我が青年時代の芝居道樂と全然違つた精神方面を體驗せしめようとして居る。又社會人道の爲に努力して居る親戚の家を訪れては、其の子供のフェリックスに對して、修養のない浮氣な我が青年時代のやうな耽美家は人生の苦闘壓迫に堪え忍ぶ力がなく、遂に自滅に陥るけれども、奮闘的努力に依つて能く社會人道に貢獻する者は自分も永く幸福を受け、而も立派な人格者であることを教へ込めようとして居る。ウィルヘルムは又其の甥を訪れる。此の人は曾て多少婦人との關係もあつたけれども、今は眞面目な生活に歸り、凡ての生活、凡ての仕事、凡ての藝術の前に、先づ手細工が必要であると言つて、勤勞の徳を重視して居る。一事を正しく知り、徹底的に之を練習することは、萬事を断片的に半ば知るよりも貴いといふ考へを有して居る。ゲエテは第二巻の遍歴

の巻では、眞摯な宗教心の上に立つて節制と勤勞の大切なるを説いて居る。殊に手工は散漫なる材料を集合構成して相當の形になすものであるから、自由放縱な性質のものではなく、一定の規矩準繩に依らねばならぬ性質のものである。ゲエテの考へでは、將來の社會乃至個人生活は、斯種の意味に於て節制生活、勤勞生活でなければ其の發達と幸福を得ることは覺えないといふのである。(三)ウィルヘルムは最後に瑞西邊とも思はれるが、所謂「教育州」とも呼ぶべき場所に我が子を伴れ込むのである。教育州には少し許りの指導者と數多の兒童とが生活して居る。廣々とした畑があり野原があり丘陵があり山岳があり、其の上には更に清澄な湖水もある。何處からともなしに音楽が響いて來てダンスの氣勢がする。其の夢の様な空氣の中に、兒童は遊び戯れ、或は作業に従ひ。或は靜かに天を仰ぎ、或は大地を望み、或は眞つ正面に向つて、それらに敬意を表して居る。又教育州には八角形の大講堂があつて、色々な繪畫で裝飾されて居る。即ち周圍には三筋の廊下が出来て、三種の敬虔的感情養成法として夫々の繪畫がある。第一には、猶太的又は異教的な敬虔の情を養はんが爲に、イスラエルの聖史や古代の希臘譚を表現した繪畫を置いてある。之に依つて自分より上のものに對する敬虔の情を養ふ。第二には哲學的敬虔の情を養はんが爲に、基督の奇蹟、基督の生活などを描現した繪畫を置いてある。之に依つて自己と同等の者に對する敬虔の情を養ふ。第三には、基督教的な敬虔の情を養はんが爲に、基督の死に關する繪畫を置いてある。之に依つて自分の下にある不幸な者に對する情を養ふ。兒童は朝夕是等の繪畫を直觀し、自然に此の種の敬虔的感情を養ふ様に工夫されて居る。ゲエテは斯様に藝術力に依つて敬虔の情、即ち美的根本感情を養成しようとした。音楽は生々とした自動的性質のもので、美的享樂、簡易教訓に印象強く役立つ外、信仰、懺悔、道徳上

の告白も此の中に述べ得るから、音楽は陶冶の第一段となすべく、従つて教育州には器樂區があり、谷と森と河との間で器樂が奏せられる。詩作も舞踊も工作も行はれ、一切の技能が養はれる。其の他色々な花の咲満ちて居る庭園に臨んだ展覽室もあるといふ風に、自然美と藝術美との渾然融和した教育州で、最後に美の洗禮を受くることに依つて、敬虔的な美的人格にまで完成せしめる。世界的宇宙的であつた詩聖ゲエテは、實に斯様な観想を抱いて居たのである。

藝術的文化とシルレル

シルレル(一七五九——一八〇五)は、ゲエテの親友であつたが、併し或點で

はゲエテよりも愛、情熱、憧憬の念が強く、其の藝術も力強い含蓄の深いものであつた。のみならず、健康優れず且つ貧乏と闘はねばならなかつた其の生活は、非常に苦しいものであつた。併し其の非常な煩悶苦惱を脱して、自由な人に訓練して來たシルレルの人格は、當代人を動かすに足る丈の感化力の所有者であつた事を證明する。ゲエテは彼を激賞し、「シルレルの心の奥底には絶對、普遍、人類愛が存在して居る。彼れの内界には揺り盡せない深遠な生命の泉が流動して居る」といつた。ゲエテより少し遅れて出現したシルレルは、藝術家が立たなければ新人文主義は徹底しない。人間の威嚴を高めるのも低めるのも藝術家の腕一つにある。藝術家は立つて人間を教育しなければならぬといふのであつた。

直接カントの文化觀を繼承した至純な理想主義者シルレルは、通常獨逸内に限られた理想家の様に誤解せられて居るが、併し彼れの思想には寧ろ世界主義的精神が流れて居た。廣大無邊な世界主義の精神は理想主義の木領であつて、實にシルレルは今日から見ても、吾人の驚嘆すべき程廣大なヒウマニズムを、最も徹底的に標榜して

居たのである。のみならず、當代の理想主義は、一面から見ればシルレルに依つて最も完全に、最も鮮明に具現されたものと見ることが出来る。人生の根柢には先天的の理性と道徳とが備はり、この普遍絶對の理性的道徳の實現が、即ち人生最高の目的であり、同時に文化發達の理想であるとは、當代理想主義者の普遍の思想で、彼等はまた廣義の藝術と文化とが最密な關係を有するといふ注意すべき考へを有して居た。斯種の文化觀は、世界歴史の意義を道徳的宗教の發達と見たレ、シンダヤ、人性の圓滿なる發達を人類歴史の本義と觀じたヘルデルや、或は純粹理性批判のカントや、其他近代文化主義の建設者達に共通な思想現象で、此の點に於て、絶對普遍の道徳的意志の自由實現を永遠の理想と見たシルレルの文化觀は、必ずしも創見とは謂はれない。けれども他の理想主義者が、文化發達の概念を唯理的形式的に觀じたのに反して、シルレルは歴史的具體的に明示した點に於て、確かに彼れ獨得の天才を示して居る。又藝術と文化問題とを結合したのも、敢て藝術家としてのシルレルに始まつた譯ではなく、既に彼れに先立つ理想主義的思潮に啓示されて居たので、實に此の熱烈な藝術的氣運は、當代理想主義の生命と見らるべき根本精神であつた。即ちケンケルマンの藝術主義の如きは、汎く當代理想主義の基調を構成し、彼れの紹介せる希臘藝術の如きは當代人の思想を汎く深く動かしたといはれて居る。

斯様に藝術と文化との相關問題は、汎くシルレル以前の理想主義者の深い注意を惹いて居たが、シルレルの藝術的文化教育論は、實に斯かる濃厚な文化空氣から發生したのである。現代の文化主義は、十九世紀の理想主義に由つて醸成せられ、十九世紀の文化思想はシルレルに依つて圓熟されたものゝ繼承と見てよい。全文化と藝術との關係、これがシルレルの思想の核心問題であると同時に、又理想主義思潮の焦點であつて、彼は此の核心

問題の把持に學生の努力を拂ふを厭はなかつた。實にシルレルは十八世世の理想主義の生んだ最大の藝術教育家、即ち藝術の力を借つて一般文化の發達を圖らうとした最大の思想家であつた。そして此の問題は、藝術家であつたシルレルに依つて最も徹底的に、最も根本的に解明されたのである。

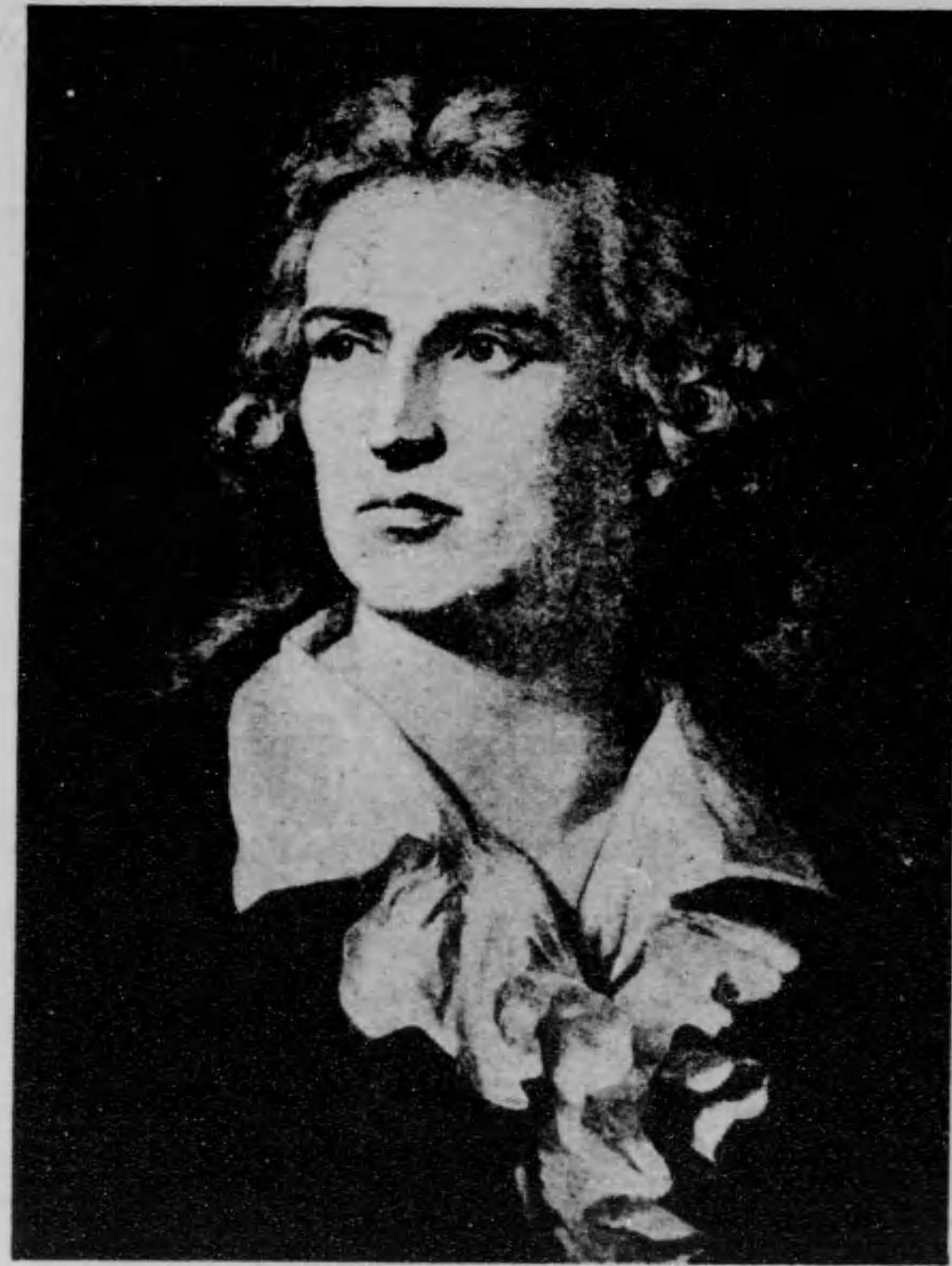
シルレルの教育思想は、前述の如く希臘思想を始め、レッシング、ヘルデル殊にカントの理想主義から發達したものである。カントが唯理學派と經驗學派との二潮流を融合し、此より脱して新しき批判哲學を樹立したことは論ずるを要しないが、彼れの哲學體系に於ては、感性の範圍に屬する自然界と、理性の範圍に屬する道德界とは全然別位の世界をなして、其の間に融和關係が認められなく思はれる。故に此の困難救濟法として、彼は兩者の中間に判斷力 (Urtheilskraft) の境涯を置き、此境涯に、客觀的目的にかなへる目的上の判斷と、主觀的目的にかなへる觀美上の判斷とを包含せしめた。斯様に判斷力に依つて一事物の目的に合した事を知覺する場合に快感が伴ふ。カントの心理説では、快不快の感情は知識力と意志力との中間に立つものであるが、斯様に彼れの哲學體系から言へば、判斷力は感性と理性との中間に位するものである。然るにシルレルは、カントの審美説より出發し、美學史上記憶すべき貢獻をなしたのである。カントは感性と理性とを相對せしめ、感性を以て理性の隸屬と見たが、シルレルは此の點を改造し、人生の此の兩方面を對等のものとなし、其の相互に調和したものを美心 (ästhetische Gemüths) といひ、之を以て人間最高の理想と見做したのである。カントに依れば、美は感性と理性との調和の標識であり、現實なる客觀的調和ではなくして、たゞ觀美的狀態に於て、主觀の見様に其の調和の存するのみである。然るにシルレルの見解では、美に於ける調和其の物は現實的客觀的なものである。即ち觀美的活動は、吾人に取つて最高の

活動であつて、此の活動は或他のものゝ標識ではない。此の兩者の調和になれるものは、主觀に於ては美的人間をなし、客觀に於ては美的創作をなすのである。美的人間を作るのは即ち藝術教育であつて、人類歴史の進歩は、この藝術教育を進めて、吾人の氣品を高うすべきものであると。彼は永遠に發達すべき文化の姿を見詰め、此の文化發達の過程乃至要素として、廣く美的藝術的活動が如何なる本質的意義を有するかを明瞭にしようとした。シルレルの中心思想は極明瞭である。即ち全體文化の出發點は藝術であり、藝術の發達に依つて文化が圓熟完成されるものと見る。これがシルレルの文化的藝術觀、藝術的文化觀の根本問題であつたのである。

シルレルの見解では、未だ人間が純粹の感性乃至原始生活を持續して居た間は、其處に何等かの形の文化が有つたと思はれないが、吾々の文化の初源は、先づ此の原始的な、純粹な感性狀態からの解脱を意味するもので、藝術は感性の儘に、而も感性から離脱して事物を觀照することであるから、人類をして、最初の感性狀態から解脱させるものは藝術である。文化の曙光は藝術にある。藝術的活動は未開狀態に文化の光を放たしめ、束縛と感性に沈淪する人間を高く解放すると同時に、高遠峻嚴なる理性と道德とに人間味を賦與せしめる。藝術は人間を自己活動に導き、「汝自身を相當に完成せしめ」人間の性情を文化的に鍛鍊し活動させる力を有して居る。何となれば、藝術は人間の感情をば純感性的でなく、恰も自然に理性的道德的に活動させるからである。勿論藝術は道德化を理想とせるものではないが、併し其の内容は理性であり道德であるから、自ら感情を理性化し道德化する力を有して居る。藝術の教育力はこゝにある。理性や道德が如何に高貴であつても、直接に人間の感情を動かし得ぬ限り、人間性の文化的發展に効果がない。人間の情性に根ざさない理性化や道德化は實際何程の効力をも有し

ない。然るに藝術は、恰も夫れとは目指さないで、自ら人間の性情を理性的道徳的に活動させるから、不知不識の間に人間生活を理性や道徳へ協調せしめる力を有する。畢竟藝術は人間性を淨化し文化する妙樂體である。斯様に論じて考へると、シルレルの所謂理性や道徳といふ詞は、現代の吾人の耳に異様に響くが、併し吾人は其處に一步を進めて考察する必要がある。シルレルの所謂理性や道徳は、之を人生の實相とか、人間生活の本然性とかに解釋することが出来る。故にシルレルは、藝術が生きた儘に具體的に人生の眞相や本然性を教へ、藝術に依つてのみ具體的に人間生活の普遍相を會得することが出来ると主張して居る。随つてこゝにも文化發達に貢獻する藝術力を承認しなければならない。以上觀じ來つたシルレルの藝術觀は、假令カントの思想を一層具體的に、徹底させたものであると見ても、而もシルレルの藝術的直觀の眼には、カント以上の理想的な文化的天地が開けて居たのである。實際カント一流の嚴格な道徳境と、シルレルの暖かな藝術的な靈肉融和の圓滿美妙な理想境とは、文化價值に於て到底比較されない程のコントラストの様に思はれるのである。

シルレルの藝術教育論其の一　シルレルの藝術教育論の紹介に關しては、日本に於ては幾多の學者や藝術家に依つて爲されたが、就中西晋一郎氏の紹介を白眉とする。シルレルの藝術教育論は、名は藝術教育論であるけれども、見様に依つては教育本質論となるのである。シルレルの所論に依れば、人間を教育するには人間性を知らねばならないが、美の性質を知ること、之が人間性を知る所以である。一體、自然的本能と理性とは融和せねばならない。彼の統一を得んが爲めに多様を削らねばならぬ様な國法や、道徳的性格を作らんが爲に自然的性格を犠牲に供する様な教育は、共に不完全の譏を免かれない。併し人間は動もすれば偏するものである。彼



SCHILLER

の事務家は往々其の心が狹隘になることがあるが、夫は其の想像力がたゞ己れの職務圈内にのみ動いて、其の外に感想を擴張することをしないからである。又分析力の過重は人間の想像と感情とを枯らし、生の豊富を減退せしめる。故に抽象的思索に耽る人間が往々冷淡に流るゝのは、これ全く一全體として始めて能く心を動かし得べき印象をば、一全體として把持せず、それを個々に分析し解剖し去るからである。力を一方に偏重して練ることは個人に取つては誤りである。けれどもそれが人類全體に取つては眞理に導くことがある。即ち全精神力を一點に集中することに依つて、例へばカントの純理批判の如き業は成就する。併し其の爲に他の能力の萎縮を來たすことは有り得る。けれども斯様な個人力が集合することに依つて人類は全體として眞理に達する。體操に依つて吾人の身體は強壯となり、全身の自由游動に依つて身體は美的になる。斯様に特殊の精神力を緊張せしむれば異常の人間を作り、滿遍的に修養せしむれば完全なる人間を作る。

凡そ人間界に於て鄙陋と見做すべきものに二つの方面がある。其の一は「野蠻」であり、他の一は「文弱」である。野蠻とは其の感情が其の法則に勝つもので、文弱とは其の法則が其の感情に勝つものである。野蠻は教化を輕んじて自然を縦にし、文弱は自然を蔑にし、不自然に陥らしめ、野蠻よりも尙ほ賤しむべき奴隸状態に陥る。眞正なる教化とは、自然を友とし、自然の自由を尊重し、自然の放縱に克つる謂である。併し自然人が尙ほ其の自然を縦にして無法である際には、決してそれに自由を示してはならない。人爲人が尙ほ自由を用ひ得ない場合には、決してそれに放縱を禁じてはならない。自然力の横溢せる團體に對して、自由の法則を授けるのは之を誤るものであり、又物的に狹隘な且つ既に弱い個人に對して、統一の法則を授けるのは壓制であつて自然性と個性とを損

傷せしめる。而して此の野蠻と文弱とは、應て現代の誤りを形作れる二方面であるが、藝術こそは此兩弊を救済すべき職能を有して居る。何となれば、趣味が成就すれば智は明に、情は強く、行は高尚になるからである。反之、趣味が成就しなければ智は鈍く、情は弱く、行は賤しくなる。これ古今の事實に徴して明かである。併し乍ら反藝術論者は言ふ、「文弱の弊は藝術から来る。情慾は詩人の描寫に依つて其の口實を得て法と義とに反對する。社交の美しくなるのは無益である。假令外觀の美があつても内實の價値がなければ尊ぶに足らない」と。然り、この批難は妥當である。誰人も知る如く、近代に於ても獨立を失ふに伴れて益々文華になる國がある。併し斯種の文華が果して眞に美であり、又眞の藝術であらうか。之を明瞭にするには、美が人間存在の必然的制約なることを指示せねばならないが、之は段々と論を進め、人間性を明かにするに伴れて氷解せられる。

今や吾々は武裝せねばならない。賢ならんが爲には怠惰に克ち、怯懦に克ち、感官の甘き誘惑を斥け、辛らき思惟の業に趣かねばならない。然るに生活難に疲れた世人は誤謬と争ふ勇氣がない。故に國家の指示に盲従し、教會の教示に暗従し、或は感情の高調するが儘、想像の馳騁するが儘、たゞ朦朧の影を認めて眞理の光を恐避する。吾人は此の情勢を如何にすべきであるか。これ正に吾人の議論の出發點である。故に吾人は曰ふ。たゞ藝術のみが此の情勢を救ふべきであると。眞理が未だ人間の心に届かぬ先に詩は早其の光を放ち初める。思ふに人生は代々に推移したけれども、希臘羅馬の藝術は此の間に處して能く人を教へたのである。彼の羅馬人は一世紀に於て既に帝權に屈從したが、併し藝術家の作造した諸々の像、諸々の碑は昔ながらの姿に立つて居る。宗教心は頽廢に近づいたけれども、而も藝術家の手になつた神殿はやはり人目に神聖に映じた。崇高なる建築物の形はネ

ロ、コンモオツスの醜行爲を恥ぢしめた。人間は墮落の淵に沈淪したけれども、藝術は石に留つて永遠に人間を救済した。これが藝術の力である。併し斯く有らんが爲には、藝術家は時人の甘心を買ふたり、或は一時的流行を無限のものゝ様に思ふ空想を止めて、眞正必然の理想に順はねばならない。藝術家自身は時人の罪惡に染まらず、而も時人の被る罪を諸共に甘受し、時人が被れる桎梏の下に甘んじて自ら屈すべきである。そして時人の汲々として追求する幸福を輕んじ斥くる程の勇氣と、彼等の苦惱を共に分つは怯懦の爲でないといふ意氣とを示すべきである。時人を教へんとする時は時人の心情を察し、時人と交る時は彼等の「有るが儘の姿」に接すべきである。其の時彼等は藝術家の主義の嚴肅なるが爲に藝術家を避けるであらうが、而も遊戯としては藝術を忍容するであらう。何となれば彼等の趣味は彼等の心よりも純潔であるからである。此の際藝術家の力めて捉ふべきものは、此の臆病な藝術逃避者である。併し之を捉へるが爲に、彼等の行を責めたり藝術主義を論破して見せたりするのは無益である。一層肝要なことは、彼等の閑散な遊樂心に着眼し、其の遊樂から放縱、輕浮、野鄙を遠ざけてやり、進んで彼れの心根から是等の醜性を除去する工夫を凝さねばならぬ。彼等に接する毎に高尚な、雄偉な、精美な形を示せ、斯くすることに依つて形象は遂に現實に克ち、藝術は遂に自然に克つに至るであらう。

シルレルの藝術教育論其の二

然らば人間とは何であるか、吾人は人間性を明瞭にせねばならぬ。人間性の裡には、變ずるものと變じないものとが相對的に存在して居る。人格は不變——此の不變なるものは變ずるものから成らずして絶對的に自己に本づく存在即ち自由を基とする——であるが、其の狀態は變化する。今此の人格を、(一)感性的質料から離れて見れば、單に無際限なる發現の素質に過ぎない。感覺がなければ形式のみ

である。空虚の力である。(二)感性的の方面から見れば、其の形式に質料を與ふるのみである。若し人間が單に感じ、單に欲するのみならば、自然同様、之只形式無き時間的内容に過ぎない。併し人間は感性的理性的實在である。故に人間は絶對的現實に赴くと同時に絶對的形式に赴くべきである。換言すれば、總べて内なるものを發現し、總べて外なるものを成形すべきである。この完きものが神そのものである。斯くて人間には感性的衝動と形式的衝動とがあるのである。

然らば感性的衝動(*egoistic*)とは何であるか、例へばオルガンに一番を發せしむれば、他の凡ての音が排外せられる様に、人間が現在を感じて居る瞬間には、其の無限の可能性は全く排外せられて、人間は極度の被制限的存在状態を呈する。即ち吾人が或音響の感覺に熱中する時は自失忘我の状態に陥るのである。再び思慮に復歸するとき己れに返るといふ。吾人の精神は無限に飛躍せんとするけれども、感性的は之を引留めて、吾人をして一事の認識、一行爲の目的に往せしめようとする。然らば形式的衝動(*Formal*)とは何であるか、之は理性から迸出する絶對性であるから、己の内なる一切の變化に調和を與へて一個の人格たらしめんとする。故に現實に要求する所ものは永遠に適ひ、永久的なるものは現實に適せねばならぬとし、時間を超越する。世界と人間とを結合する感性的衝動は、なるべく多くの變化と多方面への擴張とを欲し、變化に抗する人格の力は、成べく獨立を維持し強からんことを欲する。感受性は多方面に益々多くの世界を享受して素質を十分に發展するがよい。人格の力は益々深く強くして理性の自由を失はず、益々多くの世界を消化するがよい。形式の力乏しくして感性的に富むのと、理性の力強くして感受性に乏しいのとは、其の何れに偏するも非である。而して自己の時間的存在の感受

と、自己の自由の意識とは、通常或は交迭し、或は一方のみに偏して經驗するのであるが、若しこの兩者を同時に經驗することがあるならば、この時始めて人は自己の裡に人間性を觀ることが出来る。而して彼をして斯様に觀せしめた對象をば無限性の發現と見るのである。前にもいつた様に感性的衝動は變化を求め、形式的衝動は不變を求める。この兩衝動の結合は、生々變化を不變常住と兩立せしめんとする。之は右兩者に對しては全然新なる一衝動であつて、ここに之を遊戯衝動 (*Spieletrieb*) と命名しておく。いま感性的衝動は物的に吾人を餘儀なくし、形式的衝動は道德的に吾人に迫る。例へば吾これを卑しとする人を、而も情慾の方で求むるとき、そこに物的壓迫を感じる。又吾これを敬視し或は嫌ふ人を、而も尊敬せざる可らざるを覺ゆるとき、そこに道德的壓迫を感じる。いま若し此の人が吾の欲にも投じ、吾の尊敬にも値せば如何。吾は即ちこれを愛するのである。感性的の壓迫も理性の壓迫も去つて自由が出現する。何となれば、物的にも道德的にも餘儀なくせしめられるとき、偶然といふこと、任意といふことが無くなる。従つて又餘儀なくせしめられるといふことも失せる。即ち自由となるのである。

形式的衝動の對象は形であり、感性的衝動の對象は生である。只の形には生が無く、只の生には形が無い。生きた形、これ即ち遊戯衝動の對象である。即ちこれ美である。例へば故意に整へた容儀は只の形であつて生氣がない。活き／＼として而も禮容おのづから整ふのが美である。形そのものが生きて居る。知でいへば感性的衝動は現實を、形式的衝動は必然を把握する。行でいへば感性的衝動は生の保存を、形式的衝動は品位の保存を求めらる。兩者合一するとき、知にあつては事物の現實を見ると同時に、其が必然の法則を伴ふことを見るが故に、現

實が自由なるもの靜かなるものとなり、又他の一面では抽象に直観が伴ふが故に、抽象も心を緊張せしめない。行にあつては、生も品位を伴ふとき無着となり、義務も好みとなるから束縛を覺えない。十全なる意味に於て「人」なるとき彼は遊戯する。彼は彼れの遊戯する時にのみ「全人」である。これは吾人が藝術及び生活術に適用することに依つて其の然るを見るのである。彼の希臘人は既に之を藝術と感情の裡に實現したのである。彼等は之をオリンプスの雲の上に移して描き、この眞理を師として生滅すべき人間の像を刻んだのである。眞摯なる勤勞、浮薄なる快樂、是等は何れも幸福なる神の容驗から一掃し去られ、永遠に満足せる神々は、凡ゆる目的、凡ゆる義務、凡ゆる配慮を超出して悠々自適の境に遊んだ。之最も高尚な最も自由なる境涯である。自然法の壓迫も、道徳法の壓迫も、兩界に通じて行はれる必然の裡に融け去り、其の兩必然法の渾一から眞正の自由が出現する。この消息に達した希臘人の理想、希臘人の神々の面目には、欲求の跡も意志の跡も遺さない。これ兩者を融和せしめて居るからである。吾人を照らすユウノーの光顔は、威容でもなく婉麗でもなく、實に兩者を融和したものである。女性的の神は吾人の崇敬を促がすと共に、神らしき女性は吾人の愛を喚起する。吾人をして天上の悅樂に酔はしめると同時に、天上の自己充足は吾人を畏敬せしめる。其の全態は獨立自全であり一乾坤である。恰も天上の樂の如くに隨從せず抵抗せず、時流に順はず、諸力と争はず、而も其の心を誘ふや抗す可らず、其の威の發するや近づく可らず、吾人をして至靜至寂の境に居らしむると同時に、又吾人を至動至活の境におく。こゝに吾人は筆舌の名狀し能はざる妙感を覺えるのである。

感性的衝動と形式的衝動、この兩衝動の斯様な調和は美であるが、これ實に理想的美であつて、實際美は或は

兩衝動を張り或は弛める作用をなすのである。強い美は粗野頑強なるもの、殘留を保し難く、弛める美は柔軟に導くを防ぎ難い。強い美の効力は物的並に道徳的の力を督勵するにあるが故に、其の弊は氣質並に性格の抵抗力の爲に感受性を滅殺し、又は野性を抑ゆべきものが優しい方の人をも抑へ、自由なる人格が受くべき力の獎勵を野性が受ける所にある。故に勢力の充實した時世には、思想の眞に偉大なものがあると共に、往々奇怪なものも現はれる。心術の高尚なものがあると共に、情慾の横溢を見ることがある。又規律や形式の嚴なる時世には、たと自然を制するのでなく、往々これを壓迫することがある。次に弛める美の効力は、物的並に道徳的の力を弛めるにあるから、其の弊は、情慾の煽威を挫く可き所に却て感情の力を抑制し、又情慾の力を滅殺すべき所に却つて性格の力を弱めることにある。故に文弱の時代には、溫和は動もすれば軟弱に流れ、形の正しきは往々虚偽に陥り、又輕快は浮薄に、自由は放縱に流れる。故に物質と形式との力の壓迫に苦しむものには弛める美の作用が必要である。何とたれば茲にはたゞ大と力とあつて和合と溫和とを缺くからである。又趣味に耽るものには強める美の作用が必要である。之文弱にして蠻的の力を味得ることが出来ないからである。以上の消息に通ぜぬ者が藝術の効果に就いて疑を抱くのである。調和と形式とに傾いて感性や力の弱いのも、又力に傾いて形式を缺くのも、共に偏せるもの、即ち制限を受けて居るものであつて、皆人間性を完ふしないものである。即ちこれ自己充足を缺くもので、外に求むる所ある者である。美は弱いものに力を與へ、力に調和を授けて、限られた状態から絶對の状態に移らしめる。人間を自全なるものにするのである。感覺又は概念の壓迫下にあるものは不自由である。夫の兩衝動の共同する所に眞の自由がある。故に法則に制せらるゝ者を自由になすには物質に依るべく、

感情の力に制せらるゝ者を自由ならしめるには形式に依るべきである。いま弛める美は、(一)静かなる形として、野蠻的生活を柔らげて感覚から思惟に移らしめるが、(二)生きた形としては縮過ぎた形に感性的の力を附與し、概念を直観に、法則を感情に返らしめる。勿論この弛める美も、事實としては其の質料を思ふ存分に得ることが出来ないから、多少或は物的に或は形式的に傾くことを免かれない。美も事實としては傾き偏するを免かれないから、若し夫れが時世に適すれば効があり、不適であれば却つて害がある。これを知らぬ者が藝術を疑ふのである。

シルレルの藝術教育論其三

上來の所論の主旨は、美が合する力たる感性と、分析する力たる悟性との結合にありといふ事になる。美の觀照に感情を用ひるものは、個々を辨別しないで、感じが與へる全體を捉へる。けれども、美の觀照に感情を用ひず、反對に悟性を用ひるものは、美を全體として捉へることが出来ず、たゞ部分のみを分辨して見る。随つて精神と物質との融合を見るのが不可能である。感情のみを以て美を觀る者は、其の思惟力の足りない所から、無限の自然に追ひ及ばないが、悟性のみを以て美を觀る者は、其の思惟法を以て無限の自然を限らうとする。前者は、美を分析すれば其の自由を失ふものと思ひ、後者は、渾一融合は其の概念の明晰を缺くものと思ふ。故に前者は、其の重視する所の自由は、法の無い放縱任意なことではなく、諸々の法則の調和であり、内面的必然であることを知らない。後者は、其の重視する所の公明とか明晰とかいふものは、某々の現實を排除することではなく、一切を絶對的に包含することであり、美は制限に於て存せず、無限に於て存することを知らない。併し大觀すれば感情に依つて美の觀照をなす者の方が寧ろ眞に近い。たゞ識見

が足りない許りである。感官は合はせるもの、悟性は分析するもの、而して理性は又合はせるものである。

吾人の精神が未だ何等の感性的印象を受けない時は、夫れはたゞ空虚な無限性であり、無制限な可限定性であり、何物をも立せられないから随つて何物をも除外せられない。けれども感性が一度動く時は、精神は一の内容を得て、今迄空虚であつたものが現實となり、之と同時に限界が生ずる。即ち實有性を得るけれども、其の代りに無限性を失ふ。勿論之を自余一切を排除した爲め、一箇の實有を得たのであると思ふべきではない。精神の絶對的な働きがあつて、否定が肯定と相關係するからである。此の精神の作用が判断であり思惟である。思ふに一個の場所を定める迄は吾人には空間といふものはないが、併し本來絶對的空間が無かつたならば、一個の場所を定めることも出来ない。時間に關しても全然同じである。されば部分から全體へ、限界から無限へ行くものであるが、また全體から部分へ、限界から無限へ至るものである。故に美が感覚から思惟への移り行きを媒介するといふのは、兩者間の溝を充たすといふ意ではない。それは不可能である。その兩者間の溝は實に無限大である。個から全、偶然から必然の生起するには、新しい一個の獨立力が加はらねばならない。思惟は感性なり印象なりを機縁とはするが、併しそれから生起するのではない。外來の力に俟つものではなく、單に働き出すに際し質料を外から需める迄のことであつて、實に思惟の獨立力に依つて立つものである。されば美は思惟を助けるものではない。思惟力を開放して自由ならしめ、思惟獨自の必然法に依つて作用する様にするのである。美が人間を限界から無限に移動せしめるといふのは、斯様な意味に於てである。尤も感性をからねば思惟が起らぬといふことから推して、彼の情慾が精神の自由を抑へる積極的力を有する様に思ふのは誤りである。勿論情慾の旺盛な時は理

性は屈服されて居るやうであるが、併し情慾の強いことが精神の弱い證ではなく、精神が弱いから情慾が蔓るのである。

質料的衝動と形式的衝動と、吾々人間は二つの相反性を具有して居る様に見えるが、併し人間は元來有限的精神を有し、無限的精神を有しないことを了解してをらねばならない。有限的精神は限界によつて、質料によつて受動によつてのみ始めて無限に達し得るのである。これ叙上の兩衝動を具有する所以であつて、兩者其の一を缺いては他の一を充足することが不可能である。此の根本的な兩衝動が具足するが故に、精神を矛盾的のものとしてはならない。精神中に兩者が生息するのであるから、精神自身は質料でもなければ形式でもなく、感性でもなければ理性でもない。此のことを知らない人が、行爲が理性に合した時のみ精神が活動し、行爲が理性に逆ふ時のみ精神が受身であると誤り考へる。兩衝動は必然的のものであつて、且つ互に反對に向ふのであるが、兩必然の互に相消す所に全き自由が起る。意志は即ち之である。この意志は兩者に對して自由である。快樂への甘き誘惑あるに拘らず、主義を變ぜぬ強者もあれば、正義への衝動あるに拘らず、不正を敢てする剛腹漢もある。外界よりの必然に依つて感性的状態が生起するのは、吾人の自ら如何ともすることが出来ない所である。この感性的状態に反對して、内界よりの必然、即ち人格の必然が現はれて來る。之を自識と稱する。是亦必然のことであつて、吾人の功でもなければ過でもない。右の兩者は主體の本となるものであつて其の作爲ではない。人間の理性、即ち法則、即ち普遍、首尾一貫の要求なるものは、此の自識が感覺に對立して生起した後に起る。それ以前には只必然の自然あるのみである。換言すれば夫れ以後に於て人間の人間たる所が現はれる。兩衝動の必然性が

互に相消して自由意志が起るのである。蓋し上述の自由は、叙智的實在としての人間本來の自由、與へることも奪ふことも出来ぬ自由を指すのではない。物心合一體としての人間の自由をいふのである。たゞこれ理性の儘に行ふは第一の自由であり、理性の法の下に物質的に行ひ、物質の制限の中に理性的に行ふ自由は第二の自由であつて、それは第一の自由から來るのである。

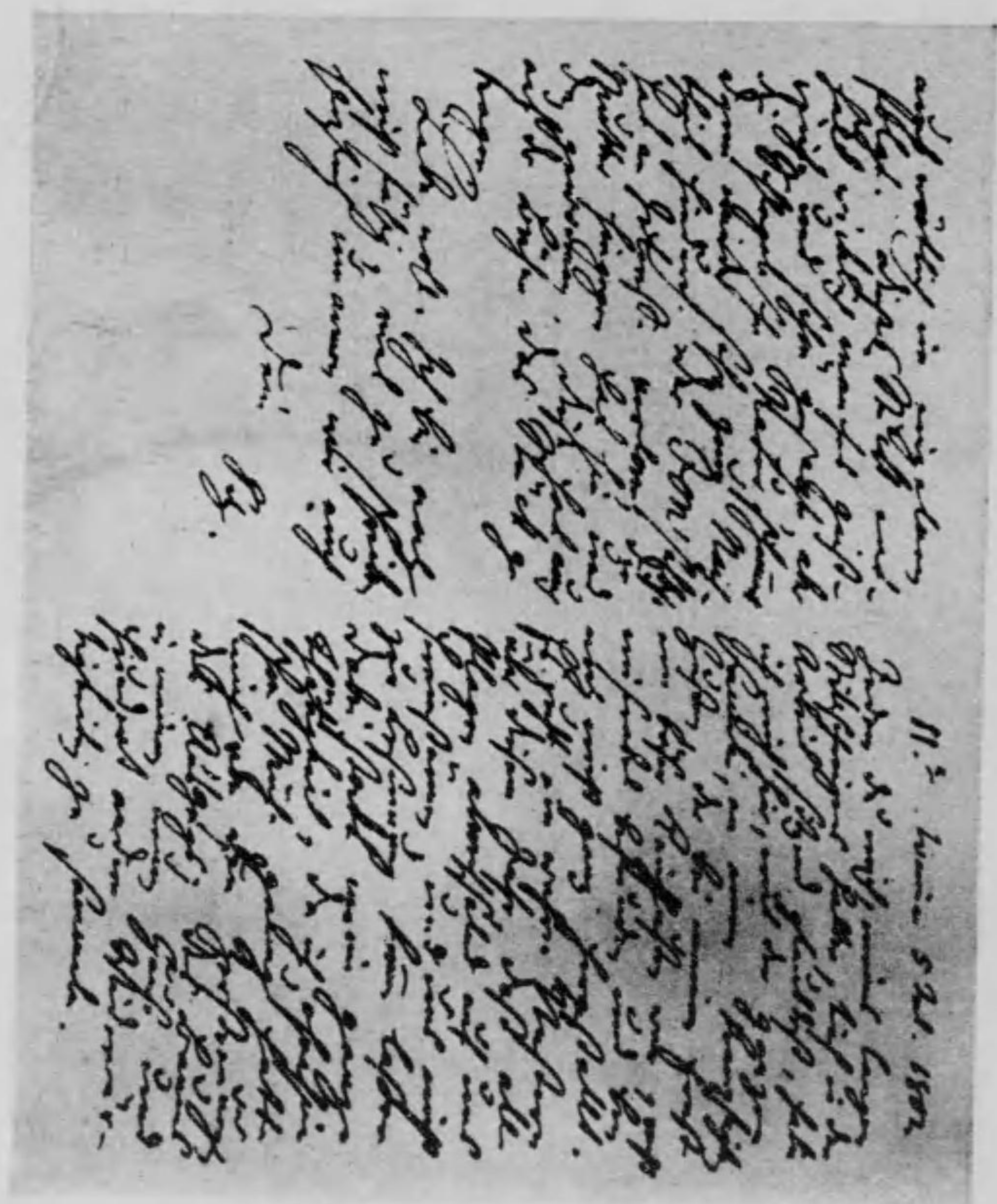
感性的衝動と形式的衝動と、此の必然的な兩衝動の相互に否定する所に起る自由は、感性的状態の必然を否定するが故に無限の趣を存する。けれども理性の必然性に依つてこの感性的状態を絶滅するものではないから、やはりこの状態を存するのである。精神の本來は空虚な無限力であるが、今や無限の趣を存すると共に一定の状態を存する。秤の兩方の皿が空であれば平均を保つが、兩皿に同じ重量を置けばまた平均を保有する。後者がこの美の状態に相應する。内容があつて而も平均を保つは空なる場合の如くである。有限の状態にあり乍ら而も無限の趣を保つて居る。蓋し普通の感覺は受動であり、且つ一個の限定せられた状態である。思惟は能動であり、且つ一個の限定せられた或者である。畢竟兩者が分離して居るから、一方受けるのと、他方之に對して内面的な絶對力で反撥するものと兩對立である。美的状態とはこの二者の合一態であるから、内容は存し乍ら自由である。一定の有限的存在から脱してもとの自由に復歸せしめる。故に美的状態に於て何等かの結果を期待しても何等得る所はない。美並に美から生ずる情調が認識及び動機の爲に無用物であるといふのは當つて居る。美は特殊の行爲及び智識を授けぬものである。智と徳との上に特定の内容を附與しない。何等かの真理を示し、何等かの義務を果さしめるものではない。智を養ひ性格を作るに足るものではない。たゞ自ら成らんと欲する所を爲し得る所

の、自然の自由を返戻して呉れる。而して之が美の大なる賜である。感覺は制限する。思惟も亦理性の法に依つて制限する。併し美的情調は彼の特定状態に入つた爲に失つた自由を再び與へる。故に自然を第一の造物主とすれば、美は第二の造物主であつて、「人間」となる力を吾人に授けるものである。さればまた美的情調が最も能く智徳を授けるものといふことが出来る。何となれば美は特殊の状態に限られず、従つて特定の智徳を授けない代りに、吾人をして何等の制限のない状態におくのであるから、又一々の智徳に對しても何等の制限を加へず、如何なる智徳をも開發し得る状態に居らしめるからである。「人間」の全體を包蔵する心情は、「人間」の何れの特珠的發現も出来る地である。凡ての學習は何等かの技能を授け、何等かの智識を授けると同時に、それだけ吾人に制限を加へるけれども、美的修養は凡ての制限を超越せしめる。

美的状態は自全のものであつて、美の力は感性の様に人を誘惑せず、思惟の様に人を引きしめず、受動的と能動的との力を平均に動かし、靜と動、從順と抵抗、直覺と思惟、眞摯と遊戲に同様に居らしめる。故に藝術の眞偽を知らんが爲には、吾々の精神に斯様に調和自由と活動勢力を兼ねしむるか否かを檢すべきである。吾人が若し或藝術を享樂した爲に、特殊の感じや行爲を喜び、他の感じや行爲を嫌厭する心的状態を得たならば、そこそ眞正の美的感化でない確證である。けれども藝術は事實上純粹完全なものでないから、たゞ理性に接近するのを優れりとし、吾々の心情の方向を制限することなく、情調を普遍的ならしめるものを優れた藝術としなければならぬ。美なる繪畫、彫刻、建築を觀ては智性が覺醒し、美しい詩を讀んでは想像力が盛になり、美なる音楽を聽いては感情が活躍するのが常である。繪畫、彫刻、建築などの造形藝術は、その概念が瞭然として居る所か

ら幾分學術に近づき、詩は眞正の美の必然性を幾分か脱出して想像の放縱に傾き、音楽は其の質料の爲めに眞の美的自由を距つて幾分か感官に近づく。これ皆免かれ難い所である。然らば是等の藝術の完全とは何であるか、各自の藝術が其の領土を他の領土と混同することなくして、而も心情に及ぼす感化は益々他と類似し來る所にあり。音楽藝術の最高なるものは、形となり靜となるにある。繪畫藝術の理想は、音楽的直接的感じによつて吾人を動かす所にある。詩の理想は音楽の如くに強心を動かし、而も繪畫の如くに靜明なる所にある。各々が其の特殊の長所を失はないで、其の特殊の制限を打破するのが理想である。美は其の内容に依つて影響を與へず、内容のみで効果あるのを理想とする。即ち形式に依つてのみ眞の美的自由が達せられるのである。何となれば、容は其が如何程高尚廣大なものであつても、必ず精神を制限するからである。故に内容が心を引き付けようとするのを形式で抑へ、形式で以て質料を没却するのが妙手である。即ち輕快な遊戯的な内容も、吾人をして其の享樂から直に嚴格眞面目の状態に移轉せしめ得る様に扱ひ、又嚴格眞面目なる質料も、吾人をして其の享樂から眞に輕快な遊戯的狀態に移轉せしめ得る様に扱ふべきである。例へば悲劇の如きは、情といふ特殊の内容を有つて居る。之を觀て痛切に情を動かすが、而も心の自由を失はないといふ様に取扱ふのが完全である。世に情慾を扱ふ藝術はあるが、美の美たる所以は情慾を脱せしめるにあるから、従つて情慾的藝術といふのは矛盾である。同様に教育的改善的藝術といふのも自家撞着である。何故ならば心に特定の方向を指示するほど美の本質に反するものはないからである。感性的の人間は、藝術家が美として全體として提供して居るものの中、其の質料のみを見、道徳的見地から觀照する人間は、教訓を其の中に求めようとするのである。

美は感覺の受動的状態から思惟及び意志の能動的状態に移り行く間に存する。併し人間の中には感覺から思惟又は決意に移行することが迅速であつて、中間に漂ふべき美的情調の殆んど見る可らざる人がある。斯種の人間は美的無制限の態に止まる事に堪へ能はぬので、直に何等かの結果に達せんとするのである。反之、個々の行爲よりも全體の力の感じを享樂する人は、其の美的状態の面積が廣汎である。前者は空虚を恐れるものであり、後者は制限を忍び能はぬものである。前者は細事にまめやかに働くの適し、後者は右の力と同時に、現實の力、即ち知識や技能や意志力を得るとき大事に堪へ得る人である。前言の如く、美は感覺の受動的状態から思惟及び意志の能動的状態に移り行く間に存するが故に、感性的の人間を道德及び理性に導くには、先づ之を美的状態に入れることが肝要である。これ美が道德及び真理への向進力を開放するといふ意味に外ならない。感性的の人間は其の感性的生活に限定せられて、自動的に働らく自由を失ふ。之を回復するのが美の力である。併し一旦之を回復して自由となれば、こゝから理性と道德に進入するのは易い。何となればたゞ適宜の動機や機會を與ふれば足らぬからである。けれども此の事たるや意志の自由を以てすることが出来ない。何故ならば、意志の自由なるものは美的となつて始めて得られるからである。故に人間を美の世界に導くのが教化の最重要事である。美から道德に入るのであつて、物的から入ることが出来ない。物的は制限的存在であるから、之を無限なるものに高めねばならない。併し既に美的境涯に到達したならば、物的の目的は自ら得られる。物的から見れば、たゞ自然の欲で行ふものも、理性として行ふものも、目的さへ達成さるればよいのであるが、併し品位の方から見れば、物慾



SCHILLER OWN WRITING

で行するのは卑しいことである。俗人が物慾の儘に行する所を、自由調和を以て行するのが高尚である。世間並なことを自由に、美的に行するのは高尚な心の證である。些細な單に役立つだけの、手段として價値ある位のこと雖も、其の行ひ様で、能く之を無限化し獨立化する力を有つのを高尚といふ。高尚な人間は、己一個を自由にするのを以て満足せず、無生物をも自由にしようとする。人間の容貌又は藝術に、餘りに聰明の相が現はれ過ぎると、それは反つて高尚の感を與へない。これ即ち「目的に役立つもの」、即ち依屬を暴露して少しも之を包まぬからで、随つて美感をも與へない。單に道徳法を守らんとして行するのは——其れ以上の義務はない様ではあるが——道徳法を目的としてそれに役立つのである。それを超越するものは之義務以上である。義務はたゞ汝の意志の清淨なるを命ずるものであるのに、高尚は既に性質が清淨となつた態である。

シルレルの藝術教育論其の四 シルレルの見解に依れば、個人として又人類として吾人の通過すべき段階が三つある。(第一)物的状態では自然的勢力を受身的に受け、(第二)美的状態では之を超越し、(第三)道徳的理性状態では之を司配する。

第一の状態では、人間は只其の刹那々々の欲動の儘に動き、己の好むものは之を餌とし、大なるもの力あるものは敵として恐れる。物質界と接觸して其の需求に驅られ、欲望に苦しめられ、その靜謐休息の態としては、只これ飽滿と疲勞あるのみである。人間としての品位を、自己の中に見ることが不可能であるから、従つて他人を尊敬することも知らない。自己の内に他人を認め得ず、たゞ他人の内に自己を認めるのである。社交的生活に於ても、己を同族全體に迄擴めることが出來ず、全く自己中心である。併し斯かる獸的狀態の中にも理性の自由

な光の曙が見えるのである。然らば理性の始めて發現するのは如何なる有様であるか。それは先づ物的従属を無制限にしようとする努力として現はれる。理性は其の特徴として絶對を求め、併し絶對は物的生活のうち何處にもないから、それで物界を離脱して永遠界に入るべきである。然るに最初は之を誤つて物的を永遠にせんと力める。故に反つて恐るべき奴隷状態に陥るのである。只管物的を求め利己を求むる獸性界の眞中に、絶對の要求が發現する時、絶對の要求は利己を捨てないで、却つて之を無制限に擴げ、不變を求めないで變化永續を求め、時間的存在の無限に續かんことを求める。吾人を眞理と道德とに導く可き本性が、感性に制限せられる爲め際限を知らぬ欲望として現はれ、獸的剝削的満足を求めない代りに、無限の將來を想見して之を追求する。併し其の無限の將來を求めるとは、其の實たゞ現在を求めて居るのである。理性は早其處に現はれては居るが、その理性は未だ感性の用をなすに過ぎない。物界を超越すべくして尙物界に捉はれるから、道德法は見えても、而も己の内界の法として見る能はず、外來の力として見える。宗教も此の階段では所謂恐怖の宗教に外ならない。

然るに理性が獨立して物的状態に囚はれず、之を離脱し之を客觀視する様になれば、彼の獨立は愈々確實になる。そして物界を客觀の對象とするに至れば其處に暫時の靜止がある。人が思惟する時は、物は己の所産であり對象である。従つて自己が物を支配こそすれ、物に支配はされない。今、美は固より自由觀察の所爲であり既に精神界に入つたものであるが、併し茲に注意すべきは、美は眞理の認知の様に全然感性界を去るものではない。認識に於ては能動と受動との別が認められる。併し美の享樂に於ては、能動所動の繼起が認められず、形式其の物を感じるのである。美が反省に依つて觀ぜられる限り、それは吾人の對象であるが、自ら感ずることが美を見る

條件である限り、同時に吾人自身の状態である。之を觀るから形式であり、之を感ずるから生活である。吾人の所業であると共に吾人の状態である。故に茲に質と影、受身と能動、制限と無限とが兩立するといふ確證を得る。人間が必然に物的に依屬し乍ら道德的自由を失はないといふ事は、美のみが之を證する所である。論理的統一や眞理の認識にあつては、感じと思惟とは一ならず、寧ろ思惟の際は感じが去り、感ずる時は思惟がやむ。故に分折家は兩者の融合を不可能事と見て居るやうである。然るに觀美の際は質と形と、受動と活動との事實的融合を知るのである。そこに有限の内に活躍する無限と最高の「人間性」の可能とが證せられる。物的依屬から道德的自由へ移り行く事の可能は、右の説明に依つて明瞭であらう。即ち美は兩者の全然融合したものであつて、人間が精神的たらんが爲には、敢て物的を避くるに及ばぬ事が明瞭である。斯様に人間は感性界に住し乍ら而も自由であるが、自由といふことが絶對的、超感性的なものであるならば、人間が制限から絶對に迄到達し、其の思惟、其の意志に於て、感性に對立し得る事の可能が明瞭である。それは既に美の状態に於て出來て居る。美に居れば眞と善に達することは出來る。たゞ如何にして美に至るべきかと問題なのである。

自由は美的情調によつて始めて現はれるから、自由によつて美的情調を生むことは出來ない。之はたゞ幸にして到るものである。只茅屋の裡に靜かに己を觀じつゝ、出でよは全人類に接するものゝみが美を見る。生其の物に神聖な秩序を見、秩序の中に生の漲溢するものに美がある。感性鈍にして需めなきもの、又は情慾強くして飽く事を知らぬものには美心が起らない。孤立して己の外に人を見ぬもの、又は游牧的に群居して己の内に人を見ぬものには美は現はれない。然らば未開人が獸的状态の束縛を脱し、始めて美の舞臺に現はれるのは如何様にし

てどあるか、それは形象其の物を喜び、飾を好み、遊戯に傾く時である。愚鈍であるから現實を脱却することが出来ず、悟性は事實に任せしめる。現實に執着せず、形象其の物に興を催ふとき、人類は文化に入る第一歩に達する。形象は只形象である所に價値を覺えるので、それが現實を表現する爲に然るのではない。視覺と聽覺とは物質の直接的接觸を遠ざけて、只形象に依つて現實を知らしめるものである。觸れるものは吾人が受ける壓力である。視聽に入るものは吾人が生む形象である。人間が野蠻な時は觸れて享樂する。視聽は只之に役立つのみである。一旦視的に享樂し、視ること其の物に獨立の價値を覺えることになれば、これ即ち美的となつたのである。遊戯衝動が出現したのである。次で起るものは模倣作動に依つて形を造らんとする衝動である。形象を獨立のものとして取扱ひ、現實から離して自ら之を造形せんとする。これ藝術の初源であつて、此の藝術的衝動の起ることの早晚遲速は、一に只形象のみを享樂する能力の程度による。思ふに一切の現實的存在は、外から來る力として吾人に賦與せられる。反之、一切の形象は寫象する人間自身から起る。されば實質と形象とを區別し、形象のみを形造るのは、人間本來の所有權を行ふ如きものである。これ即ち藝術である。美は形象の世界であるから、實踐と理論に交渉してはならない。現實に媚び、現實を其の助にかかるが如きは、皆精神の獨立を失はしめる。勿論美的形象を宿すものが現實でない事を必要とすると言ふのではない。たゞ其が現實であることが吾人の判斷を左右してはならないと言ふのである。さうでなければ美的判斷ではない。例へば生きた裸體美人も吾人に美を感じしめる。同様に彫像美人も吾人に美を感じしめる。併し裸體美人が彫像美人よりも少くも吾人を嬉ばしめることがあれば、それは形象のみを動機として然るのではない。即ち純然たる美的感情で喜ぶのではない。純美感情は生

きた裸體をも只形象としてのみ樂むのである。固より形象の美さへあれば、生はなくとも、それを意としないよりも、生きた物に就て只其の形象のみを感受する方に一層深い美的修養を要する。個人としても國民としても、形象を獨立正當に認めるものにあつては、理想が現實を支配し、名譽が所有を支配し、思想が享樂を支配する。此處では輿論が尊重せられ、月桂冠は紫衣よりも貴い。反之、形象によつて現實を補ひ、現實によつて形象を補はんとする個人や國民は、道徳的に下劣であり、美的に無能である。然らば形象は道徳界に如何程迄容れられるか、それが美的形象である限り容れられると謂へる。美的形象は道徳的眞理に危険なものではない。若し危険であるならば夫れは眞の美的形象ではない。例へば美的交際を知らぬ者のみが、禮節をば個人的親愛の表れと思ひ、或は禮節を致さんとして詔ふに至るのである。現代の嚴肅なる道徳家は、此の美的交際を墮落と評するけれども、それは酷である。形象其の物を求めるには、心が自由であつて、意志の力が現實に束縛せられない程に大でなければならぬ。形象の爲に現實を憂へはしても、現實の爲に形象を恐れるには及ばない。蓋し人間が何時迄も己の人格の獨立を得ないのは物質に捉はれ、それに役立たうとするからである。理想的たらんが爲には其の性格全體の革命が必要である。利害得失を離れて純然たる形象を賞翫する形跡があれば、それこそ右の革命の行はれつゝある證であつて、「人間が」始めて出現するのである。

凡そ物が潤澤になれば美的享樂の餘地が出来る。最初は現在の需要以上に物を集めて、それを以て將來の需要に供せんとする。尙一步進んで、其の物の實質を離れ、その用ひ様、その欲望の充たし様、形象其の物に意を用ひる様になれば、これは自由への第一歩である。この歩道は既に人類以下のものにも認められる。飽食充力の獅

子の勢力溢るゝが儘に躍動咆哮するが如き、鳥が囀り昆虫が陽光の下に群遊するが如き、之只現在の需要を充す爲のみならず、餘力が溢れて遊ぶのである。是等は需要の壓迫を逃れ出で、充滿餘分の壓迫となり、物的遊戯を呈するのである。是から一步を進めば美的遊戯となる。最初はたゞ不羈自由を喜ぶ。此の時は感性的利己的な分子が混じて居る。その趣味は野鄙であつて、只管新奇な、彩色の派手な、けばくしい對照の、或は迷信的な激情的なものを愛し、單純にして靜かなものを嫌ふ。單純に物を喜ぶ傾向は轉じて己の所有物を喜ぶ傾向となる、即ち什器、衣服、武器、家屋等に對して實用の點からのみ満足しないで之を飾るのである。己の生存を美観にせんとして、其の爲に實質内容を損じても形を飾らうとする。己の身を飾り遂にまた己の心を飾るに至る。喜戯して跳るものが舞踏となり、感情を表現せるのみの騒々しい音聲が歌謡となる。騒々しく戰場に押出すトロヤ人に對して、希臘人は靜かに堂々と進んだのである。

人間が一時的な情慾の壓迫から逃れて形の美を認め、遂に心と心と相見るに至つて永久な眞の愛は起る。美は天地の間に於ける最も單純な相對、即ち男女の相對を和らげるが、また道德界一切の男性的と女性的と、剛直と溫柔とを和合せしめる。血を流しても醫する能はざる復讐の渴も、涙は能く之を醫することがある。武器を投げて來れば敵の冑も立てる所がない。おのゝいて接吻すれば異國人も歓迎せられるのである。

思ふに、(一)權力的國家にあつては、人權は力として人に對ひ、人の行動を制限する。故に自然を以て自然に對せしめることによつて社會を可能となすに過ぎない。(二)倫理的國家にあつては、義務は法則の威嚴を以て人に臨み其の意志を制する。故に個人的意志を一般的意志に服せしむることによつて社會を必然となすに過ぎない

(三)美なる交に於てのみ人權は形象として來たり、遊戯の對象として人に對する。故に美的國家に於てのみ全體の意志が個人の性情を通じて行はれる。故に社會は現實となる。美のみが個人裡にも社會裡にも調和を生じ調和を齎らすものである。人間は其の需要から社會をなさねばならない。而して理性は社會的法則を課し、而して美は社會的性格を作るのである。趣味が行はれ、美的形象が賞翫せられる世界では、主宰となり優勝の地位を占めることは許されない。この世界以上の世界は、一切物的の無い純理性界である。この世界以下の世界は、盲目的な自然界であるのである。只此の美的世界では利己を棄てねばならない。義務の命令も何等の抵抗を受けないから嚴格でない。趣味によつて學術の寶を一般に擴張して學派の專有とする様なことはない。此の世界では暴力は屈せねばならぬ。物的需要も形象によつて其の赤裸々の姿を隠す。この美的國家では勞動者に至る迄自由民であつて、彼等は高位のものと同等の權利を有する。悟性は民衆を其の目的の爲に使役せんとするものであるが、この美的國家に於ては民衆の贊助を仰がねばならぬ。故にこの世界に於てのみ始めて平等の理想が實現せられる。吾人は斯様な國家をば何處に求むべきであるか、優美なる心の人達は皆之を欲するのであるが、事實としては只二三の擇ばれた社交に於てのみ之を見るのである。之が純粹なる共和國、純粹なる都會であつて、此處では他の道德を模倣せず、たゞ自己の美によつて自由に行動する。複雑多端な事象も單純と無邪氣の中に處理される。己の自由を張る爲め他の自由を妨げる要がない。呻嘆ならんが爲に己の品位を失墜するを要しないと。美育思想は新人文主義者であつたシルレルに依つて極頂に到達せしめられた教育觀の骨子であつたのである。

ウオルフの希臘的教化

シルレルと時代を同じうし、新人文主義を深く學校教育に徹底せしめ、藝術教

育の高調に力あつた者はヴァルフ(一七五九—一八二四)である。彼は古代語を中學及び大學の重要教科とし、之に依つて古代人を知ること、及び之に依つて人間其の者を知ることの本領とした。人間に關する高尚なる知識は主として古來獨立の狀態に於て他に秀でた總べての國民を攻究することに依つて得られる。併し斯様な攻究に價するものは少數の國民である。彼の羅馬人の如きは吾人の學習に對して希望すべき材料を與ふことが出来な。吾人はたゞ古代希臘人に於てのみ、純粹に人間的と稱すべき點に迄完成した品性の根柢を組成する國民及び國家を發見することが出来る。希臘人は一般的興奮及び受納性を有し、其の文化發達の自然的過程に於て凡ゆる事を究め、能く獨立の歩行を繼續し、政治家の偏狹な制限的思慮に拘らば能く人を忘れず、一般的犠牲を顧みずして、能く公共組織を人間活力の自由發展の爲に供し、尙技術の美と品位とに對する精緻の感情に結合するに廣大深遠なる科學的研究を以てし、そして其の遺物の上に高尚修美の記念を押ししたと同時に、理想的推究に最初の嚆賞すべき模範を定立したのである。是等の諸點に基づいて、人類の歴史を究むる者に對し、希臘人の如く必要にして、且つ神聖なる國民はないと言つて居る。斯くてヴァルフは、希臘世界を其の言語及び技術に依つて學ぶを人間教育の最良方便と見做し、この方便は人間に對して天賦の能力を養ひ、之を練習する物を賦與し、其の知識を知るに足るものによつて擴張し、眞理に對する精神を鋭敏にし、美に對する判断を精緻にし、想像に法規と度とを與へ、全心力を趣味ある事項及び作業に依つて惹起し、能く其の平衡を保たしむるものであると觀じたのである。

要するにヴァルフは古典語を重視し、其の目的をば、(一)古代人を知ること、(二)人間其の物を知ることと置

き——希臘文化の言語に依る體得を教育の最良法と認め、鎖された古代の世界に接觸する者には、夫々特殊の力が與へられる。即ち認識力が促進され、眞理に對する敏感が強められ、美的判断力が深められ、空想に規準が與へられ、是等の凡ゆる能力が均齊に發達せしめられるといふ諸點に其の効果を認めたのである。

ジャンバウルの思想 ジャンバウル(一七六三—一八二五)は、彼のゲエテやシルレル等と同じく有名な詩人であるが、教育に關する思想は、ルッソーのエミールを模倣して作つた其の教育書レバナ(Tevana)に於て明かに發表されて居る。彼れの見解に依れば、人間には生れ乍らにして理想的な立派な人間になり得る素質が備はつて居る、潜在して居る。之を開發伸長するのが教育の仕事である。知識や道徳は關係系統のない蟻塚の様なものではなく、一種の有機的關係を有して居る。而して其の開展覺醒には滋養物を要求するのであつて、夫れが教育の方法になるのである。德育に關しては、一方に壯嚴な強い道徳があると同時に、他方には美しい道徳がある。正直、強固なる意志、忍耐、正義、自重なさは前者であり、他人を愛し、弱きに同情し、厚意を盡すなごの事柄は後者に含まれる。これは自己に對する道徳と自他に對する道徳とであるが、併し人が自己の欲求を棄て私慾から遠ざかる點に於ては兩者相一致する。教育では單に私慾や感覺的欲望に慣らさないで、出来るだけ努力精進の習慣を養つてやらねばならない。この習慣さへあれば永遠に創造の望みがあると言つて居る。宗教々育に關しては尙一層注意すべきものがある。ジャンバウルの見解では、宗教は獨り人間にのみ見出さるゝものであつて、人は一旦墮落しても向上的努力に依つて浮ぶことが可能。宗教は固より神を信する事にあるけれども、常に神靈に向つて渴仰することが肝要である。併し神は天空に在らずして吾人の胸に宿り、吾人に滋味と内心の確實と

を感じしむるものであつて、恰も道德の詩とでも言ふべきものである。宗教の教育は如何になすべきか、此の問題は頗る難題であるけれども、要は一種の驚駭なくしては信仰は起るものではない。順序を経過し階段的に起つたものは其の力が弱い。一の驚駭感には全體の哲學を破壊することもある。有限的知識を與ふる場合には、漸次に相當の順序階段を履むことが肝要であるけれども、宗教の様な無限的のものを與ふるには、直覺的に、一度に大飛躍的に信仰を得しめるやうに指導した方が強い力となるのである。彼れの教育論は系統的叙述ではないけれども、美育に關しても能く吾人に教育の根本原理を教へて居るのである。

ジャンパウルの所論に従へば、人は皆完全圓滿なる教育を施さんと欲するに拘はらず、而も藝術教育を鼓吹する者の當世に少なきは實に奇異である。藝術教育は必要にして決して忽諸に附すべきものではない。兒童に藝術教育を施さんとするには自然の順序がある。美的陶冶は具體から抽象に進むべきものであるから、年齢からいへば、最初感覺機關に映じ得る美的對象たる繪畫、彫刻、建築、自然の如きものに關する教授をなし、然る後、漸次に音樂や詩文の如き抽象的藝術の教育に入るべきである。殊に詩文は抽象的であり難澁であり、且つ兒童をして無味乾燥の感を惹起せしめ、詩美を誤解せしめる虞があるから、年長者に於て始めて教授し得るものである。國民性の方面から言へば、當世の獨逸人は音樂藝術には堪能であるけれども、繪畫彫刻などの視覺藝術に機巧でないから、先づ目の教育を重んじ、後耳の教育に進むべきである。殊に學校教育に採用すべき詩文は、獨逸の詩文でなければならぬ。獨逸の詩家を知り、獨逸の文藝を學んで、而して後之を補ふに古代文藝を以てしなければならぬ。特に吾人は我が獨逸國民文藝の溯源たる希臘、羅典の文藝をも知らねばならぬ。之を知らなければ眞



PESTALOZZI

の人間になることが出来ないと論じて居る。ジャンパウルとシルレルとは、時代を同じうしたのにかゝはらず、その藝術教育に関する見解に就ては随分の差異がある。即ちシルレルが藝術教育を以て人間教育の最高理想と観じたのに對し、ジャンパウルは之を教育の一方面として考察したのである。

ペスタロッチーの思想 ペスタロッチー(一七四六—一八二七)はルソーに依つて出立し、汎愛派と新人文派とを取つて起り、而も新機軸を出して心理的に建設しようとしたのである。彼れの見解に従へば、人間の教育は自然の意向を特有の發達に従つて指導する技術であるが、「リエンハルトとゲルトールド」の第四篇に、アルナーが自分の教育事業を回想して、人間の諸能力を修練し、稟賦を發達せしめることに努めたと言つて居るのは、ペスタロッチーが自分の教育論を述べて居るのである。然るに「發達」の意味に就ては、所謂調和的發達であるといふことを、「鵠の歌」に明瞭に言表して居る。即ち吾々人間の力の偏頗なる發達は決して眞の發達でもなく、又自然に従つた發達ではない。力の平衡と、力から發する調和が茲に必要であるとして居る。「ゲルトールド」にも、人間性の調和的陶冶に依るの外に方法はないと言つて居る。彼れの教育は一言を以て盡せば人間陶冶になる。そして人間天性の内的の力を純人間の叡智にまで高めるのを人間教化の一般的目标としたのである。換言すれば數、形、語に關係した直観と認識と堪能といふ事の必要を認め、心と情と手の完成を最上のこと、主張したが結局、社會的、國家的、實利的、宗教的に努力して人間性を完成すべきことを説き、藝術其の物に獨自の第一義的價值あることには説き及ばなかつた。併し精神に於ける知、情、意の調和を考へ、眞美、美聖を考へたのであるから、人間性の調和的陶冶の一方面として藝術教育をも考へたといふことになるのである。

エミールに深く感化された彼は、自然を思想の根柢として居る。此の自然本位の思想中に、主観的自然即ち吾人の天性と、客観的自然即ち自然事象との兩方面を包含せる事は明瞭である。彼が教育上の根本主張たる活力の自由な調和的發達は主観的自然の道に従ふもので、教授の根本原則たる「無缺陷」は客観的自然、即ち彼の所謂對象の缺陷なき系列に従ふものである。主観的自然は兒童の身體及び精神で、此の精神自然に従ふこと、即ち心理的に教育の原理を樹立しようとしたのがペスタロッチの本願で、彼は人間能力の全的開展が有機體から發することを確認し、精神の内的及び外的の作用を眼中において、その開展の法を見詰めた。彼が教育の第一則としてあけた直觀に内外兩意義を有する所以もこゝに發して居る。ペスタロッチがこの精神全體を有機的に統一せるものと見、有機的調和的發達を説き、之を稟賦乃至活力の内部的發達と、外部からの「生活が陶冶する」(Das Leben bildet)と觀じた點は達見といふべきである。

藝術教育、心情教育といふ方面から、吾人が特にペスタロッチの思想の中に認めねばならぬのは、彼が「ゲルトロルドは如何にして其の子を教育するか」の中に論じて居る「直觀」の事である。「直接吾人の直觀に觸れた事物から抽象せられたものが吾人の精神を動かす場合がある。之も一種の直觀と言つて宜しいけれども、此の場合には、直觀は感覺の世界から進んで心靈の世界に入るのであるから、種々の精神能力に應じて夫々の直觀が存す。譯となるのである。殊に此の種の直觀は其の領域が廣く、吾人の精神と不可分離の關係ある凡ての感情をも其の中に含むのである」。由是觀之、ペスタロッチが人生に於ける徳の直觀——彼れの教育内容は、少くとも道德的宗教的乃至宗教即ち道德に統整せらるゝ所の全人格、少くとも道德的に統整さるゝ所の目的價值と利用價值の調和

的教育にあつたから、徳及び信仰を言語上の教訓に依らないで、徳行の直觀に依つて傳へる事をゲルトロルドの中に述べて居る——を認めた事は明瞭であるが、併し吾人の茲に注意すべきは、ペスタロッチが特に吾人の精神生活と不可分離の關係ある感情を以て直觀の領域に屬すると明言して居る事である。吾人は實に感情が直觀の領域に屬することを認むるのみならず、更に進んで感情を離れた直觀を認むる能はざるを斷言する。直觀は必ず躍如たる感情を伴ふ。生命ある人格を動かす直觀は、直接外界の人間の行爲に對する外的直觀と、内界の記憶想像の働きに依つて鮮かに心眼に描現せらるゝ内的直觀との二つある。彼に於ては主観的内的直觀が主であつたとはいへ、客観的外的直觀の價值を認めたことも明瞭である。其の何れにもせよ、其の直觀をして躍如として人格の精神生活に觸れしむる導火線となるものは感情である。最も熱烈にして心の奥底深く湧き來る感情は、概念に存せずして直觀に存する。感情が眠りから覺醒し來たる床こそは直觀の床ではないか。直觀が人間の意識の領野に入つて來る時に、始めて道德的理想、宗教的理想、藝術的理想は心靈の鏡の中に映る永遠の星として、誠むるが如く勵ますが如く、慰むるが如き光を送るものではないか。ペスタロッチは藝術教育の根本條件たる美的直觀といふことを明言して居ない。けれども彼が暗黙の中に藝術教育の必要を説いて居ることは既に明瞭であらう。殊に彼が唱道した直觀教育の精神中には、廣く解すれば所謂美的直觀よりも一層根本的な一層宏大な人生の藝術的直觀の教育が溶融せられて居たものと見てよいと思ふ。「生活は藝術なり」いふ詞に眞理があるならば、彼れの所謂「生活が陶冶する」(Das Leben bildet)といふ詞は如何なる意義に解せられるであらうか。

ペスタロッチに就て學ぶべきものは決して尠少でない。藝術教育の一面たる技能教育も亦彼れの重視した所

であつて、「技能なき知識は悪魔が人生に送れる最も嫌惡すべき贈與物である。何となれば、認識及び思考と、作業とは水魚の關係があるからである」と言つて居る。圖畫の如きも眼及び手の練習、想像力、明確なる表象、美的感情などの教養にありとした。又宗教々育に關しても、宗教的陶冶の發展の出發點は、感覺陶冶の爲の直觀と、身體練習の爲の活力表現と、感情生活の根柢たる慈愛、信賴、感謝、忍耐、從順とにある。是等の根據から生ずる發展は缺陷なく進行し、且つ總ての發展的勢力の連關錯綜を生ぜしめ、知識及び理解力の發達によつて銳知を進め、技能及び感情生活の成熟から道德に達し、感情及び行動を神に關係せしめることに依つて信仰に到達せんとする如き順序を逐ふものであると論じて居る。併し吾人が彼に學ぶべきものは教育教授の理論學說ではなくして、實に彼れの人間教育に關する献身的な藝術家的態度にある。彼れの説を聞き、其の方法を觀て敬服しない人でも、其の生活、其の心情及び教育家の本能を知るに至れば、誰人と雖も教育界の偉人として推獎するに足る人格たるを認むるに躊躇しないであらう。深奥なる理想の維持者ペスタロッチの胸像に向ふ時、吾人は其の醜き容貌に、永き艱難の跡と大なる希望の表徴との印刻を認める。併し其の内奥には人類性質の總ての絃の響が潜在して居たのである。彼れの誠意、彼れの崇高なる犠牲的精神及び愛に滿ちたる心情は、能く彼れの暗影を脱して高く輝き、其の全生活の表象は見る者をして敬愛、尊信の念を禁ぜざらしめる。ペスタロッチは實に人類愛の精神と、教育に關する純眞な沒我的な藝術家的態度に依つて永遠に生きて居るのである。

第六章 十九世紀の藝術教育

科學の世紀 藝術的に感情を力説した新人文的思想は、彼の實利的啓蒙的人生觀に對する反動的現象として現はれ、十八世紀の後半から十九世紀の初葉にかけて、西歐の思想界を支配したのである。併し其の直接的效果は極めて貴族的であつて、シルレルの藝術教育論の如きも、上流の教養ある人士間に歡迎されたに過ぎなかつた。即ち新人文主義者が起つて希臘の藝術的文化を主張したのは、唯上流社會に觸れたのみで、一般國民精神上には一滴の慈雨をも降さなかつた。然るに斯様な貴族的傾向は民衆的精神の擡頭に伴れて段々とデモクラチックになり、文化運動も普遍の色を現はして來た。其の直接原因としては、(一)一七九〇年の佛國大革命の影響によつて、勃然と社會の表面に顯はれて來た民主自由思想の傳播である。舊來の制度習慣を打破し、政治上社會上、民衆の勢力が強くなり、世紀の色彩を變更するに至り、(二)交通機關が發達して文化運動の發展を助成したのはいふ迄もない。然るに茲に、(三)自然科學が勃興して近代文明の基調を構成し、人生の根本たる思想問題乃至社會問題を醸成し、擡頭しかゝつた民衆的精神に益々波瀾を起さしむるに至つた。思想問題とは何であるか、これ自然科學の影響である。内面的方面から見れば、凡ゆる事象に對して疑を抱き、從來の道德、宗教、藝術なきに對して批評的精神を養ふ。近代人の懷疑煩悶は之に基づいて居る。外面的方面から見れば經濟上の變動である。即ち應用科學の進歩、人間の知識を應用して生活の表面を一變しようとする努力——即ち機械といふものが發明せられ、

産業方面に應用せられた結果、社會組織の根本變化を惹起し、所謂産業革命、分配問題、資本家と労働者との押問答、これが十九世紀の大問題であつて、更に之が動機となつて政治、道德、宗教、藝術、教育、社會生活などに潑刺たる難問を惹起したのである。

思ふに彼のルッソー、ボルテール、モンテスキュー、デイデローに發した革新文學の烽火、自由民權の思想は全歐を風靡したのであるが、大革命に依つて文化財の殆んど全部を消盡した佛蘭西には、サン・シモンに依つて創始せられた社會主義が生れ、社會改良、社會現象の實證的研究が主張され、之が獨逸に入つてはマルクス、エンゲルス等に育成されたのであつた。而して是等の思想系統を踐んで、又彼の科學的精神の先驅として現はれた最も重要な思想家は、佛蘭西の哲學者オーギュスト・コント（一七九八—一八五七）である。彼の「實證哲學」(Cours de Philosophie Positive)に依れば、人類の思想は有心有情のものゝ働きを借つて現象を説明する神學的時期、人間の知覺し得ない形而上のものを本體として説明する形而上學的時期を経過し、更にポジティブ・キズムの時期を通じて始めて眞正の學術期に入るのである。彼れの思想は一時非常な勢を有し、其の中心たる社會學は教育思想に大影響を及ぼしたのである。然るに英國に於ては、十九世紀のニュウトンとも呼ばれるべきダアウイン（一八〇九—一八八二）が有名な「種の起源」(Origin of Species)を著し、所謂生物進化論を提唱したのである。進化論の建設が哲學思想及び人類の一般思想上に及ぼした影響は大なるものであつて、我々の知識の王國を今もなほ支配して居る。我々は、彼等が科學、哲學、社會學及び宗教に於ける我々の指導者として作り出した進化、自然淘汰及び凡て之に關する觀念を試験しつゝあるのである。當時歐洲の思想界は進化思想に依つて大革命を惹起

し、スペンサーは之を基礎として其の哲學を組織し、又教育論を發表して斯道に影響を與へ、佛蘭西の文藝家テイヤヌは文藝發達の歴史を人類進化の一部として解釋し、ブルンチューも亦之に倣つて文學の種族進化に關する學說を公けにした。それ許りではない。十九世紀の著しい特色である物理學の方面に於ても、幾多の發見と、廣汎な應用とが始まり、此の時代の目的とも思はれるエネルギー、機械文明の世界は眼前に髣髴として來た。當代人は實に生命の唯物論的考へ、物理及び進化論の聯合に依つて惹起された特別の波に依つて動かされた。これからは科學が人間界を指導するのである」といふ聲は、何處ともなしに瀾漫して來た。斯様な時世に藝術教育が輕視せらるゝのは、彼の啓蒙時代と其の編を一にする。スペンサー（一八二〇—一九〇三）なきは教育論に於て、趣味及び裝飾の教材を世間で過重するのは理由がない。それは花の爲に植物を忘れ、美の爲に實質を忘るゝものである。藝術は生活の暇つぶしである。故に教育に於ても暇の時間にやつていゝ。ゲエテは科學と藝術との交渉を説いたが、實際科學はそれ自身詩的である。人間の知識は固より、道德や宗教の教育にも有益である。即ち一切の目的に向つて科學が全一である」と論じた。斯くて遂に科學的精神は思想界の主權を握つた。即ち十九世紀の中頃——一八四〇年から七〇年頃迄——約三十年間は、其の最も高潮に達した所謂科學萬能の時世である。

思ふに時代思潮の流れは、吾等が血管に打つ脈搏に均しい。時に強く時に弱く一の律動をなして打つ。藝術教育思想の興隆衰運もまた斯様なものであるか。理性萬能の啓蒙思潮に慄らず、其の反動として感情を力説し、力めて蓄積した新人文派の藝術的文化財も、時代の推移と、主知主義の勃興とに伴れ、本世紀の中葉に及んでは、段々と教育の園から驅逐せられて往つたのである。今茲に十九世紀の藝術教育思想の發達を見るに當つては、九

十年代は既に二十世紀への轉向を示し、教育思想の出現も著しく、且つ現代にも接近して居るから、凡そ九十年代以後は本章に譲らうと思ふ。

獨逸の藝術的文化

思ふに當世紀の始め、大奈翁に蹂躪された普魯西は、國民教育の力に依つて此の半死の域を脱出挽回せんとし、シュタインの如きは、彼のフィヒテ、シュライエルマッヘル、キョルネル、アルント、クライスト等の哲學者や詩人と共に、大に道徳的、宗教的、國民的精神の鼓舞に力め、ウカルヘルム・ファン・フンボルトの如きは教育行政官として學校教育の改善に盡した。一八一五年に至つて漸く奈翁の毒牙を脱した普魯西は、一八三〇年には之以前から締結せられて居た關稅同盟と共に獨逸統一の根柢を形成し、降つて一八六六年には奧地利と、一八七〇年には佛蘭西と戰つて大に國威を發揚したのである。

前世紀の後半は、ゲエテ、シルレル、ジャンパウル其の他多くの藝術家が出現して、萬丈の氣焰を吐いた時であつた。藝術を力説する思想は、獨りシルレルに限られた譯ではなく、當時の文學者哲學者の均しく鼓吹した所であり、隨つて十九世紀の初葉に入つても、就中「浪漫派」と稱せらるゝ一派の人達は、所謂「美的生活」に憧憬れて、熱心に藝術と藝術家とを崇拜し、彼等の生活を直接に藝術品とし詩として生活しようと希つた。獨逸の浪漫派は、元來一切の想像と感情とを鄙み、理性を過重した啓蒙主義の反動として起つたもので、其の理想は藝術と人生との一致、精神と自然との融合である。この理論はフィヒテの哲學に因るものと稱せられて居るけれども、それは誤解であつて、浪漫派の人士はフィヒテの哲學の餘味を採つて、單に自分の理論の標識としたのに過ぎない。彼等は天才を賞揚し無意識的創作を尊び、現實を輕んじて神秘的情緒に沈溺し、明瞭を賤んで朦朧夢想を貴しと

した。故に其の創作の多くは藝術的渾成を缺いただけれども、人間をして内部的生命の觀察に向はしめ、自然に對する感情を深くし、想像を豊富にし、主觀の價值を高うする上に貢獻した。この浪漫派の豫言者とも稱せらるゝノッパリス（一七七二—一八〇一）の作物——Heinrich v. Ofterdingen——の如きは、浪漫派の特色を含み、篇中の一詩人が諸國を歴遊して、其の精神を修養する趣向は、頗ぶるゲエテの「ギルヘルム・マイスター」に感化せられて居る様である。ノッパリスの人生觀は中古派思想の醇なものであつて、倫理と宗教と詩とは相一致し、世界は詩であつて、世界精神は大なる詩である。詩は一切を包括し、詩的に非ざるものは凡て空であると見る。殊に彼は肉體及び精神共に完全無缺であつて、私に接する人々は、何れも深刻なるインブレスシオンを感じせしめられるといふ程の人格者であつた。有名なシュライエルマッヘルの如き、彼を激賞して「神聖なる青年」と呼んだ。實に人生は彼に對しては一篇の詩として現はれ、自然は常に彼れの熱愛の感情に融化されて居たのである。而してノッパリスに於ける藝術と道徳との一致の理想は、またフリードリッヒ・シュレエゲル（一七七二—一八二九）の小説「ルチンデ」に現はれて居る。彼は此の作に於て詩を以て人生を改革し、道徳的理想を以て詩を以て之に代へようと企てゝ居る。シュレエゲルはゲエテの「ウカルヘルム・マイスター」を神聖なる作物とし、藝術教育の教材として推賞し、「この浪漫的理想の粹たる詩は、批評すべからずして翫賞すべきものである」と言つて居る。當時に於けるゲエテの小説の影響する所を察すべきである。

一八三〇年の七月革命は、獨逸青年の自由思想を動かし、政治的運動は引いて藝術運動と化した。「少獨逸派」(Das junge Deutschland)と呼ばれるものは之であつて、ハイネの諷刺文とビュルネの政治論とを先驅とし、グッ

ツコウ等が中心となり、藝術を以て社會改革の手段となし、政治を以て詩文の對象となし、詩神を去つて所謂「世紀の運命」を詮宣する「時代精神」なるものに事へたのである。此の兩暗語は固より曖昧なものであつたけれども、當時の青年を驅つて擾亂の渦中に投ぜしむるに足つたのである。グツコウ（一八一——一八八四）の處女作「マハ・ゲル」一名神物語は、今日に於ても尙讀むべき價値ある作品であつて、西藏の物語を假りて、「過去の僞神は眞の人情に依つて忘却せらるべきである」といふ思想を説き、藝術家は宗教の改革家でなければならぬと教へて居る。インメルマン（一七九六——一八七〇）は少獨逸派の人ではないけれども、均しく時勢に慍らず、深く理想と現實との衝突を感じた作家で、戯曲に於ては浪漫派に屬したけれども、小説に於ては少獨逸派の趨向に接近して居る。當代の醜をあばき邪を撃つと稱して、貴族富豪に反對せる諷刺厭世の傾向のある彼の作物に「Bonni」即ち「亞流」といふのがある。其の様式はゲエテの「キルヘルム・マイスター」の影響を受けて居る。なほ「ミンヒハウゼン」といふ小説は、社會の非理罪惡を指摘し、之を痛撃すると共に、閒話としてウエスファレン農民の物語を挟み、其の素朴強健なる生活を描寫し、以て腐敗せる當代社會の光景に對せしめた。此の閒話は大に賞讃を博し、別に一卷として世に行はれ、輓近村落物語（Dorfschilderung）の嚆矢として不巧の詩美を有するものである。

斯様に十九世紀前半の獨逸の文藝は彼のゲエテ、ジャンパウル等の後を受けて、浪漫派となり、少獨逸派となり、更に英佛の翻譯文藝の影響を受けて、漸次實世間に近接し來り、所謂社會生活の反映たるの實を擧げようとした。これ獨逸人の現實觀の一開展である。斯くて人心は現時世態の藝術化を希望するの念を増し、彼の光華

燦爛たる古典派、浪漫派の文藝を喜ばぬやうになり、詩人もまた徒らに過去の光榮のみを謳歌するのは現在に忠なる所以に非ざるを覺り、世運は回轉して一八四八年代に至り、藝術革命の機は漸く熟し、遂に「寫實主義」（Realismus）が起り、古典派及び浪漫派の光榮ある世紀の幕は閉ぢられた。而も一八四九年代の政治的事件は、民衆の興味を國家社會の方面に集め、徒らに美を愛し藝術に耽るが如きは、活氣ある國民の屑しとしない所であるといふ思想を喚起したのである。

藝術上の寫實主義は、興起の始めに於ては甚だ未熟偏頗であつたけれども、陳套な趣向及び修辭的價値のみを有する藝術を掃蕩して、清新なる現實的趣味を涵養し、眞の詩的創作に對する希望を起し、且つ之を強からしめる功があつた。其の興起に際しては、人生の新要求、新感情、新現象に最もよく適應せる詩を作らなうがため、藝術家といはず、民衆といはず、一般氣運を代表したものであつて、彼の一詩社一流派の提唱に係るものではないから、能く詩の要約に従つて脱線せず、最も健全な發達を遂げたのである。故に此の健全なりリアリズムの代表者は詩を以て現實の完全な表現としようとす、空想の世界を捨て、現實世界を醇化し、日常平凡の瑣事と雖も能く之を採擇し詩化し、現實に忠なるが爲に敢て詩の本質を失ふことはなかつた。後代第二の寫實派、即ち自然派が現はれ、詩を以て現實の記録、若くは甚だしい現實の醜化を導いてから、遂に象徴派や新浪漫派なきの反動的現象が起るに至つたのである。

ヤコブ・クリムは、「詩は言語の美に包まれた純粹なる人生それ自身である」と言つて居るが、之は健全なる寫實派の眞髓を捉へた詞である。而して寫實派の藝術觀を實現するに最も適當な詩形は、戯曲及び小説であつて、

叙情詩の如きは此の二者に譲らざるを得ない。就中最も完全に最も豊富に人生を反映するものは、何れかといへば小説であるから、従つて小説が近世に入つて全盛の域に達した。獨逸リアリズムの作家として當時有名であつたのはクライタク、シュビールハアゲン、ラアベ、ケルレル、ハイゼ等の作家である。

獨逸の浪漫主義と美的道德

藝術上の浪漫主義は、獨逸に於ては必然的に古典主義から發達したものであつて、主觀の感情と自由な想像とを重視するものである。即ち客觀よりは主觀、統一よりは多様、劃一よりは個性を主とする傾向は随分濃厚といふべきであらう。藝術教育といふ言葉には、教育的影響が藝術的作用の一種であるといふ見解と、藝術的觀察、享樂、創作を目的として居るものゝ外に、倫理的意義に於ける藝術教育がある。倫理的意味に於ける藝術教育に於ては、美的道德の修養、即ち藝術的生活情緒と生活構成との修養である。見られて居るが、斯種の教育思想は、この浪漫主義の藝術を通じて流れて居る所のものである。

嚴密にいへば、この美的道德には三通りの類型がある。(一)道德的事實なるものが、審美的事實、藝術的事實、純美的事實の朦朧神秘な統一性と一致するといふ見解と、(二)之に類似せるものに、道德的態度の極致を審美的人生相に發見し、又審美的人生相を道德的態度の本質的方面と觀る見解と、(三)反對に道德的態度を審美的態度の或定まつた種類として觀るのである。此の三つの場合に於ては、道德的事實は審美的事實の方法で了解せられるのである。

〔第一類型〕 善と美との朦朧にして神秘的な統一は、獨逸の初代浪漫主義の思想に見ることが出来る。ノッパリスの傑作、「ハインリッヒ・フォン・オフテルディングン」(Heinrich v. Ofterdingen)は斷篇的ではあるけれども

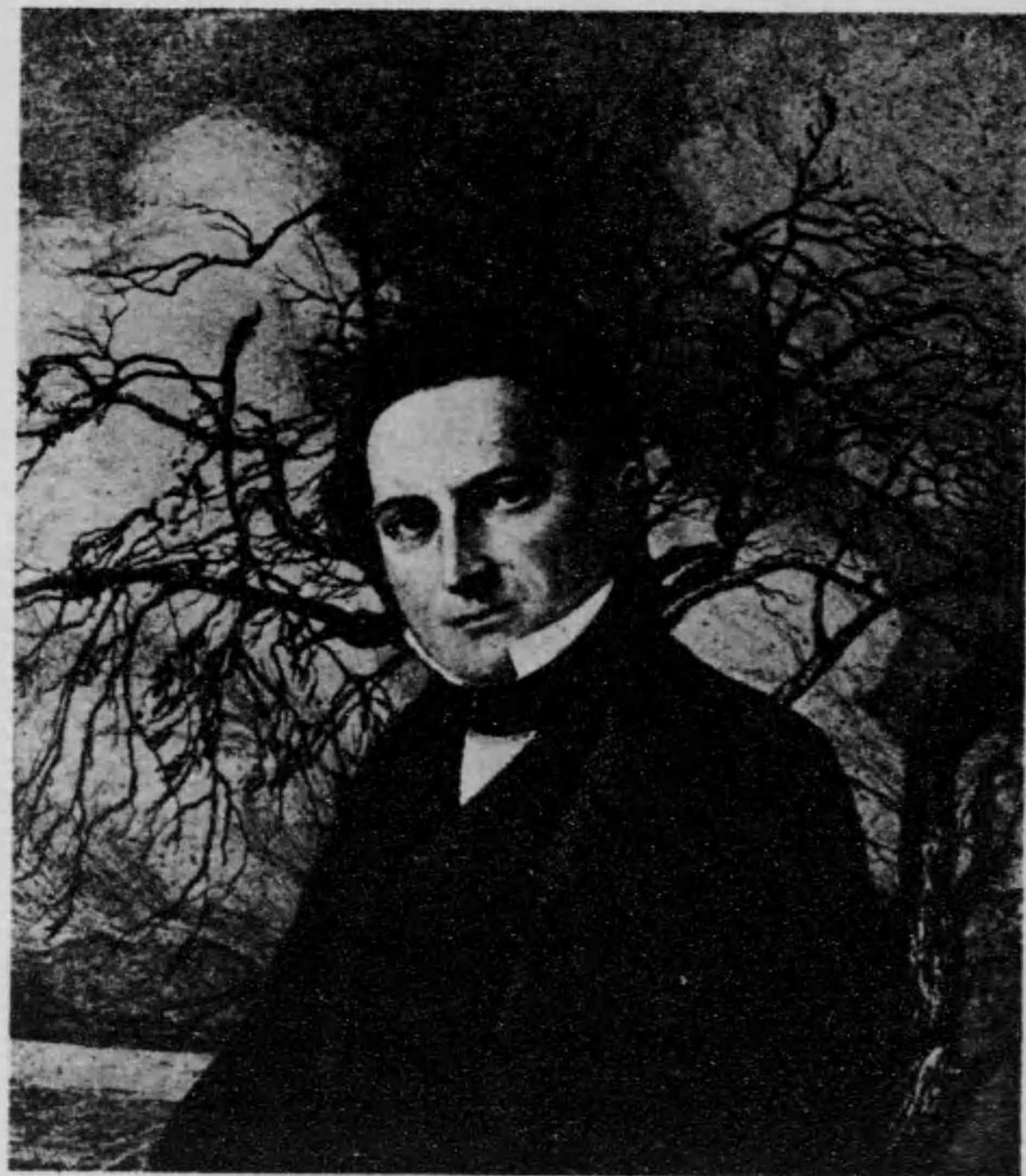
浪漫的な作家の人生觀が現はれて居る。即ち道德と藝術及び宗教は相一致し、世界は藝術であつて世界精神は大なる藝術家である。藝術は一切を包括して居る。ノッパリスの藝術と道德との一致の理想はまたフリードリッヒ・シュレーゲルの小説「ルチンデ」(Lucinde)に現はれて居る。彼は藝術を以て人生を改造し、善に代ふるに美の理想を以てしようとして居る。善と美、道德と藝術との神秘的統一は此の浪漫派思想の外に、ストラウム・ウント・ドランク時代の倫理學にも見ることが出来る。即ち當代の倫理學も亦斯の方面の建設へ傾いたのである。結局此の美の中に於ける善の飛躍はプラトウの思想に歸着する。次に英のシャッヅベリーも亦善に美の印象を——而して道德的に圓滿な人間に藝術家の印象を與へて居る。而して此のシャッヅベリーの道德的に高尚な美の憧憬は、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、ウォルター・クレーンの鼓吹や覺醒や發露やを一貫して居る精神で想起される。

〔第二類型〕 道德的態度の極致を審美的人生相に發見し、また審美的人生相を道德的態度の本質的方面と見る思想は、前章に論じたシルレルが之を代表して居る。即ちシルレルは彼れの成熟時代に二様に叙述して居る。時としては、例へば冥想詩「藝術家」並に「書翰文體美育論」の結論に於て、彼は藝術的生活は道德的事實の圓極であるとして頌揚して居る。之と對して他の時には美的道德を人間の事實の最高級であると説述しないで、美的道德に高尚な意義を歸して満足して居るのである。中年に於けるゲエテや、ウィルヘルム・フォン・フンボルトも之に數へて宜しい。フンボルトの審美的倫理學に就ては、メタ・ヒュブラーの「フンボルトの人生觀に於ける個性の意義」といふ小冊子や、或はエドワルド・スブランゲルの名著「フンボルトと人道觀念」の中で十分に左様に論じてある。

〔第三類型〕^① 道德的態度を審美的態度の或定つた種類と観する思想は、彼のヘルバルトが明かに之を代表して居る。教育學の體系中、最も根本的に審美的倫理學上に基くものはヘルバルトの思想であるが、彼は道德的事實が總じて無條件に興味判断に基くといふ考へである。詳細は次項に論述しようと思ふ。

シルレルは既に論じた様に「美的教育」なる言句すら使用して居る。而して彼は此の言句を藝術的享樂や藝術家的專業の教育と解せずして、藝術家の人間性から生じた教育と解したのである。勿論彼は十分に藝術の教育的効力を論じて居るが、其の際、藝術的享樂や創作に目的として着目せず、反つて美や藝術が勤務すべき人間の道德的理性的態度、即ち完全人間性に目的として着眼して居る。美的形象は彼に對しては道德的修養の方便である。シャッツベリは一の固有な教育説を立てなかつたが、それでも世人は彼に特有な教育理想を發見することが出来る。それは即ち眞の人間は藝術的調和に於て成立するといふ信念である。少し趣は異つて居るけれども、彼のフレイベルの教育思想の如きも類似の傾向があると思ふのである。

ヘルバルトの思想 教育學を科學的に建設し、其の後繼者に依つて世界の教育思想界を風靡したものはヘルバルト（一七七六—一八四一）であるが、併し吾人は今彼の浩瀚な教育學的貢獻を頌揚しようとするのではなく、實に彼れの思想に流れて居た本質的な藝術教育の思想を看取せんとするのである。ヘルバルトの教育説は、最も根本的に審美的倫理學に根柢をおいて居るのであるが、併し夫れは、彼れの晩年の教育學的著述や、教育學的諸講義よりも、彼れの青年時代に於ける教育學の敘述、即ち「教育學概論」に於て、彼れの倫理學の審美的精神が多く現はれて居る。ヘルバルトの論文「教育の主な事業としての世界の美的描述に就て」の中に於ては、そ



HERBART

れが一層多く現はれて居る。けれども彼れの教育説の最も美妙優雅の一を形成せる此の審美的根本調は、遺憾ながら其の後のヘルバルト派の教育學的思想では消失して仕舞つた。併し識者は眼光紙背に徹るの能を以て、彼れの後繼者の教育學が想像せしめる以上に、豊富な、精緻な、生々とした何物かを直接彼から汲み取らねばならぬ。藝術と道徳との關係、これ位繰返して論ぜられた問題はない。古くはプラトウから近くはフェルケルトに至るまで——而も満足な解釋は一つもない。シルレルの如きは、藝術家を支配する道徳的精神を聖らかに想起せしめる必要がある場合には、

「人類の威嚴は

卿等の腕に委ねられぬ、

護れやそれを」(藝術家)

此の言葉を幾千回繰返したか知れない。ヘルバルトは、既に一言したやうに、審美的態度の或一定の種類として道徳的態度を見て居る。彼に於ける美的快感は、比較的一般的の態度であつて、ある至つて單純な意志關係に對する快感、即ち道徳的快感が特に著しい種類として之に屬すると思はるゝ。彼は道徳的事實の總てを條件なしに趣味判斷に基かしめ、倫理學を以て美學の中に隸屬せしめたのである。

ヘルバルトの説く所では、一般に繪畫、彫刻、音樂などの藝術には、別に其の理由を問はないで、直接に美醜を感じらるゝ單純な關係がある。同様に道徳上に於ても、又夫れ自ら善たり惡たる意志の單純な關係がある。即ち吾人は事物の關係に接し、或物は之を美と判斷し、或物は之を醜と判斷するのと均しく、意志の關係に就ても

或は善といひ或は悪といふのであるが、前者は之を美的判断と呼び、後者は之を道徳的判断と稱する。而して甲の場合に於ては、吾人は物の時空上の形式的關係を評價の對象となし、この場合に於ては、同じく意志其の者の形式的關係を對象とするのである。即ち事物の感覺的性質及び吾人の意志する事象の實質を捨て、何れも單に其の形式的方面を取るのである。斯くてヘルバルトは道徳的判斷を美的判斷の或定つた種類と觀じ、倫理學を以て、何等の條件なしに、吾人に快不快を感じしむる意志の形式的關係を論ずる學とし、美學の一部たらしめたのである。這個の關係の要約は、ヘルバルトの所謂内的自由、完全、好意、正義、報償なきの五個の倫理的概念、即ち「五道念」であつて、是等の道徳的觀念なるものが道徳的品性の根柢を築くものであり、其の道徳的品性の陶冶がヘルバルトの教育の大理想であつたから、彼れの教育思想に於ては美的判断力の陶冶、即ち藝術教育なるものは非常に重要な意義を有つて居たのである。

美的陶冶と品性陶冶との關係、ヘルバルトに於ては、美と善とはプラトウやシルレルの思想と均しく、非常に密接に抱合して居るのである。彼が「教育學概論」の中で教育作用を説明して居る所に依れば、教育家を以て、優しく温順に併し、同時に力強く印象を與ふる所の或藝術家に見做し、兒童的個性の享樂を快意的に形成する者に爲す努力を説明して居る。のみならず、ヘルバルトの夙時の著述、「ベストロッチの教授法の批評の立脚地に就て」に依れば、教育は人間を教化し構成し、人間に正當な典型を與へ、其の結果、人間が快樂なる様にする藝術である。「教育の主なる事業としての世界の美的描述に就て」の論文は、教育の目的たる品性陶冶の爲に書かれたのであつた。繪畫、音樂等の藝術や、調和關係の美的判断は、聽て生活秩序を陶冶するものであつた。斯界の美的叙述

に依つて藝術的理解と藝術的陶冶とをなさしめ、法則の純倫理的考慮を養ふことは、欲望を喚起し制限する訓練に比して、比較にならぬ程大なる力を有して居るとヘルバルトは言つて居る。尤も藝術的陶冶の品性開發に資する方面のみを見て、藝術的陶冶其の物の領域を明瞭にして居ないのは缺點であるけれども、藝術的陶冶の價値の大なるを認めたるは明瞭である。彼は教育の全目的を達成する上に、教授の最も大切なるが如くに、藝術的陶冶も亦單なる管理や訓練以上の力を持つて居ると見た。一見藝術教育に多く論及して居ない様に見えるが、彼が「シ、タイゲルに宛てた報告書」中には藝術教育を説き「教育學概論」には綜合的趣味陶冶は兒童の想像に於ける美を於立せしめると論じ、「直觀初步」中には倫理的法則と美的法則とが全教育を支配すると言つて居る。世の識者は、ヘルバルトの教育思想に流れて居た最も優美な、藝術教育思想の發展を閉却してはならない。思ふに道徳的的美見解が何等かの形で教育學の基礎にさるゝならば、正しく審美的、或は恐らく之よりも審美的と謂はるべき教育學が存するのである。其の時は、教育は美的道徳から導かれる一作用である。斯かる教育學は全然藝術的理解や創作の教育に就て云々すべきものではなく、審美的精神から成就さるべきである。

グララーゼルの思想 グララーゼル(一七六六—一八四一)はジャンバウルの友達であつたが、從來の教育學が非科學であつて、唯經驗的事實及び實地的規定の混合に過ぎなかつたのを見て、之を科學的に構成しようとした。彼は世界を以て神の體と見做し、個々の生活は皆此の根源的生活に基づくものであつて、此の根源的生活から生が發動する場合には、第一階級に於ては廣延及び親和となり、第二階級に於ては營養及び保存に關する衝動となり、第三階級に於ては自治力となつて發する。人間は最後の第三階級の本體であつて、内存の生活原則を自得する能

と、其の進動に方向と節制とを與ふる力とを有して居る。人間が自己の生活關係を知り、其の衝動を自覺するのは、其の理性の働に歸する。内に信ずる所に従つて自治するのは、自由と稱すべきものである。理性と自由とは人間所有の二根本勢力であるけれども、親密に依從するが爲に畢竟一の能力として見られ、理性的衝動として人性の本體をなすものと認めることが出来る。而して前言の根源的生活から發する一切のものは其の目的を有して居るが、人間は自由なる心情と行動とに依つて、自己の生活に於て神の寫象を表現すべきものである。換言すれば、人間は其の動物的性質に對して、等しく天賦の神性を其の生活に於て表示しなければならぬ。變化は人間存在の條件であつて、實に其の目的である。人間は、人類界及び其の生活上の關係に於て、神が、神の世界に於けるが如くにならなければならない。

グラールゼルは斯様な根本思想の下に、教育の最高原理をば、「發育する人間」の理念に求め、發育する人間が自己の生活を、自己の力によつて、其の目的に従つて導き得るまでに成熟せしめる爲に、成熟者の補助を必要とすると言つて居る。然らば其の目的とは何であるか、人間教育の目的は變化、即ち神聖なる生活にある。而して人間生活の根本性は自由なる行爲及び作造にあるから、眞の教育は人間たる能力の發達を要求し、人間をして自力に依つて其の生活、即ち存在を變化せしめんとするにある。人間生活は、(一)生活を定立し生存を保持する衝動として見られ、(二)生活が依つて以て規矩とする形式として見られる。固より此の兩方面は根本的に相異はないけれども、吾人は通常前者を自然的(身體的)生活といひ、後者を道德的生活と稱する。身體の熟練及び敏活は堪能と稱せられ、道德的生活の凡ゆる困難なる關係に於て、能く其の目的を追究する程、能く心の練られた狀態を叙

智と稱する。この兩者は共に教育の目的であり、而も其の基礎たるものは理性である。理性は生活を其の本質及び形式に於て直觀し、以て人間生活の條件として堪能及び睿智の條件たるものを決定せんとする能力である。故に教育の第三の目的は理性的能力の發揚にありといはねばならぬ。然るに此の人生の三要件の活動を考へる際には、此の活動の關係する多様な客觀的狀態を見ざるを得ない。完全なる活動は、其の能く多様な狀態に適合し、斯くして主觀的人生と客觀的事物との調和の生ずる時に始めて見られる。グラールゼルは斯様な根柢に立つて教育の種類を身體的陶冶、知的陶冶、道德的陶冶及び美的陶冶の四つに分ち、是等を相互に調和的に行ふべきものと言つて居る。

グラールゼルは道德的陶冶の目的をば、道德的生活の力と術との體得にありとして居る。爲之、被教育者は生活の形式、即ち人類的存在の形式に關する活潑な知覺を得なければならぬ。人類的存在の形式は、之を神的存在の形式に於てのみ認め得る。吾人はこの根據から、眞、正義、愛、美の四形式を定める。而して神的存在の第一形式たる眞は、凡ての人間の道德及び幸福の基礎である。又眞に對する厚い正しい情は人心の最も美しい點である。故に教育は、第一に眞に對する精神を益々鋭敏ならしめる事に努めねばならぬ。神的存在の第二形式たる正義に導く教育は、眞理の教育に次で生じ、之と共に行はるべきものである。道德及び宗教は此の基礎があつて發生する。神的存在の第三形式たる愛は、教育の第三の目的である。正義は公共繁榮の基礎であり、愛は公共幸福の根據である。而して愛情を養ふには、人を凡て神の子として見、人類を同一族として見るに至らしめねばならぬ。神的存在の第四形式たる美は、絶對の美、即ち根始的美であつて、其の理念は人間の深奥な心底に存し、各種の

有限的藝術品の根源たるものである。此の藝術的作品は、それが理念に近づけば近づく程、益々吾人を敬服せしめ、いふ可らざる喜悅を感じしめる。何となれば、吾人は之に於て神靈の實現を見るからである。美は實に神的生活の統合的形式であつて、従つて人間存在の完全なる規範的形式であり、眞の人間教育の最高目的である。グラーゼルは斯様に論じて、藝術教育をば人間教育の最高形式として頌揚し、人間にして眞實正義にして慈愛心厚く、且つ信心が深かつても、美、雄大及び高尚なるものに對する精神を缺ぐ人は、決して吾人の満足の對象たり、喜悅的敬服及び愛の對象たり、また模範の對象となすに足らないものである。何となれば、最上最美の神的形式は彼に於て認めることが出来ないからであると論じて居る。

教育の方法及び其の條件に關して、グラーゼルの意見を徵するに、教育術とは、人をして其の成熟した時、其の目的に適ふ個人たらしむる如くに之を導き、以て其の天性の調和的發展を助成する事を、純粹な興味を以て行ふ能力を指すものである。而して此の教育術は眞、正義、愛の三條件に依從するを要する。眞は兒童生徒を正しく了解し、其の個性に順應せる目的を明瞭にする事に於て之を見、正義は適當な育成力を多方面に計量する事に於て之を見、愛は陶冶せらるゝ者の爲に献身する點に於て之を認め得る。第一の場合には人を知り、兒童を知ることが必要であり、第二の場合には生活の外部的關係を其の目的に利用するに足る鋭敏なる精神を要し、第三の場合には主として美的精神を要し、詩歌音楽に依る藝術的陶冶を貴重する。而して教授の材料に就ては、グラーゼルは之を實在的方面と理想的方面とに區別して居る。(一)實在的方面——は人間及び自然に關する知識、即ち人間の身體や精神や、祖國及び世界に關する歴史や、自然哲學及び自然科學などに關する知識を授ける。(二)理想

的方面——は神的生活の形式に關する知識、即ち(A)人の眞實心養成を目的とする一般的及び永久的眞理の教、(B)公民道徳養成を目的とし、外的生活上重要な正義を明かにする教、(C)神聖な心情の養成を目的として加ふる愛の教、(D)人間存在の希望すべき形式を生活上に表現せしめ、以て一般の人間の幸福な生活を目的として加ふる美の教として居る。教案に就ては、グラーゼルは貴族的階級に對するものと、平民的階級に對するものとを區別して居るが、いま平民教育に關する教案中、特に理想的方面に屬するものを擧げると、(A)眞理——信仰上の教(汝は何たるか、汝は何たるべきか、汝は何たるに至るか、世界は如何に汝に對するか、余と汝とは根源體に對し如何に關係するか)。(B)正義——法律及び憲法上の教。(C)愛——宗教上の務に關する教、基督教義、(D)美——寺院に於ける宗教上の作造、圖畫及び音樂の實際的練習、交際上の禮儀に關する教。以上グラーゼルの科學的教育説の主要であるが、彼が美を以て神的生活の統合的形式と見做し、絶對美の教育を人間最高の教育と見做した事が察せられる。

フレーベルの思想 吾人はフレーベル(一七八一—一八五二)の教育論に接する時、其の全體が美的形式を採つて居るやうに思ふ。彼れの人間論を見ると藝術論たるの感じがする。彼はヘルバルト同じくベストロッチーの思想を受けて立ち、多方的調和的發展を力説した。即ち歴史的に人間性の發達と徑路とを考察し、其の世界觀に於て多様(自然)と、統一(神)と、個性(人)とを區別し、是等の調和的發展を説いたのである。この三者は彼が教育法の發出點で、恩物の如きも亦この三原理に因つて立案せられたのであつた。

フレーベルは自然界及び人間心の根柢として生活といふ概念を置いて居る。生活の概念は、自然界に於ては多

様の現象となり、最も直観し易い形として現はれるから、何人も自然觀察に依つて容易に之を把握するやうになる。而して生活の概念の標示となるものは、「多様の中に見る統一」といふ點にある。凡て生活する體は、數多の個々の部分から成立し、多様の現象を示すけれども、是等の部分は、内部的統一の爲に一括せられ、多様の現象には一貫の理がある。故に統一は生活の根據であつて、現象は之から發し、之によつて維持せられるものである。フレイベルは此の統一なるものを神と見做して居るのであるから、隨つて萬物は神から發し、神に依つてのみ存立し、たゞ神のみに依つて生活する。神は總てのものに對し、總てのものを支配する。斯様に總ての物に於て活動する神靈なるものは、即ち其の物の本體である。各物の天命と職能とは此の本體を自己に於て發展し、表現せしめ、神を外部的過程的の物に於て表示し、發現せしむるにある。斯様にして自然は最早冷淡、沈黙及び混雜な死物ではなく、又人間を腐敗墮落に傾かしめるものでもない。實に神の發顯として人生の眞摯誠實な模範となり、人間の感能及び思考の上に於て、又其の行動の上に於ても、之を指導するに足るものであると見做した。自然は神の發現であるから、隨つて兩者は決して相反せず、生活もまた其の自己生活たると、他人の生活たると、過去の生活たると、現在の生活たると、個人生活たると家族、國民、國家生活たるとを問はず——總て一の連關統一したる全體である。永久發展の法則に依つて支配せらるゝものである。

フレイベルは又人間の地位を論じて居る。彼れの見解によれば、人生は多様に於ける最も高尚な現象である。人間には最も有力な、最も多くの法則が現はれて居る。即ち人間には神靈を自己及び自己の生活に於て表現するに至らしむべき最高稟賦及び最高能力が存在して居る。人間の天命は、人間の本體を、自己の生活に於て十分

に活現するにある。人間の教育とは、神靈が人間に發育するのを助成する義に外ならない。換言すれば自覺の狀態に達して考察し、理會する本體として人間を取扱ひ、以て其の内部の法則、即ち神靈なるものを、意識的に、自治力を以て誤りなく表現するに至るまで誘導し、且つ此の狀態に到達する道程、及び方法を明瞭にするのが教育である。教育は人間をして自ら明瞭に自覺し、自然と和し、神と一致せしむる様に導くことが肝要である。隨つて又人間を自己及び他人に就ての認識を得、神及び自然を知る地位に到達せしめ、之に依つて純潔神聖なる生活に進めしむべきものである。要するにフレイベルの教育觀は、有限に於て無限を表明し、一時的のものに於て永遠を示し、現世に天國を現出せしめ、人間に於て、又人間に依つて神聖なるものゝ現示を期待し、其の本體たる神靈を諸方面より育成し、之を人間生活に於て顯現せしめんとする點にある。即ち「多様の統一」をば個性に應じて美的に表現せしめんとする一種の藝術觀であるのである。

フレイベルは實に人間を、一方よりは自然の子、一方よりは神の子として考へ、神及び自然の子としての人間の運命を、神と自然、天國と現世、無限と有限とを一致及び調和の狀態——即ち藝術的——に表明するにありとし、物に於ける統一を完全に顯はすには、其の物の多様な點を十分に養成することを要する。時と所とに於ける個々の現象の多様な伴れ、吾人は益々能く統一の著しい發現を覺知し得る。故に人間に於ても、内存する統一を完全に、成るべく多様に發現せしむべきである。教育は萬物に依つて發展し、凡ゆる實在、生存、造物者、造物、神及び自然の存する所に必ず支配なる法則を求め、之に依つて人を最も特殊の性に於て又最も固有の人格に於て發展せしむべきものである。是實にフレイベルの根本思想である。神と自然と人類は、即ち三大要素

範圍と見られ、其の總ての働は相互に能く調和し、且つ發展及び陶冶の法則と一致して、兒童の上に、其の誕生時より多大の影響を及ぼすものとせられ、教育は其の一を偏重せず、何れに傾くこともなくして始めて其の目的に達するを得るものと見做されたのである。

フレーベルが幼稚園教育法として兒童の遊戯を重視したことは周知の事實である。彼のシルレルが哲學的に藝術衝動と遊戯衝動との關係を論じ、遊戯は一種の藝術である。藝術は遊戯の發達したものである、「遊戯して居る時が眞の人間である」と言つて、遊戯の價値を非常に重視した事は既に論じた所であるが、彼のスペンサーやグロース等も亦藝術は遊戯から發達したといふ説を立て、居る。ナトルプの如きも、或深い意味に於て、藝術即ち遊戯説を採り、「藝術は遊戯である、而も眞摯なる遊戯である。其れは意識され、欲求された假裝であるけれども、疑ひもなく一種の眞實である」と。遊戯の教育的價値や、藝術にまでの發達を論ずるのは本章の目的ではないから省略するが、フレーベルは此の衝動が作造の働となつて發動することを認め、即ち兒童が歌ひ、描き、或は地を掘り、穴を穿ち、板を以て家の模型を作り、又粘土を捏ねて種々の物體を模造するのは、これ作業と藝術活動への道であると觀じ、種々の恩物を案出して與へたことは、彼が當時幼稚園保育に成功した程度より以上に、此の教育大思想家の暗示をば、吾人は深く考慮すべきであると思ふ。

佛蘭西の浪漫主義に就て 大革命に依つて政治、宗教、法律、文學、技藝なきの凡ゆる社會的文化的現象を破壊し、烏有に歸せしめた佛蘭西は、今世紀の始め、大奈翁に依つて一時歐洲を風靡したが、夫れは餘り長く續かなかつた。革命の產物たる自由民主主義は、一八一五年頃迄の奈翁の獨裁政治の間にも消滅せず、而も政府

の専制主義と人民の自由主義とは、本世紀に於て屢々衝突を見、一八三〇年シャル十世の議會解散は七月革命を起し、王室と人民とは益々隔絶し、ルイ・ブラン等の社會黨は此の間に勃興したのである。斯くて一八四八年には再び二月革命を現出し、王は英國に出奔するに至つた。茲に一時は共和政治を見たけれども、一八五二年代から又ナポレオン三世の帝政となり、帝は獨逸との折衝に失敗して普佛戰爭の大敗を演じ、斯くて帝政は第三共和政治に變つたのである。

斯様に佛蘭西に於ては、大革命後屍山血河の修羅場を現出し勝ちであつたので、藝術的文化的發展を遮斷し、人々は何れも太平の春を祝する迄、殆んき獨逸より一時代の後に非ざれば、其の恩恵に浴することが出来なかつたのである。蓋し之は佛蘭西の國民精神の墮落に因るのではなく、全く彼等が藝術的文化に心力を傾注する時間を持しなかつたのに外ならない。故に一時に佛蘭西文藝は慘澹たる狀況に陥り、多年苦悶呻吟せる病者の氣力恢復に焦慮するが如く、政府の種々なる復興策も何等の効がなかつた。偶々ゲエテのブアウストの如き不朽の傑作に接する者あるも、疑惑百出し、到底完全なる解釋に到達せるものなく、思想は全然萎靡し、戯曲も詩文も全く其の生命を失つたのである。されば佛蘭西の兒童は、幼少の時から陣太鼓の響の裡に養成せられ、何れも先天的に殺人者たることを自覺せざる者とはなく、幸か不幸か、徵兵の選に漏れた者に對しても、藝術的文化は何等の知的満足をも與へなかつたのである。

併し時は遂に來た。佛蘭西文藝復興は文藝好きなブルボン王家の復興と、外國文學の輸入とに刺戟せられて、枯渴廢類の域から擡頭し出した。數十年の間、内亂外寇の爲に有ゆる精力と活氣とを消盡した佛蘭西國民も、平

和と自由の天地に逍遙し得るに至り、思想は頗る復活し、十七世紀の昔テオフォール・ド・ヴァリアンの豫言せる、「其の時代の人の爲に筆を取れ」といふ格言を實現し、新しい理想、新しい主義を、新しい國語を以て表現し、其の時代の人々を覺醒するに至つた。殊にコントが「實證哲學」(一八四〇—四二)を出し、社會學の體系を定め、歴史の年代的區分法に刷新を加ふるに及び、文化の復興は隆々として進み、文藝方面に於ける浪漫派の運動も其の活氣を増して來たのである。當代青年の熱狂的要求は、純粹な想像的方面に向ひ、主として詩歌の廣漠な境域を開拓しようとした。シャトープリアン(一七六八—一八四七)が此の要求に應じて、詩的藝術及び詩的想像を紹介するに及び、アルフレッド・ド・ヴキニ、ラマルチン等の如き文豪が出た。併し一般民衆は是等の眞正な詩人を理解し、賞讃することが十分出來なかつた。是等の詩人と相前後して、世界の大文豪ヴィクトル・ユウゴー(一八〇二—一八五五)が現はれ、茲に佛蘭西文學の黄金時代が到來したのである。彼は一八二七年傑作「クロンウエル」を出してから以後殆ど七十年間、佛蘭西文壇の霸王として活動し、詩に戯曲に小説に、過去現在未來の有ゆる事象を捉へて詩化し、絶大の精力を活現したのである。「クロンウエル」に掲げられた序文は、世界萬業に向ふ文學的革命的宣言であつたので、此の書に依つてトラヂデキエは發達してドラマとなり、抽象的性格の人物は、血と肉とを備へた人間になり、理想は現實に進化したのである。ユウゴーが文壇に陳套視せらるゝ頃、ミューゼーが之に代つて文壇の明星となり、若冠の身を以て能く當時の弊風たる偏知偏理の傾向に反抗し、浪漫的憂愁を、調和せる格調を以て表現したのである。ユウゴー、ラマルチン、ミューゼーは、佛蘭西浪漫派の權威として、狹隘なる形式を打破し、其の天地を廣大にし、詩形に自由の發達を與へたが、降つては一般社會も亦彼等の藝術

を熱狂的に歡迎するに至つたのである。

一體浪漫主義は其の始め技巧の自由を宣言するに止まり、藝術家は何れも思想と感情との自由を認め、其の發表を自由な六法によつたけれども、本世紀に及んで更に戀愛の自由を附加するに至つた。彼等は宣言して曰く、「吾人は吾人の精力と、自由と、夢幻と、詩想とを縦に發達せしめねばならない。吾人は吾人の心の中に響く眞の聲に聞かなければならない。又吾人は何れの時代、何れの學派にも屬する所はない。藝術は人類の社會、哲學、政治及び道德と何等共通の點はない。藝術は藝術であつて其の他のものではない」と。ヘンリー・ペランチェーは其の著「時代の精神」に於て、「感情の自由を認むる浪漫主義は、人間の精神に無窮の天を望ましめ、其の中に飛翔するに至る」といつて居る。併し浪漫派が自由に夢幻境に飛翔したる極、現世と民衆と日常生活とに關する理解力を失ふの事實を招致し、批評家は口を揃へて、人間精神の最も美しく、且つ最も危険な作用、即ち想像力の濫用を攻撃するに至り、社會は益々人生に關する非空想的、現實的の表現を要求するに至り、斯くて全歐を動かした浪漫派の運動は高潮の峰を下り、純粹美的愛情及び感情の熱と雄辯の焰とは、絶えざる社會の不安となり、其の性質は實利的、科學萬能の時代精神と一致せざるに至り、流石に全盛を極めた浪漫主義も頽廢の色に包まれ、彼の「寫實主義」(Realismus)及び「自然主義」(Naturalism)が其の勢力を高めて來たのである。これは現實的科學的思想の發達に順應して居る様に思はるゝ。

藝術的文化に關する簡單なる比較

獨逸に於ても佛蘭西に於ても、時代に多少の前後はあるが、凡そ十九世紀の前半を通じて、浪漫的思想が藝術界を風靡した事は一である。いまこれを教育上から考へて見ると、

(一)古典派から發展した獨逸浪漫派の思想中には、美的道德の修養、即ち一種の藝術教育思想が潛流して居た。即ち大ワイマー時代の古典派の驍將ヘルデル、ゲエテ、シルレル等の藝術的的人生觀から流れて汲んだ浪漫派の藝術、即ちノヴァリス、シュレーゲル其の他一般浪漫的作家の藝術的創作に夫れが伺はれる。(二)併し佛蘭西浪漫派の藝術、ラマルチン、ユウゴ、ミューセー等の藝術的創作に組織的企劃的な特種の藝術教化思想の潛流を認めることは——尤も例外はあるが——一寸困難である。勿論此の際吾人は浪漫派の藝術的創作が人間を啓蒙せしめ解脱せしめ、如何に其の思想感情を感化するのに貢献があつたかを問はないのである。(三)獨逸に於ても佛蘭西に於ても、或は他の國々に於ても、浪漫主義は當時の藝術思潮を動かしたはしたが、併し夫れは概して貴族上流社會——藝術家團體は固より——に影響を及ぼしたので、一般民衆に及ぼす影響は極めて微弱であつたのである。(四)從來獨逸に於ては、上中流社會に於て哲學及び藝術趣味が普及し、殊に藝術を學として攻究する傾向を生じ、又國民精神の發揚を教育に依つて高めようとし、又藝術が愛國的熱情の高調に價値あるを覺り、隨つて教育と藝術との關係を學として攻究する傾向があつた。(五)併し佛蘭西は數多の政治的社會的問題に忙殺され、藝術と教育との相關問題なきに關しては、落着いて考へる暇を有しなかつた。けれども藝術的才能運は、獨逸の如く藝術を學として攻究する風が、藝術的創作に對して阻止的影響を及ぼすことは十分明識して居た。

藝術的文化と國民生活との隔絶 藝術的文化が、從來貴族社會に其の命脈を保持した事は各國其の軌を一にした。然るに佛國大革命後の社會的變動は、此の僅少の地盤をも奪はうとした。藝術家は藝術家の特別社會に追ひやられて了つた。浪漫派の運動の如きも、其の聲の大なりしに拘らず、上流社會に於てはいざ知らず、一

般國民の精神生活と交渉する程度は微弱であつた。シャトリアン、ドヴィニ、ラマルチン、併てはユウゴの藝術的作物ですら、當初一般國民は之を理解し賞玩する時と能とを有しなかつた。即ち藝術家は世外に立ち、藝術は當代國民の理解する所とならず、其の生活との間に墻壁が設けられ、國民的藝術として最少の要求すらなし得ない有様であつた。國民の文化的發展に於て、國民生活と眞の藝術との間に、無關心といふ墻壁が設けられたならば、國民の情意生活の萎縮といふ悲しむべき惡結果を生ぜしめる。即ち國民精神の核心を損傷し、國民生活の全幅から比類なき生活力の豊富な源泉を涸らし、多大な活氣と深刻さと熱情とを奪ひ、國民精神の平衡から來る強大な抵抗力を失はしめる。論者は此の社會相、即ち國民生活と藝術との沒交渉から來た結果を描いて、「凡ゆる國民階段に於て趣味は下降し、眼は疲勞し、光澤色彩に對する喜悅のない乾燥無味な社會相」といつて居るが、吾人は寧ろ內的に、其の精神生活の頹廢偏頗を洞察しなければならぬ。而して之は十九世紀の開化特有な、種々なる社會的惡事情に關係した事が多い。借家生活の増加、頻繁なる轉居、自由なる移住、市民の家運の動搖、特別なる勞働者の寄宿所、模倣の増進及び濫造、成り上り者の生活なきは國民的藝術に最も有害な影響を及ぼしたのである。

物質萬能と藝術との關係 一時旺盛を極めた浪漫派の藝術が衰運に傾いて、現實的基調のリアリズム、ナチュラリズムの有勢を極めて來た原因が、大に時代精神、即ち科學的實利的思想の發達に大關係ある様に、藝術的文化の低調、藝術教育思想の頹廢もまた大に科學萬能、實利尊重的時代精神より來たる諸原因に由來する。當時に於ける中流社會の發達は、延いて激烈なる生存競争を惹起し、「金錢は世界に於ける終極の計算」となり、時

人は名譽又は光榮の如き精神的報酬に満足が出来なくなり、デューマ、スーエ等の如き藝術家は、藝術的著作を以て日常唯一の職業となすに至り、金錢が既に社會の神となつた様に、また藝術の全權をも掌握しようとして來た。故に思想は其の活氣と自發力とを喪失し、前に自己發見を以て其の特徴としたポエトリーは、今や全く冷却して水の如く、人生及び其の運命に關する嚴肅な悲劇の如きは、漸次墮落して狂言化し、更に又新聞紙の發達は經濟界の動搖を惹起したと同時に、思想界の動搖を促進し、文學の新しい形式、即ち「續物」(Fait-d'armes)と稱する小説は、實質頗る劣等であつて、單に讀者の好奇心を挑發するに過ぎず、斯様にして眞の藝術は日々商賣の金錢取引の爲に征服せられて、遂には藝術の總ての形式が徒らに過敏な感能を刺戟し、之に淫蕩を勧め、遂には軟弱な性格を征服して、之を沈溺せしむるの外、少しも高尚な目的を有しないやうになり、作家も亦概して社會的快樂、殊に金錢と虚榮とを得るの外、何等の希望を有しない様になつた。佛蘭西のルイ・フィリップ時代前後の如きは、實に斯様な作品と作家とを特徴としたのである。拜金の傾向の發達は、實に藝術的文化に對する一大打撃であつた。藝術は活動力ある天才のインスピレーションに依つて發達するを常とするも、此の時代に於ては物質主義の強大な威壓に依つて、藝術家は其の高い地位から、一般公衆の平準に下らざるを得ない。投機事業に依つて一攫千金の巨利を博するもの、政治的運動に依つて一躍廟堂に座せるものは、其の金錢を如何に消費すべきかに腐心し、常に快樂の種類を研究して止まず、虚榮に憧憬る、婦女、好色の輕薄才子、金錢に渴せる新聞雜誌なきが相率ゐて、其の時代の社會趣味を指導し創設した。斯様な輕薄な時世に何うして偉大な藝術が出現し、又何うして一般人が眞に藝術に接觸する心地にならうか。而も社會の一面に於ては、機械の發明に伴ふ十九世紀

中頃からの産業組織の變更は經濟上に大變動を起し、産業能率の擴張は從來の小工業者、家庭工藝家の生活を危険ならしめ、大工場の發達は労働者と稱する新階級、即ち恰も機械の様に、何等固有の内的創造力を活動させることなしに、無味單調に日常の作業に従事する人間を生んだ。斯様な労働の機械化は、機械文明が人類に與へた賜であつて、人生の禍は之から愈々激しくなつたのである。斯様な機械文明、物質慾の高調、生活不安の時代人が、眞の藝術及び藝術教育の價値を認めず、藝術を閑人の暇仕事とし、従つてスペンサーの如く、藝術教育を無用視する人間が輩出すべきは明瞭である。

自然派藝術の勃興と其の推移 藝術は必ず其の時代、其の社會を反映する。科學的精神が時代思想の基調となり、物質に憧がれ、民主自由を尊ぶ社會には、矢張り夫れを反映した藝術が起る。佛蘭西の文豪ユウゴーが其の傑作、「ミゼラブル」の出版に先立つ數年前、寫實主義の驍將シャンフレエリーに一篇の公開狀を送つて、「十九世紀の文學は唯一の形容語を有して居る。夫れは即ち平民文學と呼ぶべきである」といつた。此の妥當な詞は彼のデューマの徒に依つて熱心に信奉され、實人生の直觀に基いて、之を戯曲及び喜劇に表現せんとする傾向を生じ、同時に、小説も亦社會問題を解決するに其の全力を盡し、従つてまた驚くべき發達をなし、寫實主義は燎原の勢を以て歐洲の藝壇を風靡し、就中此の傾向は佛蘭西に於て旺盛を極め、遂に病理解剖學的傾向を帯びて、其の極、「自然主義」(Naturalism)を生じたのである。

いま其の徑路を考へて見ると、一八五七年に「ボーヴリー夫人」(Madame Bovary)といふ有名な小説が匿名で公刊された。これは人格の解剖及び描寫が極端な寫實主義に依つて居るのであるが、其の後半箇年位にし

てブ・ードーは、其の變態心理學の知識を以て、當時餘命を保つて居た浪漫派の殘徒に一大痛棒を加へた。間もなくブローベル、ゴンクール兄弟が藝壇に現はれ、何れも寫實派の泰斗として愧ぢなかつたけれども、其の描寫法は益々寫實主義の始祖シャンプレーリーの夫れと趣を異にし、一種の特色を發揮して來たのである。而して一八七〇年戦後の問題として、商工業の振興と、實理的根柢に立てる道德の建設が必要となつて來たが、エミールゾラは此の要求に應じて現はれ、佛國藝壇の新派、即ち自然主義の鼻祖となつて、自然力信仰の下に、絶大の創作精力を發揮した。「酒場」(L'Assommoir)「ナナ」(Nana)「陽春」(Germinal)「製作」(Le Travail)「滅落」(Le Débacle)などは、彼れの特色を現はして居るものといはれて居る。

一體此の自然主義は重大な哲學的、生物學的學說の影響せる結果である。一八二九年、彼の英國のデアキンが「種の起源」(Origin of Species)を出すや、思想界は空前の盛況を呈し、其の根本觀念たる自然淘汰の原則は、藝術の方面にも影響を及ぼし、一般の好奇心は、人生問題を個人及び社會の兩面より觀察し説明せんとし、理性と經驗とは感情を排斥し終り、今や一の理想的假定をも無に歸したのである。従つて小説の如きも、時代の科學的發展を蔑視することが出來ない。其の存在の理由と道德的價值とは、全然之に基かねばならぬ様になり、從來の抽象的哲學的人格は一變して、理化學の法則に支配さるゝ生物學的人格となつたのは、また自然の理である。換言すれば、斯様な小説の科學時代に順應せることは、恰も神學とスコラ哲學との全盛期に、古典文學の發達を見るのと同じである。斯くて此の風潮は益々旺盛となり、所謂經驗的小説は社會に瀰漫し、其の結果として更に「醫學的小説」(Medical Novel)の發達となり、神經病學の原理及び其の基礎となり、感情の精緻な研究、肉體的健康

の微細な試験、其の道德的影響の調査なき、實に科學的應用の及ぶ限りを盡したのである。一體「ゾライズム」(Zolaism)に就て、御本尊のゾラは、之を實驗小説(Les Roman Experimentel)及び自然派小説家(Les Romanciers Naturalistes)の二論文に於て、「人間は決して心靈的精神のものではない。單に一種の物質であり、一個の機械たるに過ぎない。而して其の物質的現象又は社會的環境は、全然科學的に之を測定することが出来る」と論じて居るが、これは當代の科學萬能思想から來る當然の論理的歸結と思はれる。

一般に自然主義は、感覺的現實世界を経験の儘に描寫するを以て藝術の本義とする主張である。自然派の藝術家は、自然界即ち現實界の事象を有の儘に描寫し、其の間に何等の撰擇をも區別をもつけない。又絶對的客觀を神聖なる義務とし、其の著作に自己の個性を表現せんと努める。この要領は自然派藝術家の悉く一致する點であるけれども、理論の細目や實現方法に至つては固より千差萬別である。然らば「自然派は何故に自然を描寫するか」——該問題の提出者ソオヴァジョーは、何故にの疑問に對して、(一)人間教化の手段として自然を描寫する。

(二)人間の模倣性満足の喜悅から來る單純な自然描寫の二つとして居るが、此の事は次項に述べようと思ふ。人間が自然の法則に支配せられ、其の影響を受くることは著大であるけれども、必ずしも是のみに終るべきものではない。人間は自然に抵抗し、自然物を制御する能力を有して居る。文化の發達は、一面に於て此の抵抗力制御力の發達を意味するに外ならない。されば人類の靈妙な精神作用は、單に自然科學のみで之を解明し得るものではない。佛蘭西に於て寫實主義が發達して自然主義となつて居た間に、露西亞に於てはドストイェウスキー及びトルストイ等の文豪が連りに名著傑作を公けにし、寫實主義を變じて一種別異のものとなした。即ち事物及

び人格の描寫に附するに道德的判斷を以てし、讀者は之によつて直に教訓を受くるのである。佛蘭西自然派の多くは、外形を見て精神を知らず、主として事物に注意して其の生命を忘却して居る。故に彼等の眼は間接の實在のみに及んで、直接の實在に達しない。ゴンクール、ゾラ、モオパッサンの小説中に幾何の實在的描寫があらうか、殊にその模倣者に於て疑ふべき點が少くはない。従つて露西亞や佛蘭西本國に於ても、アルフォンツ・ドーデなどの如く、自然派の變態心理的研究を嘲笑し、寫實に加ふるに精神を以てすべきを痛論したのである。

斯かる間に、獨逸の哲學や藝術も佛蘭西自然派の影響を受けて、一八八〇年代から自然主義の色調を帯びて來た。シ・オープンハワーやニーチェの國に於て、ブライブトレン、バル、トファート、ズウデルマン等の自然派の色調の濃厚な藝術家が現はれた。「日出前」、「ハンネレの昇天」、「沈鐘」などで廣く名を知られて居るハウプトマンの如き、實在描現に對して絶大な藝術的才能を有したと言はれて居る。又瑞典のストリンドベルヒは、「下女子」なる小説を著して、自然主義を極度に應用し、甚だしく當代を驚かしたのである。英國に於ては、アンソニー・トロロープは華麗の筆致を以て、明白な寫實主義と、チールス・リードの精神的寫實主義との連鎖をなしたのである。

併し物が窮極に達すれば必ず反動的現象が起る。自然主義も極端に進められた結果、反動的機運は其の内部に醸成せられ、現實の精緻な描寫は一躍して空想の世界に入り、象徴的神秘的色彩を帯びて來た。蓋し瑣末の事物も、之を描寫することが精細に過ぐれば、自ら靈化せられて、一種の神秘的色彩を帯ぶるに至るは注意すべき事實であつて、極端な自然派の作物に接する者の常に認むる所である。故に空想を惡み、主觀を排した自然派が約

變して、其の正反對なロマンチックとなつたのは怪しむに足らない。「織匠」の作者ハウプトマンが、「ハンネレの昇天」、「沈鐘」の詩人たるが如きは最好例である。自然主義に關しては、明暗兩面に於て、幾多の論すべき點があるけれども、いまは其の違がない。併し自然主義の藝術家が科學的精神の時潮を汲み、現實的社會に題材を求め、是等を平易に有のまゝに描寫した事は、藝術が一般民衆の興味を集め、隔絶したる國民生活と藝術的文化とを近接せしめる有力な原因となつた事を一言して置く。

ソオヴァジヨの自然派觀と教育問題 吾人は前項に於て、「自然派は何故に自然を模倣するか」といふ重要問題に觸れて置いた。此の問題の提出者、ソオヴァジヨ (David Suvajet) の解決は、單に十九世紀のみならず、古來一切の寫實主義、自然主義の解釋に新光明を投ぐるものである。

(第一) 人間教化の手段として自然を描寫する——即ち寫實主義は英國及び露西亞の小説に於けるが如く、宗教又は道德を傳へ、或はソラの作物に於けるが如く、實證哲學をも教へんが爲に使はれて居る。此の場合に於ては寫實主義は教訓といふ目的に對する手段であるから、ソオヴァジヨは之に「教化的寫實主義」と命名して居る。

(第二) 人間は模倣衝動を有し、之が適當な満足は快感を惹起する——即ち寫實主義はこの模倣の天性に従ひ、精細な描寫を悦ぶの餘り、單に自然を寫生することがある。フロオベル、ゴンクール等の藝術的作物は之に屬して居る。これは「純藝術的寫實主義」といふべきものである。

なほ詳しく説明すれば、ドストイェウスキーは、「自分は空想の夢ならぬ現實の生活を窮めて、吾人の生命の源泉たる主基督に達した」と言つて、其の寫實小説の中で、一種の基督教と神秘的社會主義とを教へて居る。トル

ストイ、イブセンの極端な教化的傾向は説かないでも明瞭であるが、佛蘭西では既にバルザックが、「藝術家は人類の師を以て任すべきである」といひ、ゾラは唯物論に依つて國家國民を救済しようといふ抱負を以て藝術的創作に従事したのである。ゾラは人間は一個の器械であつて、其の純物質的現象は科學的に測定することができる。否人間のみではない。社會的境遇も亦化學的・物理學的であると信じて居た。併し乍ら此の唯物論的研究は何の役に立つのであるか。ゾラは夫れに答へて、「吾人は全世界と共に——科學に依つて自然の征服と人間勢力の増大といふ大事業を遣つて居る」と。而して小説は社會や人類の生理學であり科學であり唯物論の教科書である。故に人類を愛する者も佛蘭西を愛する者も等しく自然主義に歸依すべきである。「科學的形式を適用したならば、佛蘭西は何時かアルサス・ローレーヌを取返すであらう」。「佛蘭西共和國は自然派となるか、然らずんば全く存在せぬであらう」。ゾラの自然主義は斯様に祖國救済の使命をもつて居たのである。

純藝術的寫實主義の起源を、模倣の天性に歸したソオヴァジの説は未だ十分とは言はれない。フロオベル、ゴンクール等の自然主義、純藝術主義——藝術の爲の藝術——は無意識的な模倣の天性に基く許りで無く、又意識的な世界觀の結果であつて、やはり唯物論を基調として居る。これに關してはゴルトシュタインの論文「審美的世界觀に就て」(Über ästhetische Weltanschauung)に叙述して居る所が最も傑出して居る。此の論文中にはゴンクール兄弟の日記に就て論じた所があるが、此の日記の世界觀は極端な唯物論である。「生命とは何か、分子集合の利用に過ぎない」と。此の唯物論は更に深刻な厭世觀と結合して居る。蓋し純機械的世界觀の無意義は彼等の心に深い印象を與へたのである。又政治上社會上の状態に對しても悲觀的絶望的ならざるを得ない。歴史もまた

彼等に取つては無意義な事件の生滅に過ぎないので、彼等の該博なる史上の知識も、たゞ彼等の唯物主義に加ふるに歴史懷疑主義を以てするのである。斯様な宇宙及び人事の無價值、無意味の中に生存するものは、抑も何を信じ、如何なる價値の爲に生きてべきであるか。夫れは唯だ藝術あるのみであつて、藝術以外のものは悉く虚誕である。故に吾人は藝術を信じ藝術的價値の爲に生きてべきである。人生は藝術が無くては永久の凋落である。腐敗である。藝術の世界は不死の世界であり、一切の價値の破壊の中に藝術のみが存在を続けるから、藝術は死せる生命の防衛劑であり、分裂せる價値の調和者である。併し藝術は人生に意義あるものを目的としてはならない。藝術は文明生活や人類に取つては何等の意義あるものではない。藝術は自己目的である。——藝術の爲の藝術、即ち *l'art pour l'art* である。此の近世の流行語は、上述の社會的精神的關係から起つたので、其の中には(一)消極的には藝術に對する道德の制限を排斥し、(二)積極的には萬物は皆等しく藝術の對象となることが出来る——萬物の價値には上下がないから之を對象とする藝術は結局形式主義となる——いふ兩立論が含まれて居る。

純藝術主義は茲に別問題として詳説しないが、彼のソオヴァジの所謂「教化的藝術」が直に國民教育と接觸して來るのは明瞭である。即ち美以外に何等かの道德的、社會的、教育的効果を齎らさうとする。これは又彼の古典派及び之から發達した浪漫派に流れて居た「藝術と道德」といふ様な問題に吾人の考へを誘ふのである。併し藝術の爲の藝術、即ち何等かの功利的價値を目的としない藝術であつても、眞にそれが偉大なる藝術である限り、其の儘で、多くの人間を啓蒙せしめ解脱せしめる力を與へることは明瞭である。即ち藝術の爲の藝術であつても、それが眞の藝術である限り、人間を「美」に導き入れる力がある。美に入りさへすれば人間は自由となるから、

従つてシルレルの言の如く、之から道德及び眞理への向進力を開放することは容易である。何となれば、唯適宜の動機と機會とを與ふれば足るからである。故に人間を美の世界に導き入れるといふことが重要事である。教育といふ見解からすれば、教化的藝術は、夫れ獨自で先づ讀者を美に導き入れ、自由になし、自由になつた讀者に或功利的價値を與へるといふ——三過程が潜在して居らねばならない。反之、純藝術即ち *l'art pour l'art* はたと讀者を美に導き自由を得しめるだけである。その自由の境地から更に進んで道德と理性とに行くべき道を教へはしない。それは讀者の自由意志に任せる。併し或教育への力がないとは言へない。

自然主義の大藝術家——世人はゾラとドストイェウスキーとを聯想するであらう——は或狂信的な眞理熱に依つて感化せられて居る。而して人生の俗事や醜惡が頗る根本的に描述せらるゝ所に、特に此の大膽な眞理熱が其の儘に現はるゝ。若し世人がゾラの「娑婆」、ドストイェウスキーの「カラマゾウ兄弟」を想起せば、是等の藝術家が常に何物も宥怒するな、事實の前に應ずるな、嘔吐する物であつても恐るゝな、自己の理想主義から何物も加ふるな、假令道德的缺陷があつても非難すなと叫喚して居るのを觀するであらう。此の眞理熱は又詩人の固有の人格にも及んで居る。彼等は自分の眼前で毫も喜劇を演じようとはせぬ。眞の自己以上に自分を見せようとはせぬ。斯かる根本調は、力強く聞えさへすれば、嫌惡な禽獸的描述でも厭はない。併し此の特色ある根本調の爲に自然派の藝術が素材、質實、眞摯な意義に於て、或作用を及ぼし得ると假定しても間違ではない。自然派藝術に接して、事實の眞相を大膽に洞觀する方法を學び、斯くて人生の瑣事と難事とを平調に調停し、而して自己胸中の人間臭さ過ぎる事に對して慧眼を得、斯くて自己修養に進捗された人間は尠少でない。勿論此の際自然派的作物

が他の方法で過激に作用し、是等詩人の作物に囚はれて、粗野な宴樂的事實に沈潛したうら若い心情の人間あるを著過するのではない。併し此の爲に善良な影響を誤解してはならぬ。特に讀者が自然派作物を批評家的情操と慎慮と史料とを以て緝讀する時に此の善良な影響が存する。其時彼れの峻烈な雄々しい人生感情は、前述の様に覺醒されるのである。イブセンの「幽靈」や、ハウプトマンの「平和祭」などを思ふと、此の種の詩歌の前では、廉價な樂觀主義や、稀薄な情感主義や、柔弱な恍惚は存在することが出来ない。世人は偉大な自然的作物から發露する所の、此の便宜に迷想を治する作用、又は生存競争に鍛練せしむる作用を安く評價してはならない。

藝術教育への國民的覺醒 平民藝術と謂はれた自然派の藝術が、民衆的傾向を汲んで、現實的題材を描寫したことが、聽て隔絶して居た藝術と民衆とを接觸せしめる一機縁となつた事は前にも一言したが、科學的物質的文明の生んだ暗黒の世界、人生不安の世相から、「吾々は吾々の慰安を藝術に求むべきである。藝術は統一であり調和である、この統一と調和の破れた科學の世紀には、民衆の爲に藝術的文化の復活が肝要である」といふ覺醒の聲が高くなつて來た。それは物質萬能の聲の高かつただけ、夫れだけ強い反動として發現したのである。人類は個人の平和及び國民の有機的統一に對して不絶努力して來たが、調和や統一に對する憧憬が、十九世紀後半程デモクラチックの勢を以て現はれたことはない。晩近の藝術教育思想は實に此の憧憬から啓發されたのであるといへる。尤も十九世の前半に於ては、爛熟した新人文的貴族的文化があり、又藝術教育思想も流れて居た。假令夫れが調和的發展の思想、即ち人間の調和的發展には其の藝術的才能をも發育せしめねばならないといふ考へであつたにせよ、相應に上流階級や教育者間に重んぜられた。併し夫れは勿論左様な特別階級のみに限られ、一般

民衆には大した反響を及ぼさなかつた。シルレルの倫理的藝術教育論も、哲學的推究を離れなかつた許りでなく、有識階級間に歓迎されたのみで、未だ夫れを一般民育上に實現するといふ段には勿論達しなかつたのである。併し精神文化の花は一粒の果實となつて、何處の國土にか再び萌芽する春がある。人間の努力に依つて作られた藝術的文化財は、實利一過、科學萬能の時代にも、なほ石に彫まれて後世に傳はつた。十九世紀末に近づくに従ひ、世人は漸く世の大勢の不良なるを覺り、國民の統一、社會階級の調和及び藝術的教化に就て眞摯に考へるやうになつた。故に當代の藝術教育思想は、從來歴史的に發達して來たものに、社會的意識——即ち一方に於ては、國民間に教化の分裂の存することは大なる不幸であるといふ意識と、他方に於ては、餘裕の時間を以て藝術を享樂し得るといふ意識——なごの數多の動機が加はり、隨つて一般的包括的な文化問題、教化問題として國民的意識に明瞭に現はるゝに至つた。それは實に十九世紀の中葉、即ち當時開催せられた萬國博覽會が直接の刺戟となつて居るのである。

英佛兩國國民の覺醒

即ち一八五一年倫敦に開かれた萬國大博覽會は、歐洲諸國の美術工藝品が、(一)黄金萬能時代以前のものとは全然異なり、趣味品位に於て下劣なること、(二)堅實な工藝的傳説が全然地を拂ふに至つたこと——を眼識ある人達に赤裸々に見せつけた。殊に英國は彼の巴里博覽會なきに於ても、自國の美術工藝品が佛蘭西の夫れに比較して甚だしく劣等なることを自覺して居たのである。斯様な事が刺戟となつて、其の方面に關する視察團を組織し、佛蘭西其他の列強國へ派出し、其等の發達原因を調査させた時、是等の視察團員は、口を揃へて工藝教育、藝術教育の旺盛なることを力説した。英國は之に依つて大に覺醒する所があり、改良運動

は先づ此の國に於て、造形藝術から始まり、サウスケンシントン博物館の設立となり、工藝教授の改良となり、藝術教育が國家工藝の基礎をなすといふ所に價值を認め、大に藝術教育を唱道し獎勵したのであつた。

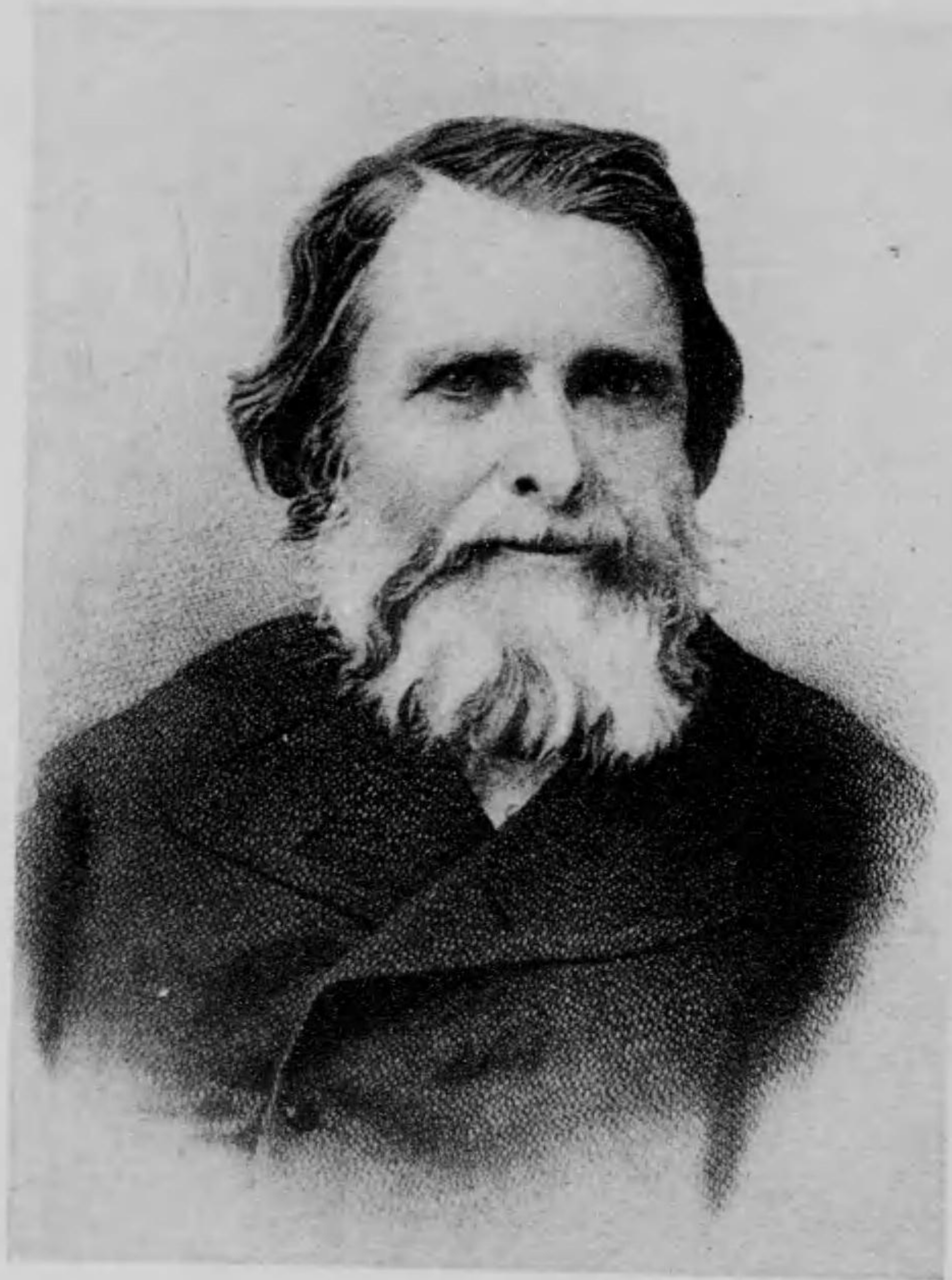
一體佛蘭西人は其の國民性の特色として藝術的文化の創設に秀で、佛蘭西革命以後幾多の政治的社會的事變にあひ、幾多の傷痕を蒙つたにかゝらず、能く之を恢復する能力を發揮した。彼の獨逸人が藝術を思想的に導くに反し、佛蘭西人は能く之を表現的に導いたのである。殊に視覚藝術に關しては、先天的に歐洲諸國民を抜いて居たといつてよい。他の列強國は、概して國民教育に依つて、國民の間に人為的に藝術を産生せしめようとする。即ち藝術的文化の乏しい所に、先づ教育に依つて國民の藝術的能力から開發し、次に藝術的文化財の産生蓄積にかゝる様な具合である。併し佛蘭西に於ては其處に他國よりも優秀な既成の藝術的文化があり、國民の間には天賦の鋭敏な藝術的感受性がある。この既成の藝術的文化財を以て、先天的に秀でた藝術性を導くのであるから、藝術的文化の發達は他國に比して容易なものである。即ち佛蘭西は早くから大藝術國として有名であつた。其の、不良な實業主義の惡影響を被ることが比較的になく、又其の正路に復歸することも早かつた爲め、視覚藝術の方面に於て、殊に機械化を受けて居た英國人を驚かすのは當然である。

就中大ブリテン國に於ては、最も早くから拜金の實業主義が勢力を占め、従つて全工藝界に有害な結果を現はして居たのである。故に同國に於ては、其の反動的機運も割合に早くから熟して居たが、偶々藝術評論家として有名なラスキンといふ様な先覺が出で、改良運動の主唱者となつた爲め、一層藝術運動の氣勢を高め、他國の模範となつたのである。併し英國に於ける此の運動は、最初は工藝の範圍に限られたのである。何となれば、工

藝上に於て最も拙劣な技能が明瞭に示されたからである。のみならず、又之が藝術と國民との間の失はれた接觸を再び定立するに最も適し、且つ素人藝術家の叫びが此處で最も早く成功する望があつたからである。色々の藝術學校は設立せられ、上流階級の人は素人藝術家會を組織し、美術學校なきと協同して、工藝の改良發達を職能とする共同の國民的運動を起すに至つた。殊に古代の藝術的形式を學び、高尚雅味の様式を模寫する傾向が起つたが、間もなく其の効なきを覺り、自然に歸ることを叫ぶ様になり、其處に東洋藝術、殊に日本美術の影響を受けて、始めて有効な新發展の源が開けたのである。以下當時に於ける英佛兩國の先覺者の思想を吟味しようと思ふ。

ラスキンの思想 ジョン・ラスキン(一八一九—一九〇〇)は十九世紀に比類のない程の藝術批評眼を備へ、また自ら藝術的才能を有すると同時に歴史家、社會改良家、國民經濟家、工藝改良家として、極めて多方的な天才的能力を發揮した人である。のみならず、高尚な人格者で有つて、其の言論に於けると同じく、其の人格にも美と善と聖との驚嘆すべき綜合を示して居た。ラスキンの美學は倫理及び宗教上の見解を包含し、又其の倫理觀及び宗教觀は美を融合して居たので、彼れの思想には常に善、美、聖の三者が混沌として調和して居たのである。而して之は彼れの人格に於ても認められるのであるから、従つてラスキンは思想言論に於てのみならず、其の人格に依つても藝術運動の先驅者であつたといつてよい。斯様な事から考へて見ると「趣味性は健全なる道徳性である、趣味を養ふことは品性を造る所以である」といつた彼れの詞に益々意味がある。

ラスキンの見解に従へば、眞の道徳的人格は藝術的修養によつて得られるから、吾々は藝術教育によつて人間



RUSKIN

を神聖の域に進め、世界を平和に導くことができる。現代社會の頹廢、國民の墮落は確かに藝術界の墮落に基づくものと思ふ。故に藝術心の向上は總て近代の社會救済の道となるものと信ずる。然らば藝術心は如何にして向上せしむべきであるか。眞の藝術的作品は、至誠、即ち忠實なる情操に依つてのみ成立せしめられるから、眞の美に迄の陶冶は、必ず純粹高雅なる情操を豫定し、之を其の教育的努力の中に含ましめなければならぬ。眞の藝術的作品に對する者が、精神上の活力及び健康と喜悅の感情の發動上に有益な影響を受けるのは、實に此の事あるが爲である。藝術的作物内に潛在して居る誠忠なる犠牲的精神は、其の藝術品を永遠の寶物となすものである。而して此の犠牲的精神の大なる豫件となるのは、(一)萬事に最善を盡さうとする確實なる意志と、(二)藝術的作業及び努力を増進することは、總て其の善の上進に外ならないといふ確信である。往古の作業は極めて勤勞的であつて、全心を傾注して成就せられた藝術的作品が尠少でなかつた。然るに現代の作品は、たゞ金錢を目的とし、物質的報酬に應じて勞働した結果生じたもので、全人格及び全心を傾注して製作されたものはない。眞實及び公明正大の心情も藝術に不可缺もので、單に表面の美を衒ひ、技巧を弄し、虚偽的裝飾を施すことは、自己を賤しくし、情操を腐敗せしめる行動である。而して斯様な惡風は機械文明の結果生じたもので、即ち機械に依る作業に於て見らるゝ所であるから、現代の人間を正しい手工に歸らしめねばならない。凡て善良なる作業は自由なる手の作業である。善良なる意志と、活潑なる感情と、全心を傾注して製作されたものは、假令それが未成品であつても貴重するに足るものである。何となれば、其の作品の翫賞者に、作者が如何に誠忠に、如何に幸福に、如何に熱心に、一切を捧げて働いたかを悟らしめるからである。斯かる作業は實に人間に高價な或物を與ふ

るものである。

故に現代社會の腐敗を救済するには、先づ作業に依らねばならぬ。作業は生計を立つる上に必要なるのみならず、總ての階級に對する教育の手段である。尤も作業にも二通りがある。(一)藝術的作業——は人間の生活に適し、人間に威嚴と勢力とを與へて其の精神を高尙ならしめるが、(二)機械的作業——は人間の價値を失はしめ、人間の肉體と精神とを劣悪粗野ならしめる。現代の分業と不良なる實業主義の蔓延とは、眞の作業を破壊した許りでなく、作業者の幸福を滅却し、社會的頹廢の根柢となつたのである。今や往古の職工的誠實及び職工的熟練は地を拂ひ、忠誠と質素、満足と幸福の情操は燒盡し、數百萬の人間は內的創造力を働かすことなく、日々無味單調に機械の様に作業して一生を終る。人生の禍はこゝに醸成せられる。作業は最早充實したる心情、純潔、敬虔なる意志に基かない。私の信仰、私の希望の發現でもない。藝術的作業は既に滅亡したのであるか。人間の作造品には人格的印跡——人間の作業の特色たる——が消滅したのであるか。然り、行動に對する責任感も消滅し、吾々が將來の民族の爲に建造し、吾々の作業、吾々の教化、吾々の信仰、吾々の愉快、吾々の苦痛を、之に傳へんとする義務の意識は永遠に其の力を失つたのである。我が英國の工藝品及び建築物は、既に過去の建造物の様に感情の純雅を語らない。藝術は最も單純なる作業に於てすら、其の活動的原理として高い社會的任務を盡すものである。作業のない生活は罪惡であるが如くに、藝術的要素を含まない作業は野卑である。藝術は調和的勢力を有するものであるから、個人的には之に接する人々の喜悅、健康、精神力の活現に價値あると同時に、社會的には反對を緩和し、階級的差異を減少し、人間の間の障壁を撤去し、分離したるものを統一する力がある。また藝

術的人生觀は同時に忠誠、敬虔の情であるから、之に依つてのみ吾々の教化の滅裂及び頹廢を救済することが出来る。即ち藝術教育が重要事となつて來ると論じて居るのである。

モリスの藝術社會主義

ウキリアム・モリス(一八三四—一八九六)は詩人であると同時に工藝家であり、

晩年に及んでは一種の社會主義的思想を持して居た。藝術に關しても平等的思想を代表し、職工界に藝術を普及せしめることに依つて始めて眞に精神的、民衆的な藝術的文化を成立せしめることが出來るとした。即ち彼はラスキンの思想を繼承し、其の説を敷衍して工藝の方面に應用し、工藝を以て國民の藝術として盛に獎勵すべきことを唱道したのである。一體モリスの考へでは、現時の社會に於ては、(一)如何にして勞働者に十分のパンを得しむべきかといふ事も一の重要問題であるが、夫よりも尙ほ大切な事は、(二)如何にして勞働者に精神的慰安を得しむるかといふ事である。然るに之を得しむるには、彼等をして所謂工藝美術の製作に従事せしむるに若くはない。工藝製作に従事するのは、機械の運轉のみを取扱ふのとは違つて、多少自己の精神的工夫を働かしめるから、必ず之に興味の伴ふものである。是は彼等に取つての最大幸福であるから、現時に於ては工藝美術を盛にしなければならぬと論じた。

(一)藝術は享樂者に高潔な喜悅の情を發せしめる——一體藝術的修飾の目的は、人間の成すべきもの、又は要するものに就て、喜悅の情を吸入せしめる點に在る。人は自己及び隣人の家を眺むることに依つて眼を喜ばしめ、精神的慰樂を獲得するに至らねばならない。現時の如く有識有産階級のみが、藝術を奢侈贅澤なる生活上の事柄として居る様では、人間の生活から美を奪取し、人間を再び野蠻未開の状態に復歸せしめるに過ぎない。國民的

藝術、即ち國民により國民の爲に作られた藝術のみが、能く其の享樂者使用者に喜悅の情を發せしめる。

(二)藝術は製作者に高尚な喜悅の情を發せしめる——一體製作し勞働する人間には、其の美に對する生來の希望を満足せしめる丈の自由な時を與へねばならない。藝術的作業は製作者に自由と愉快とを與へる。故に藝術を平等的にし、日常平凡の作業を高尚にし、之に依つて苦痛と恐怖との代りに希望と喜悅とを發せしめ、斯くて藝術の力に依つて、人を眞の作業にまで獎勵し、世界を一全體として保持する勢力とならしめることは切に望む所である。

モリスの見解では、斯様に工藝美術は、第一に先づ之を使用者側から見ても、一般に高潔な愉快を與へるものであるが、第二には之を作造する上に於ても、工藝美術は國民に快樂を與へるから、従つて之を國民的藝術として獎勵しなければならぬと主張するのである。現時上下の社會に漲る投機的利慾的傾向及び壓制的作業組織は、生活上最良の慰藉となる國民的藝術の觀照眼と製作能力とを無くしたのである。故に吾人は此の次第に擴大し行く機械的作業の流動中に一確定地を設立し、之に到達しようとする努力に於て、人類的價值あり且つ希望に滿ちたる作業を發見することを要する。此の要求に充當するものは工藝的作業である。此の時代的缺陷の深淵をふさぐものは、素朴と正義との二徳を具ふる眞の國民的藝術、即ち工藝美術の復興にある。此の状態に於てこそ、如何なる勞働者も皆能く職工であり藝術家であり且つ人である様になるのであると論じて居る。

クレインの汎藝術主義

ラスキンの思想を汲んで藝術を主張したものにモリスの外にウォルター・クレイン(一八四五—?)がある。彼は總ての人間に對する藝術、總ての事柄に於ける藝術といふこと、即ち汎藝術主義を唱道し、藝術の力によつて全生活を照し、最下級の人間に迄も其の幸福を擴張しようとする主張したのである。

一體クレインの考へでは、藝術は一部社會の占有に歸すべきものではない。藝術の生存條件は人生の生存條件であり其の最高表現である。然るに藝術を金錢上の事柄となし、特別な階級の専有に歸せしめるのは甚だ不都合である。眞の大藝術品は公共的作品であり、強烈なる鼓舞的勢力を發し、市民的、團體的、國民的理想を表示するものである。而して社會的に有益な藝術は、人生を其の全體に於て圓滑にし、生活の喜悅を醒まし、極度の奢侈と極度の貧窮との間に於ける反對を調和し、新しい生活上の理想を立てる任務を有するものである。そして共同的、人道的、同胞的精神は全人類に幸福を齎らし、藝術にも益する所が多い。美果を得んとする者は、先づ其の根に培はなければならぬ。高尚優美な藝術的文化の精華を發せしめんが爲には、先づ其の根本問題たる國民と藝術との間の障壁を除去し、國民をして藝術に關係する機會を與へねばならぬ。然らば國民生活と藝術的文化との間の障壁とは何であるか。それは現代の機械的作業に外ならない。この機械文明こそは藝術的活動と國民生活を隔離せしめた最大原因である。今や吾々は職工と藝術家、機械的作業と藝術的作業とを別々に有して居るではないか。なほ今日の不良なる實業主義や商賣主義は、現代生活から美を除去することに力を用ひ、美術展覽會などは全然商業の性質を帯び、藝術の殿堂は全く商店化したのである。依つて吾人は高唱する——藝術的に享樂し、藝術的に創作する力を期待する前に、先づ國民の爲に、美及び藝術を吸收することの出来る環境を作る必要あることを。吾人は再言する。生活上の喜悅を復活し、人間的價值ある作業に對する献身的愛情を鼓舞し、

分離的階級の調停融和の道を開通するのは藝術の負ふべき高い責務であると。

フワイエーの思想

自然科學の勃興に伴れて、實科主義が教育界に愈々其の根柢を固むる様になつた所から、古典を重んずる人文主義の人達は大きな脅威を感じるに至つたが、此の人文主義の人達が其の立場を守る武器として使用したものは形式的陶冶論であつた。形式的陶冶論に於ては、其の學科は夫々異なる陶冶的價値を有すると共に、左様にして練られた能力は、又他の精神力の發達を助くるにありと見るのである。斯かる見地から古典の教育は、科學の教育とは違ひ、人間の知識や思考の方面だけでなく、其の情意に觸れ、全人格を練り上げる價値を有して居ると主張する者が現はれて來た。科學的教育に對する斯かる反抗は、英獨佛諸國に齊しく現はれて來たが、就中佛蘭西のアルフレッド・フワイエー（一八三八—一九二二）の如きは其の主なるものである。

フワイエーの見解に依れば、人文科の目的は、兒童の精神中に存する眞に人道的な思想及び感情を眼中におくものであるから、文藝が其の根本である。新しき眞理、新しき効用は實用を旨とする科學から來るものではなく、國語、國文學、國民藝術、古典文學の必要はこゝに存する。科學的教育には、（一）材料が餘りに多過ぎる、（二）餘りに功利的である、（三）餘りに専門的である——といふ三つの缺陷がある。之に對して古典は十分の教育的價値を有して居る。希臘羅馬の古代自由市民は十分の閑暇を有し、一種の藝術的文化を形造り、其の思想感情を最も能く言語や大理石に表現したのである。何人も希臘羅馬の文藝が——他の凡ゆる文藝の中で——最も能く調和し完備し、思想感情を十分に能く一致せしめたものである事を認めるであらう。實に古代語は吾人の言語よりは切實に、自然に、健全に想像や感情に訴ふる長所を有して居る。古代人の詩は、二三の詞で描かれ、兒童の心に直

觀的に其の光景を描かしめる。例へば彼のヴァーヅルの詩の一句を取つて見ても、恰も小建築物の様に地盤から屋根まで完備して居る。ヴァーヅルの詩は、兒童に美及び藝術の普遍的法則を示して居り、言語や詩的才能を培ふ力を持つて居る。これ羅典語の研究が兒童の趣味を發達せしむるに適せる所以である。十分なる古典の知識なく、古典との直接關係なき場合には、完全ならんとして努むる兒童の心に感激を與ふることは出來ない。或者は問ふであらう——即ち希臘羅典語は神秘的な力を有して居るか、是等の古典は一の宗教であるかと。若し其の神秘力や宗教なるものが、深遠な活力を意味するものとすれば夫れで差支へはないが、併し其の力は全く自然的であつて、種族や國民性の遺傳と同じく、決して超自然的の力ではない。有識な治者階級に取つては、古典的教化は一の宗教と見て宜しいが、併し其の宗教には教義も儀式も無い。即ち近代人の心を自由に開放しながら、而も之を古代の精神と結合する底のものである。若し宗教が漸次に其の力を失ふものとすれば、之に代る唯一の權威は、哲學や藝術であらねばならぬ。蓋し科學に於ては永恒普遍の神秘といふものが其の究極に於て不可解の中に残り、人間知識の光明も、忽ち其の大なる暗黒の裡に包まれて了ふのが常である。最高哲學の結論たる人間無智の意識は、常に詩の感興を湧起せしむる情緒の一である。而して抽象的形式を以てすれば此の表現は哲學となり、想像的形式を以てすれば此の表現は詩となるが、藝術、殊に詩は哲學と提携して將來益々宗教の位置を奪ふに至るべきは明瞭である。藝術の社會的乃至宗教的使命の感情が今世紀に於ける全ての大詩人の特徴を形作る原因は茲にある。藝術と哲學とは眞に偉大なるものを無我に愛するものであり、社會の爲に考へ、且つ働くことの習慣を養ふものであり、又古代人に依り徳の最も偉大なるものとして考へられた習慣を養ふものである。人道の理想